

SEEDを持つ少女

くさまる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分の生まれは選べない。生まれながらにして大き過ぎる力を背負った少女は、成す術無く大人達の都合で戦争に巻き込まれて行く。

これは人類最高のコーデイネイターとして生まれた少女が、自分の大切な物を守る為に奮闘する話。

キラの代わりに女オリ主となっています。百合注意。男とはくつつきません。

MSVやアストレイ等まで含めると補完し切れない点が多数出てくると思いますが、出来る範囲で本編原作とは辻褄が合うように注意していますので、大目に見て頂けると幸いです。(ご指摘下さった方、ありがとうございます。)

※戦争の表に出ない特に暗い部分(人種差別や未成年に対する暴力等)、鬱要素多数です。苦手な方はご注意ください。

2020/8/25 タグ及び注意書きを追加しました。自分の認識が甘く、不快な思いをされた皆様には謹んでお詫び申し上げます。また、感想にてご指摘下さった皆様、誠にありがとうございます。

目次

00	Prologue	1
01	誇りを胸に	7
02	成長と進歩	16
03	死神の足音	24
04	地獄を彷徨う少女	35
05	人の優しさを知る少女	53
06	初登校と初任務	65
07	友達	77
08	開戦	88
09	ロールアウト	100
10	再会	110
11	束の間の：	131
12	技術提携	139
13	大天使の産声	144
14	Launch	154

00 | Prologue

この情勢だし、仕方ないよ。——ソラもそのうちプラントに来るんだろ？

あれからどのくらいの月日が経っただろうか。

思い出せるのは別れ際に交わしたその言葉と、不器用に寂しさを隠す横顔くらいだ。

度重なる「身体検査」により朦朧とする意識の中、ソラ・ヤマトは月面都市コペルニクスで別れたきりの幼馴染の幻を見た。

(アスラン、元気かな……。)

このまま暖かい記憶に浸っていたいソラだったが、現実を意識を手放す事すら許してくれない様だ。

「続きた。ほら起きろよ『スーパーコデイネイター』」。

「……え……あ……」

人の皮を被った悪魔たちは、メスや注射器から始まる様々な器具を手にも、今日も少女の身体を弄ぶ。無機質で暗い地下室からは、絶えず悲鳴が木霊する。

C. E. 68 月面都市コペルニクス

腰程まである栗色の髪と、左目の下にある泣きボクロが特徴的な少女ソラ・ヤマトは、てきぱきと荷造りをしている。

年齢の割に高い身長。

スラリと伸びた手足。

絹の様に白くきめ細かい肌。

服を着ていてもはつきりと分かる抜群のスタイル。

僅か13歳、まるで全世界の女性が求める全てを詰め込んだ、いやそれすら超越するような容姿を持つ少女は、荷造りの作業一つだけでも人間とは思えない神々しさを放っている。

彼女は中立国家オーブの保有するスペースコロニー「ヘリオポリス」の工科カレッジへの進学が決まり、一家で移住する準備を進めているのだ。

「ソラ、準備が出来たらこっちでパパとママを手伝ってくれ！ テレビが重い！ 70インチ凄く重いよ！」

玄関からソラを呼ぶ父、ハルマの声が聞こえる。 ヤマト家の家宝はなかなか手強い様だ。

「もう終わるからちよつと待つて！ ええつと、写真とトリイは入れたから、あとはあととはく…」

慌てながらも大切な物を丁寧に箱に詰めていく。いつもはパパタと飛び回っているロボット鳥のトリイもこの時ばかりは羽を畳み、ピッタリのスペースに大人しく収まっている。

先だってプラントへ移住した幼馴染アスラン・ザラが、コペルニクスを発つ際にくれたのがこのトリイだ。驚く事に売り物ではなく、なんと彼のお手製である。

「ごめんね。ちよつと狭いけど、しばらく我慢してね？」

「トリイ！」

「ふふっ。いい子ね。」

衣類等の必要な物を詰め終え、トリイとの短いやり取りの後にトラ

ンクケースを閉める。それと同時に、玄関からはなにやらドタドタと大きな物音が聞こえてきた。

「なんだか賑やかなね……よしっ、荷造りオツケー！ 今行くねパパ！」

手伝いに参加しようと声を掛けるが、返事は無い。

「パパ？ ママ？ ……え？」

玄関に辿り着いたソラが見たものは、倒れ伏す両親の姿。そしてその後ろに立つ、黒いスーツを着た男達だった。

「目標“プリンセス”確認。直ちに確保する」

状況を理解する暇もなく、背後から感じた衝撃を最後にソラは意識を失った。

スーパーコーディネイター。コロニー・メンデルにてユーレン・ヒビキ博士が数多の犠牲の果てに生み出した、人類史上最高のコーディネイター。それがソラ・ヒビキだった。

以前メンデルはブルー・コスモスを名乗る武装集団の襲撃を受けたが、この襲撃を察知していたユーレン・ヒビキの妻であるヴィア・ヒビキは、自分の妹夫婦であるヤマト夫妻に子供を託していた事で、ソラは難を逃れていたのである。

しかし、コーディネイターを忌み嫌うブルー・コスモスにとって、その星であるスーパーコーディネイターは最大の敵であると同時に、貴

重なサンプルでもあった。

廃墟となったメンデルに残されていた資料を偶然見つけ、その存在を嗅ぎ付けたブルー・コスモスの盟主ムルタ・アズラエルは、彼女を確保すべく所在を特定、特殊部隊を派遣した。

「ちよつと手荒になっちゃったケド、キミの家にお邪魔したのはまあそういうワケ。許して下さいね？プリンセス」

おおよそ子供一人に使うものとは思えないほど大掛かりな拘束器具に巻かれたソラと対面するのは、ムルタ・アズラエルその人だった。

「……………あれ……………」

「おはようございます。今日からキミの『お世話』をするアズラエルです。良い子にして下さいね?」

「あずら……………って、……………え? なにこれ!? パパ!? ママ!」

「あー、安心してください。パパとママなら無事です。キミ次第、と言ったほうがいいかな?」

「え……………何を…何を言っているんですか!」

「ですから、今言った通りですよ。キミにボク達のお手伝いをして欲しくてね? そうすれば、元気なご両親とも会わせてあげますから」

銃をチラつかせながら、アズラエルはソラに笑みを向ける。流石のソラも状況が分かってきた。

「っ!? パパとママが人質ってことですか!? どうして!」

人質になっているのが自分ではなく、両親の方であるというのが分からない。ドラマや映画で良く見るのは、子供を人質に親から大金を奪い取る話だ。この大人達は親を人質にして子供に何をさせようと言うのか。

「フム。自分の事を知らない……ですか。あはっ、随分大事にされてきたんですねエ?」

「どういう意味ですか!?!」

「せっかくの機会です。ボクが教えて差し上げましょう。社会科のお勉強も踏まえてネ?」

ソラはアズラエルから自分がどういった存在なのかを聞かされた。全人類で最も優れたコーデイネイターである事、故に反コーデイネイターの組織に目をつけられていた事、そして目の前の男がそのトップである事。

「——っっ!!?」

自分の置かれた状況の不味さを理解し言葉を失うソラ。しかしそれだけではない。

(パパとママは、私の本当の親じゃない……?)

「アッハッハ!!そりや驚きもしますか!けどボクも驚いているんですよ?女性だとは聞いていたけど、まさか核よりも危ない兵器がこんなに可愛らしく作られているなんてサア!」

「兵器って……私はそんなじゃ!」

「兵器ですよ!キミがもしザフトの軍人さんになって、戦場でその能力を開花させたら?キミの指導で飛躍的に練度が高まった兵士がわんさか戦場に出てきたら?キミの生んだ技術が武器として地球に向けられたら?こちらは核の1発や2発なんて簡単に超えるほどの損害を被ってしまうんですよ!ああ恐ろしい忌々しい!そんな存在を生み出す奴等を、奴等自身の力で破滅に導くのがボクの役目です!そしてその力は既にこの手の中にある!!今からワクワクし過ぎて……ああもう最高です!!!」

「そんな……事って……!でも、パパとママを助けるには私が……私

が頑張らないと二人はっ！」

「正確にはパパとママじゃないんですけどね。でもその通りです。物
分かりの良い子は好きですよ。」

「どっ……したら……どうしたら二人を……、か……解放してくれる
んですか!?!」

様々な感情を爆発させ、涙を流しながらソラは問う。

「勿論、コーデイネイターを滅ぼしたらですよ。キミの力を使えば数
年も掛からないでしょう? でも大丈夫です。キミが直接手を下す訳
ではないのですからね。」

仮に両親が解放される事になっても、自分がただ自由になれること
は無いだろう。そう分かっているながらも、今のソラには従う他に手が
ないのも事実だった。

(今は言うことを聞くしかない……。でも強くなって、賢くなって、絶
対にパパとママを助けるんだ!!)

ソラ・ヤマト。わずか13歳の少女の孤独な戦争が幕を開ける――
。

01 誇りを胸に

ブルー・コスモス管轄下 ロドニア研究所

ブルー・コスモスという組織は、簡単に言えばナチュラルの中でもとりわけコーデイネイターに強い憎悪を持っている人間達の集いである。ナチュラルがコーデイネイターに対して個人の能力で大きく劣るのは揺るぎない事実だが、それを何らかの形で身をもって痛感した過去を持つ者がほとんどだ。生まれながらにして、逆立ちしても敵わない事が決まっているという事実は、彼等の心の奥深くに強烈な劣等感を植え付けた。弱い人間たちが、それを誤魔化したいが為に生み出してしまったのが、このロドニア研究所だった。

ブルー・コスモスの中でも一部の者しか知らないこの施設では、能力でコーデイネイターに対抗し得る人材の育成という建前の元、世界中から集められた身寄りのない子供達を被検体とした、非人道的な人体実験や戦闘訓練が日々当たり前のように行われている。幸せを掴んで欲しいという願いの元に遺伝子操作されて誕生するコーデイネイターを否定しておきながら、禁忌には手を出さずにはいられない、いわばナチュラルの闇の結晶のような場所だ。

そんなブルー・コスモスの巣窟で、二人の人物が対面している。一方はその主、ムルタ・アズラエル。そしてもう一方は、人類史上最高と言われるコーデイネイターの少女、ソラ・ヤマトである。

欲しかった玩具を手に入れて興奮冷めやらぬ様子のアズラエルだが、その瞳の奥に宿るのは憎しみの焰。彼女個人に恨みはなくとも、コーデイネイターという存在そのものを根絶やしにしない限り消えることのない、呪いの焰である。

「それで、私は何をすればいいんですか……?」

連れて来られた時こそ堅牢な拘束具に巻かれていたソラだったが、人質で精神的に拘束した際に錯乱等が見られず落ち着いている事か

ら、今では肉体的な拘束は解かれている。

「まず、キミには身を持って戦争を知ってもらいます」

「戦争を……知る……？」

「そ。具体的には、戦争は何故起こるのか、この世界で人間の悪意がどれだけ恐ろしいのか、その中で自分の身を守るにはどうすればいいのか、その為にはどんな技術が必要になるのか、そういった物をここで生活する中で身近に感じて、知って貰います。で、我々はそれを観察するだけ。簡単でしょう？」

サラリと言つてのけるアズラエルだが、過ごしてきた世界が違い過ぎるソラは理解が追いつかない。

確かに地球プラント間の緊張は非常に危険な所にまで達している事はソラも知っている。しかし目の前の男は、まるで今にも戦争が始まる事が確定しているかのように話を進めている。

「と言っても、何も知らないキミを修羅場に放り込んでは流石に結果が見えています。こちらとしてもまだキミを壊すわけには行かないので、しばらくは教官を付けて最低限の軍事教練を受けて貰います。ボクが知りたいのは、そこから先の君自身の力による成長の仕方ですね。細かい説明は教官から。——じゃ、頑張つて下さい。」

ボクはこれでも忙しい身でねとボヤきながら、呆けるソラを尻目に部屋を出て行くアズラエル。それと入れ替わるように一人の男が入ってくる。

「デュエイン・ハルバートンだ。以降お前の教官を務める」

「……あ、ソ、ソラ・ヤマトです」

「聞いている。本来私の様な立場の人間が就く任務ではないのだが、事情が事情だからな。——しかし驚いたな」
「？」

「いや、こちらの話だ。今日から毎日お前に軍事のアレコレを叩き込む。13歳の子供だろうが容赦はせん。ここでの生活は24時間365日が最前線での戦いだと思え。死ぬ気で学び、生き延びよ。私から言えるのはこれだけだ。」

(若過ぎる……いや、幼い。この子に限った話ではない。急に教官を務めろと言われて来てみればなんだここは。……いや、これも我々の罪だという事か。)

まだ正式に宣言は出ていないが、現在地球では“地球連合軍”としての各国の軍の統一化が水面下で進んでいる。当然一枚岩というわけには行かないが、世界が明確にナチュラル対コーデイネイターという構図になりつつある中で、ブルー・コスモスと軍の接触は避けて通れない道だった。

ブルー・コスモスではなく、ナチュラルであることと正面から向き合い、一軍人としての誇りを持っているハルバートンからすれば、この研究所の在り方は到底受け入れられる物ではない。しかし作られた理由は分かっってしまう、そしてそれを自分の力ではどうにも出来ないという無力さに、震える拳を握りしめる他無かった。

夕刻 教練終了後

「では、今日はここまでとする」

「ありがとうございます」

(っ、つかれたああああ……)

一日の教練を終え、内心ではぐったりと机にもたれ掛かってしまいたいソラだったが、ハルバートン曰く、本当に大変なのはここからだそうだ。

この研究所には、被験者専用の「居住区」がある。見た目はほぼ刑務所と変わらないが、この居住区に定められた規則の中に一つ、ここを地獄たらしめる項目が存在する。

・居住区内の対人トラブルに対し、研究所職員は一切関与しないものとする。

要するに無法地帯。例えば、ある被験者が薬物の副作用で唐突に発狂し、周囲の者を襲い始めたとする。これに対処する場合、殺すもよし、放置して絶命するのを待つのもよし。更に言えば、唐突に他人を殺害してもペナルティなし。常に被験者たちのバイタルデータをサンプリングしている研究者達からすれば、むしろそういったトラブルこそ望むところという節がある。

ソラはハルバートンに先導され、堅牢なシェルターの入り口を思わせる隔壁の前に辿り着いた。

「ここが地獄の入り口だ。入れ。また明日、教壇からお前の顔を拝めることを祈っている」

ハルバートンの合図で研究員がボタンを操作すると重厚な隔壁がゆっくりと開き、ソラはついにその地獄に足を踏み入れる。背後で隔壁が閉まると同時に、聞き覚えのある声で放送が入る。

「あゝ、皆さん良く聞いてくださいね。今居住区に入った可愛らしい女の子は、なんとコーディネイターの中でも頂点に君臨するスーパーコーディネイターです。仲良くしてあげてくださいね?」

瞬間。

無数の視線がソラに突き刺さる。

「ひっ!？」

憎悪、嫉妬、好奇、情欲、憧憬、その他様々な感情の籠った視線を容赦なく浴びせられ、たまらず怯むソラ。

それを見た被験者の少年の一人がすかさずソラの背後に回り込み、ソラの脇から肩にかけて腕を回し、がっしりと拘束する。

「はい、姫様つかまーえた♪ 何々めちやくちやカワイイじゃん！俺らのグループに来なよ！」

「きやああ!! いやっ!! はなして!!」

「まあまあ嫌がるなって！ このクソ溜めじや貴重な『楽しみ』なんだけー！」

「うわめっちゃ胸あるじゃん！ やわらか!! キミ何才!？」

「いや！ だって！ 言ってる!! でしょ!!」

ソラの身体は、同年代の男子には余りにも扇情的で、彼らが我を忘れるほどに刺激が強かった。瞬く間に飢えた少年達に囲まれ、拘束され、身体をまさぐられ、パニックを起こしかけるソラ。相手は同年代程度とはいえ研究所のあらゆる実験で強化を施されている為、力も並ではない。しぶとく抵抗するソラに苛立った少年が、ソラの鳩尾を殴りつける。

「大人しくしてろよ！ オラア!!」

「うぐうっ!?! ぐっ! げほっ!!」

「あはは！ コーディネイター様もここは弱いんだなあ!」

（学校とかであるいじめとか……そんなレベルじゃない！ この人達は本気で私を黙らせて、思うが儘に蹂躪するつもりなの!?!）

2発、3発と畳みかけられ小鹿の様に足を震わせながらも、ソラは決して膝をつくまいと必死に踏ん張る。髪を掴まれ、腕を捻り上げられ、激痛と苦しさに涙が滲み、意識が遠のく。

「見ろよこの髪！ これも親が作ってくれたのか？」

「肌もぷるっぷる！ っただけ甘やかされたらこんなに傷一つ付かずに育つんだよ！」

「もったいぶらねーで早く剥いちまえよ！ みんなで楽しもうぜ！」

あまりにも一方的で理不尽な暴力。もはや日常的な光景なのか、止める者は居なかった。その苦痛にもがきながら、彼女は大好きな両親の教えを思い出す。

一つ。大切な人を守るように、身も心も強くあれ。

一つ。大切な人を笑顔に出来るように、優しい人間であれ。

一つ。いついかなる時も、気高く誇り高い人間であれ。

一つ。以上三つの教えを果たすために、貴女自身がずっと健康であれ。

（そうだ。私がどんな人間か知りながらも、ナチュラルのパパとママはここまで私を育ててくれた！ 優しくしてくれた！ 愛してくれた！ 私の事を誇りのように思うと言ってくれた！ その二人の愛と誇りに泥を塗るような真似は、……私自身が絶対許さない！！）

こんな所で屈している場合ではないんだと思った瞬間、

ソラの中で、何かが弾けた。

感情が爆発する一方で、不思議と頭の中がクリアになって行く。相手の次の動作、その次の動作が手に取るように分かり、自分の取るべき行動がはつきりと浮かんでくる。

ソラは今日一日で、敵を制圧する術として人体の急所や壊し方をハルバートンから教わっており、それを実行できる身体を既に持っている。初日からなんて事を教えるのかと青ざめたものだが、早々に役立つとなると感謝せざるを得ない。内心苦笑しながらも、身体は勝手に

動いていた。

まずは目の前で自分の胸にしがみ付く馬鹿の股間を思いきり蹴り上げ鞏丸を粉碎、あまりの痛みに跳ね上がる頭に頭突きを一撃。反動で後ろから自分を拘束している馬鹿の鼻っ面に後頭部で一撃。ついでに股間を踵で鋭く蹴り上げ、こちらも粉碎。呆気に取られていた左右の馬鹿二人は次の瞬間に鳩尾に拳を叩き込まれ、数メートル吹き飛びコンクリートの床に沈む。

「静まり返る居住区。」

例外なく股間を抑えて滝の様に汗を流す男子陣。

心を撃ち抜かれたように呆けている女子陣。

髪と服を整え、女神の様な微笑みを浮かべて、少女は言う。

「——ふう。良く……分かりました。ここでの作法が。手っ取り早く教えて頂きありがとうございます」

「ロドニア研究所『居住区』。地球上で最低最悪の無法地帯に、この日秩序がもたらされた。」

「……ハ、ハハハ！いや凄いな。訓練を受けているだけじゃなく、γ―グリフェプタンでハイになってる被検体4人を相手にこれとはね。恐れ入ったよプリンセス。一日でこれだけの戦闘力を得るなんてね。これなら実践レベルのブーステッドマンを造る為の目標データ作成も捗りそうだね。」

引き攣った笑いを浮かべながら、別室で一部始終を見ていたアズラエルは自身の計画を短縮方向に修正する。

「では教官、彼女の指導は任せましたよ」

「はっ。経過については逐次ご連絡致します。もっとも、指導される側になるのも時間の問題かも知れませんが」

「その時はボクに言ってお下さい。化け物は手に負えなくなる前に処分するものと相場が決まっています」

「肝に銘じておきましょう」

愛想笑いを止め、アズラエルが消えていった扉を睨みつけてハルバートンは内心で毒づく。

(アズラエルの馬鹿はスーパーコーディネイターを、いや：：彼女の力を見誤っている。成長速度は確かに能力に寄る所が大きい。だが問題は心だ。今まで不自由のない一般家庭で育ってきた13歳の少女が、鋼の心を身に付けている。そして反撃に出た際のあの人が変わった様な雰囲気は一体：：。いずれにせよ、私の成すべき事は変わらない。いつか成長した彼女から報復を受けることになったとしても、甘んじて受けよう)

居住区に設けられた自室で、ソラは両親に想いを馳せる。

「パパ、ママ、私ね、この世界の事が少し分かったんだ。ハルバートン教官が教えてくれたの。『研究所の人に見せるデータ』は少し考えないといけないけど、また明日からも教官から教練を受けられるのが少し楽しみなんだ。他にもっ、他にも本当に色んなことがあってね？もうっ、ワケ分かんなくてっ、痛くて怖くて！ 悲しくて！ でも次にパパとママに会う時には、：：：きつともっと立派になってるか：：：つく：：：うう：：：泣くのも今日までにするから：：：待つててねっ」

毛布にくるまって涙が枯れるまで泣いたところで、ソラは眠りについた。

彼女の戦いは、まだ始まったばかりだ。

02 | 成長と進歩

ソラが居住区で大立ち回りをして見せて間もなく、研究所内はどこもかしこも騒然としていた。返り討ちに合った四人の被験者を担当している研究員達は、絶対的に有利な状況を一瞬でひっくり返された事実には驚愕する一方で、目標とするスペックとそれに対する課題が明確になった事に狂喜乱舞している。

が、当事者の四人はそれどころではない。

彼らは「お前たちはコーデイネイターより優れた存在である」という洗脳教育を入念に施された上で、γグリフエプタンと呼ばれる薬物を投与されることにより、本来人間が持つ限界以上の力を発揮出来るようになっていて、いわばリミッターの外れた戦闘マシンだ。実際に研究所内の実践訓練でも敵無しで、研究員の間では最高の研究成果とすら言われる事もあった。

その四人が今、たった一人の少女に敗北し再起不能に陥っている。原因は言うまでもなく、自信とプライドを粉碎されたトラウマによるものだ。こうなってしまった以上、彼らの末路は決まったも同然だった。

「被検体B01とB04は精神疾患が深刻な為、脳科学班へ異動、必要な外科処置後のデータを提出次第、廃棄せよ。」
「了解。」

研究員達はそれが当たり前の事であるかのように、淡々と処置を進める。

人間を殺すためだけの人間を造るために、湯水のように命が消費される。それがここ、ロドニア研究所の日常だ。

翌日、ソラは教練の間にハルバートンに尋ねた。

「教官、ええと、昨日の事なんですけど……」

「なんだ？ 素人のお前に倒された腑抜け共の事か？」

「ええっ!? どうして知ってるんですか!?——つと、コホン！ 失礼しました！」

「構わん。——映像を見ていたからな。背後からの奇襲に対応できれば文句は無かったが、その後の対処は良かった。初日にしては上出来だ」

「あ、ありがとうございます……。 つじやなくて！ 四人は大丈夫なんですか!? 特に二人は……。そのお……」

「彼らは精神的に再起不能になった為、脳科学班で実験データを採取した後廃棄となる事が決定している」

「……え？ 廃棄とは？」

「私も管轄外だから詳しくは知らん。しかし実験内容から察するに、やることは脳に掛けられる負荷の限界値の計測だ。まず無事では済まないだろう。文字通り廃人になるまでデータを吸い取り、最後に抜け殻として廃棄される」

「そんな……。 だって命に別状は無いんですよね!? どうして治療しないんです!？」

「その価値が無いと研究所が判断したからだ」

「そんなのおかしいです！ まるで人を人じゃないみたいに——」

「人ではないのだよ。ブルー・コスモスにとって、ここの被験者達は理科の授業で使われるマウスに等しい」

「——っ!? 狂ってるっ……!？」

「狂ってる……。 狂ってるか……。 確かにその通りだ。こんなのは狂っている。そして勝つためであればそれがまかり通るのが戦争だ。そこに大義も人権もありはしない。そしてブルー・コスモスのクソ共は理事会と癒着し、更にはお前の様な子供達をも巻き込んで、今まさに戦争をおっ始めようとしている!？」

「教官……」

拳を握り締め、歯を食いしばり、呻くように語るハルバートンを見てソラは悟る。

(あ……そうか。教官も同じなんだ……。この研究所を受け入れられないなりに、せめて私の未来を閉ざさないようにって必死になっれてきている……。なら、私に出来る事は――。)

「情けないところを見せた。忘れてくれ」

「いえ、忘れません教官」

「なに？」

「私、パ……お父さんとお母さんを助けるまで、一人ぼっちで頑張らなきゃってずっと思っていました。一人でトレーニングして、一人で勉強して、一人で戦って……。でも違いました。今は教官の事、えっと、信じたって思います。ですから、教官の知っている全ての技術を、時間がある限り私に教えてください！」

「……！」

「あ、言う事ちゃんと聞きます！わがママも言いません！……えっと、……ダメ、ですか？」

「……くくつ……ぶわっはっはっはっは!!」

もうわがママを言っているのではないかと突っ込みを入れながら、ハルバートンは大笑いする。

「もう！ 教官ってば！ どうなんですか!?!」

「はっはっはっ！ いや、すまない。ダメも何も、私は元よりそのつもりでここへ来ている」

プンスカと頬を膨らませていたソラはそれを聞き一転、花が咲くような笑顔に変わる。

「だが覚悟しろ。昨日も言ったが容赦はせん。戦場で泣き言を垂れるような腑抜けはその場で切り捨てるぞ！ 分かったか!!」

「はい！ 教官！」

「では教練の続きを開始する。次は銃火器の取り扱いと射撃訓練だ。時間の都合で全てを教え切る事は出来ないが、足りない部分はお前自身の頭で考えて全てマスターしろ。今日中だ。お前なら出来る。」

「ええ!? 教えてくれないところですか!?!」

「お前は私を信用すると言った。だから私もお前を信用する。それとも、私の言葉は信用ならんか?」

ハルバートンは煽るような口調で意地の悪い笑みを浮かべる。否、完全に煽っている。

「~~~~っ!! わかりました！ やりますやります！ できますっつてばー！」

「ほほお、この無理難題をこなせると言うのか。いや感心感心。若さとは素晴らしいな！」

「むきい~~~~!! こんのオタンコナス！ あんぽんたん！ 生え際攻防戦！」

「酷い言われ様だが、そうしている間にも時間は過ぎるぞ」「よろしくお願いします教官!!」

その日の教練を無事終え、ソラは居住区へ向かう。ハルバートンの絶妙な煽りにムキになっている内に、気付けば用意された全武器種の知識及び射撃までの試験を最高成績でクリアするという結果を叩き出していた。

(もう！ 教官は人を言葉で誘導する才能でもあるんじゃないかしら！ 詐欺師に騙されている様な気分だわ！)

今日一日ですっかり癖になってしまったかのように頬を膨らませ、

プンスカと文句を言いながら居住区に入る。

隔壁の中に入るなり、全ての視線が案の定ソラに視線が集中する。

(うう、やっぱりこの視線は嫌だなあ……つとと、油断大敵ね。)

念のため背後にも気を張るソラだったが、そんな彼女の警戒とは裏腹に、悪意を持って絡んでくる者は居ない様だ。代わりに伝わってくるのは、異常な程の怯えや恐怖だった。

昨日、被検体達の目の前で繰り広げられた生のスーパーコーディネイターの圧倒的な戦い振りは、まだ精神が未成熟な彼等に掛けられた洗脳を塗りつぶす程の衝撃を与えた。それは恐らく、この研究所の建造を望んだ者達が、コーディネイターに対して初めて抱いた強い感情と全く同質のものだ。ソラは凶らずも彼等に、コーディネイターを嫌悪する切っ掛けを与えてしまったのだった。

「うんうん。やはり違いますねえ、とびっきりのホンモノは♪ これは軍にも良い報告が出来そうだ。彼女によるデモンストレーションは洗脳や薬物よりも効きますよってね。いかがですか教官？ 二日間彼女の指導を担当してみてサ」

その様子をモニター越しに見つめ、アズラエルは上機嫌だ。対してハルバートンは、今すぐにも目の前の男をブン殴ってやろうかという衝動を抑え込み、淡々と回答する。

「知識や技術の学習能力についてですが、それらは予想を大きく超えているかと思われます。この二日間で生身の近接戦闘力と銃火器の扱いを教えました。既にどちらも熟練の軍人のそれを凌駕しています。しかし精神の成長についてはまだ測りかねています。それについては年齢が年齢の為、今しばらく時間を頂きたい」

「なるほどね。まあまだ戦争が始まっているわけじゃないから時間は

あるよ。それにね、昨日の一件でブーステッドマンの開発陣に火が付いちやったみたいでサ。彼女が成長するほどに被検体も強くなつていくなんてのも、ちよつと面白いと思わない？」

「確かに、興味深くはありますな」

「まあそういう事だから、教官はその調子で彼女の教育をお願いしますよ。ボクは理事会と合流するために暫くここを離れなくちゃならない。だから念には念をつて事で、これを彼女に付けてあげて下さい」

「・・・これは？」

「見ての通り、首輪です。彼女のバイタルデータをこの研究所のサーバーに送信し続けると同時に、研究所から一定以上の距離が開くと爆発するようになっています。取り付けると関係者の端末に通知が飛ぶようになってるので、いちいち誰かに報告しに行く必要はありません。ああ、ちなみに違う人が付けるとエラーになるので、誤魔化しは効きませんよ。別に教官の事を信用してないわけじゃないんですが、人生何が起きるか分かりませんからねえ。明日の教練の時にでも着けてあげて下さい」

「了解しました。」

（要するに保険だな。着けるのは明日か・・・）

「では、ボクはこれで失礼しますね」

アズラエルを見送った後、ハルバートンは今日のソラの言葉を思い出していた。

『私、パ……お父さんとお母さんを助けるまで、一人ぼっちで頑張らなきゃやってずっと思っていました。一人でトレーニングして、一人で勉強して、一人で戦つて……。でも違いました。今は教官の事、えつと、信じたって思います。ですから、教官の知っている全ての技術を、時間がある限り私に教えてください！』

（あの純粋で真っ直ぐな瞳の持ち主を、戦争の道具として使い潰されてなるものか……！）
！
なんとしてでも彼女に困難を跳ね除ける知恵と

力を身に付けさせる、これが私の戦争だ！)

その頃居住区では、渦中の少女は新たな出会いを果たしていた。

ソラが他の被験者達の視線の網を抜けようやく自室の前まで辿り着こうかという時、不意に声を掛けられ足を止める。

「あのっ！」

「……私？」

振り返ると、ソラより少し背の低い、黒髪ショートカットの細身の女の子と目が合った。くりくりとした丸くて大きな目がなんとも可愛らしい。

「はい。えと、昨日はその……止めに入ったり出来なくて……見ている事しか出来なくて……本当にごめんなさい!!」

黒髪の少女はガバツと勢い良く頭を下げるが、突然の事にソラも驚きを隠せない。

「ええ!? ちょっとちょっ! 顔を上げてください! むしろ皆を怖がらせちゃってごっちょごめんなさい!」

「そんなことないです! そちらこそ顔を上げてください!」

「いやいやそっちょごめ!」

「いやいや!」

「……ふふふ、あはははははははははは!」

「あー面白かった！　こんなに笑ったの久しぶりだわ！　私はソラ・ヤマト。貴女は？」

「ソラ・ヤマト……。じゃあソラちゃんね！　あたし、B13（サーティーン）。よろしくね！」

多くの言葉を交わさずとも、なんとなくやり取りが楽しく、直ぐに意気投合する二人。

年相応にはしゃぐその姿こそ、本来の彼女達のあるべき姿なのだろう。

だからこそ、自分たちが殺し合う運命にあることなど、この時は知る由も無かったのだ。

03 死神の足音

ソラは両親を人質に取られているという立場でありながら、意外にもそこそこ自由に充実した毎日を過ごしていた。

スーパーコーディネイターの身体を持ち、年齢的にも頭が柔らかく、好奇心旺盛かつ真面目な性格のソラは、時間の許す限り我武者羅に教練に励んだ。それは戦闘技術や戦略・戦術論に留まらず、物理学、生物学、薬学等の専門知識にまで及び、ナチュラルの一生では到底入りきらない程の膨大な知識をその頭脳に蓄えていった。

これらは当然ながらハルバートン1人が指導したわけではなく、彼が研究所内の各部門の専門家を権力で抱え込み、委託という形でソラへの指導を実施していたのだ。ソラがこの研究所に来てから1年が経過する頃には、彼女は研究所一の頭脳を持つ天才へと成長を遂げていた。

「要するにですね、人の世で生きる以上、最も強い力は『権力』です！」
「おぉー！」

14歳になったソラは胸を張り、その容姿が漂わせる品性を正面から破壊する一言を放つ。それを聞き感心したように拍手して喜んでいるのは、B13。後天的に戦闘用に強化されたナチュラルである。『ブーステッドマン』、その13番目の被験者だ。

居住区で出会ってからすぐに打ち解けた2人はこれまで特に喧嘩するという事もなく、こうしてソラの話やB13が聞くというのが日常になっていた。ソラとしてはB13の話も聞きたいと思っただけで無いわけではなかったが、いつもいつもこのB13という少女はとびきり純粋な笑みを浮かべて話を聞いてくれるので、彼女は顔が見

たいが為にっいつい知識の引き出しを開けてしまうのだ。

「さすがソラ先生！今日のお話も凄かったし面白かったし、かつこよかったー」キヤツキヤツ

「毎日頑張つて勉強しているんですから、このくらい当然です！」ドヤア

「そんな事言つてえ、ソラちゃんお口がちよつと緩んでるよ？」

「そ、そんなことありません！」

「あゝるゝ！」

「ありません！」

「もー！嘘つきさんにはこれはあげないよ？」

「んん??なんです?」

妙に既視感のあるやりとりの後、B13がおもむろにポケットをゴソゴソと探り、出てきたのは1つの小さな石。それはまるで――。

「じゃーん！ すつごく綺麗でしょ？ ソラちゃんのお目目みたいに

綺麗な紫！ 今日お外で実験してる時に拾ったのー！」

「わあ……。本当に綺麗な石です……」

「ん?? 自画自賛?」

「石のハナシです！」

「あはは！ 分かつてるよおゝ」

「もう……」

「怒らないでソラちゃん。これ、ほんとにソラちゃんにあげるつもりで拾ってきたの」

「本当にいいんですか？ 多分貴重な物ですよ。残念ながら石は詳しくないですが……」

「うん！ ソラちゃん今日が何の日か知ってる?」

「それは……」

忘れもしない。ここへ連れて来られて、昨日でちょうど1年。本当

に信じられない程最悪な出来事の連続だった。

誘拐されて――、

目が覚めたらブルー・コスモスの巣窟で――、

初日に早速襲われかけて――、

死に物狂いで反撃した――。

そうしたらどうだ？それが原因で相手は使い捨ての実験材料として最期を迎えた。

ハルバートンの教練とB13の笑顔に支えられてなんとか堪えてきたが、ここは本来“そういう場所”なのだ。

そのあまりにも残酷な事実が、ソラの心に影を落とし始めた時――。

「はい、時間切れです！ 正解は、ソラちゃんと私が初めて会って、友達になった日！でした！」

「あ……」

「毎日面白いお話してくれてありがとう、ソラちゃん。1年が365日っていう事もソラちゃんが教えてくれたんだよ？空は青いのに、宇宙は真っ暗だって事も、そこにおつきなコロニーがたくさんあるって事も、ソラちゃんがお月さまから来たんだって事も！ 他にも色々！ だから、本当にありがとうって、わわ!？」

真っ直ぐ自分に向けられる、その花が咲くような笑顔に。

希望や尊厳を奪われて、ただ実験動物としてその人生を終える道しか残されていない筈の彼女の笑顔に。

自分はどれだけ救われてきたのだろう。

どれだけ甘えてきたのだろう。

両親やハルバートンとはまた違う、とても大切な、自分が守らなく

てはいけない、否、守りたいという感情が溢れ出し、考えるより先にソラはB13を抱きしめていた。

「ソラちゃん……? 泣いてるの?」

「ツグスツ。泣いてないっ……ですっ。」

「……ふふ。そうだね。よしよし。」

それからソラが落ち着きを取り戻すまで、B13はソラの頭を優しく撫で続けたのだった。

「落ち着いた? ソラちゃん。」

「あ、うん。……ごめんなさい。涙でびちゃびちゃに……」

「そんなの全然いいよ! このままソラちゃんまでなでしながら寝たいくらい! ……はっ!? そうだ、今日はソラちゃんのお布団で一緒に寝よう!」

「へ?」

「んー。なんとなくなね! 今日は一緒に寝たいなつて。だめ?」

ダメじゃありません! と首をブンブン振るソラ。喜ぶB13に手を引かれて自室に向かうが、その足取りは古いロボットの様にギクシヤクとしている。子供ながら知識だけは無駄過ぎるほどに豊富なソラは、内心穏やかではない。

(え!? え!? 一緒に寝るつて……寝るつて! ちよえー! ……!!!??)

2人で一緒に入る布団は、いつもより少し狭かった。だがさつきまでの緊張はどこへやら、ソラは泣き疲れていた事もあり、隣のB13の暖かさに包まれるとすぐに寝てしまった。

「ソラちゃんの寝顔、最後に見られて良かったあ……ふふ、可愛いなあ。おやすみなさい。私の大好きなソラちゃん。」

B13は眠るソラの額にそつと口づけをして、目を閉じたのだつた。

ソラが目を覚ますと既にB13の姿は無く、代わりに枕元に昨日見せて貰った紫色の石が置かれていた。

「13ちゃん……」

B13がソラの瞳にそつくりだと言ったその石を大事にしよう。また一緒に寝られたらいいなあ、などと考えながら支度を済ませ、ソラはいつも通り教練を受ける為にハルバートンの元を訪れる。振り返ったハルバートンは開口一番、こう言った。

「急だが、私はこれから宇宙へ上がる。プラントへの威嚇行動の為、元の部隊と合流せねばならん。すまんが、お前とはここでお別れだ。」

「ちよつとちよつと!? 流星に急過ぎませんか!? いや、確かにそろそろ教官から教わることは無いかなと思っただけ……つてあいたあ!?!」

「ふん、今のも避けられぬ様ではまだまだ甘いな。ちなみにだが、私の代わりが後ほど到着する。お前の嫌いな奴がな。まだ“爪”を隠しているお前ならば余程問題は無いと思うが、こんな場所だ。何があるか分からん。くれぐれも注意しろ。」

「っ!」

「1年前、初日に見たお前のアレと同じものを未だに見たことがない。どの模擬戦を経ても、お前があの目を見せる事は無かった。恐らく、

自分で制御下に置けるようにはなっているのだろうか？」

「……」

「言わなくとも良い。他に気付いた者も居ないだろうからな。だがこの連中には決して気取られるな。理由は……ここで1年過ごしたお前なら分かるな？……お前は、生き延びなければならぬんだ。ご両親と……お前自身の幸せを取り戻す為に」

「……はい。ご忠告感謝致します。教官。お元気で。」

「うむ。ではな。」

ソラは去り行くハルバートンの背を見つめながら、まだまだ敵わないと背中に冷たいものを感じていた。

日々の鍛錬で力を身に付けるほど、ソラはその力の異常性を理解していった。スーパーコーデイネイターと言っても、無理な事は無理だ。人の思考が読めるわけでもないし、ましてや直接目で捉えていない物の動きを把握するなどあり得ない話だ。だがあの4人に対して反撃に出た時、正確には生き延びる事を決意して意識を集中した時、感情とは別の何か弾けるのを感じた。その瞬間から分かったのだ。相手の事が、相手以上に。

それが身体能力とは関係の無い力である事を自覚すると同時に、彼女は思い出す。ごみの有効活用だと言わんばかりに、命を搾り取られる為に連れて行かれた4人の姿を。それだけではない。1年間この研究所で過ごして、既にソラが知っている顔はB13を残して他にない。それだけ被験者の「入れ替わり」があつたという事だ。そしていつB13が居なくなる日が訪れるのか、その恐怖に苛まれるようになってから、彼女は一段と自分を追い詰めて鍛錬に励むようになったのだ。

そしてついに、その力を制御するに至った。これで幸いにも意図せずこの力が露出してしまふ事は防げるようにはなった。しかし、事実として最初の一度でハルバートンには悟られてしまっている。そのくらい異常な力なのだ。当時のデータが保存されていれば、次に見ら

れた時点で気付く研究者も出てくるだろう。

長い思考の末、ソラが気を引き締めたその時、耳障りな放送が鳴り響く。

『え〜聞こえていますかプリンセス。お久しぶりです。アズラエルです。感動の再開といきたいところですが、その前にキミの成長を今一度見せて欲しくてね。居住区へお越しく下さい。』

「っ！ 戻ってきたのね……！ でも、なぜ居住区に？」

放送は続く。

『まあ、卒業試験って言ったところですよ。ボクが満足する結果が得られれば、キミのご両親を解放してあげましょう』

「!?」
正直なところ、全く信用できない。しかし、行かないという選択肢はソラには無かった。

居住区に着き、足を踏み入れる。背後で出入り口の重厚な隔壁が閉じる。が、慣れ親しんだ筈のその場所には、隠しきれない違和感が漂っていた。

「おかしい……」

静か過ぎる。日中とはいえ、実験予定の無い被験者は居住区に残っているはずだ。それが今は物音ひとつしない。

と、そこへ再び放送が入る。

『では皆さん、始めましょう。』

薄々勘付いてはいた。いつかこういう事が起きるだろうと。
だが目を背け続けて来たのだ。

物理的な意味だけではない。精神的な意味でも、ソラは逃げ道を閉ざされていた。

「……分かっていきます。こうなった以上、私に出来る事はこれだけで
すっ！……皆さん、ごめんなさいっ!!」

悲鳴の様にソラの口から洩れるのは、彼等に対する謝罪だった。ソ
ラはナイフを両手に、敵と認識した者達に突撃する。

1人、2人、3人、秒を読む毎に死体が積み上がる。より効率良く、
最低限の動きで、一撃で確実に命を奪って行く。

1年前の被験者達はその異常な光景を目の当たりにして放心した
が、今回は違う。彼らは更にヒートアップし、躊躇いなど全くない動
きでソラに肉薄する。しかし、それでも彼女の命には届かない。

鋭い突きを受け流しながら懐に入り込み、その勢いで心臓を突く。
絶命した肉体を盾に避け切れないナイフを受け、すかさずカウンター
を見舞う。反対側から迫る敵にその死体を投げつけ、動きが止まった
ところを投擲で仕留める。

手際良く周囲の敵を一掃し距離を取れたのも一瞬の事、息つく暇も
なく次の波が押し寄せる。

「「コーディネイターは殺す!!」」

「「お前らさえ居なければ!!」」

「「俺が生きるためにお前が死ね!!」」

「ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!ごめん
なさい!ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!
なさい!ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!
!!!」

ソラは殺し続ける。彼女を呪う言葉が無くなるまで。

『精神面については良い仕上がりを。敗北や死を恐れない兵士は強い。ただ、戦闘力に関しては改善の余地ありますね。』

アズラエルが被験者達を評価している間に、ついに戦いに区切りがついた。狂ったような怒声が聞こえなくなる。立っているのは返り血に染まり、涙を流し、虚空を見つめて謝り続けるソラただ一人だ。そんなソラに、放送の主は更なる追い打ちを仕掛ける。

『いやしかし流石はプリンセス。予想の半分以下の時間でこの数をまとめて倒しちやうなんて、いよいよ化け物ですねえ……。それじゃあこれはどうかな？1年近く掛けて仕上げた歴代最高のブーステッドマンです。これまでキミの身体データを元に肉体各部に強化を施し、そして今朝、仕上げとして理性のブレーキを外しました。彼女はキミにとっての死神になれるかな？』

その時、居住区の奥の方から軽やかな足音が聞こえてくる。

「すつごーい！　ほんとにみんな殺しちやったんだ！」

よく知っている声が、静かな居住区に響く。振り返ったソラの瞳に映ったその人物は

「ああ、そんな……ああああ、あああああ!!!」

「さすがソラ先生だね！かっこいい………キヒっ！」

ソラが大好きな、花を咲かせたようなその笑顔で、——昂り狂っていた。

「13ちゃん！話をっ……つく!?話を聞かせてください!!っ……13ちゃん!!」

「すごい！すごいよソラちゃん！もう私のスピードに付いてきているのね!!初見なのにどこを狙っても全部通らないどころか、おしやべりまて出来るなんて！とつても素敵!!きゃははははは!!」

「くうっ……!!……っっ!」

暫くの剣戟の後、B13からこれまでに無く鋭い一撃が低い位置から繰り出される。ソラはその刃を弾こうと――。

(――ナイフを持っていない!?不味っ――!?)

弾く筈の位置に刃は無く、ソラの守りを潜り抜けたB13の小さな“拳”は、威力を殺されることなく鳩尾を撃ち抜いた。

「っっっっっっっっっっかっはっ!!???」

数メートル吹き飛び、転がるソラ。辛うじて意識を保つが、呼吸すらままならない程の衝撃に涙で視界が滲む。

「はあ、はあ、うそ……これでもダメ……?あの一瞬で咄嗟に後ろに飛んで少しでも衝撃を逃がすなんて、ソラちゃん普通じゃない……はあ、はあ……ああ、楽しい!!楽しい楽しいっ!!!」

吹き飛んだソラに対して追い打ちはせず、B13は「たまらない」と頭を抱えて顔を蕩けさせる。ソラは苦痛を堪えながらも、必死に思考を巡らせる。

(彼女は強化されているとはいえナチュラル。いくら筋力や脳の反応

速度が上がっても、肉体の強さはナチュラルのそれのはず。私とはそもそも身体の作りが違う。それなのにあの動きを長く続けながら私と打ち合えば、もう身体に限界が来ていてもおかしくはない。」

「くっ……はあ、はあ、13ちゃん、もう止めましょう？ 模擬戦ならまた付き合ってあげますから、ね？ これ以上は……、大切な貴女の身体が壊れてしまいます……！」

瞬間、B13がピタリと硬直する。

「ハハッ……！ ソラちゃんったら、流したとはいえ私の渾身の一撃を急所に受けておいて、私の心配をする程余裕があるんだ……？」

「!?」
ゾクツと、今まで一度も感じたことのない雰囲気纏うB13を前に、言葉を失うソラ。

B13から感じるのは、*“怒り”*。彼女は、——怒っていた。

「ほんつつつとに！ すごいよソラちゃんは！ 何でも知っていて、何でも教えてくれて、何でも出来て、こんな場所なのに力になってくれる教官が居て、自分を殺しに来た相手の心配まで出来る!!!」

「っ……。」
「1年前、ソラちゃんの戦いを見た時に決めたんだよ。コーディネイターとかナチュラルとか関係ない、どんな男にも負けない力を手に入れて、ソラちゃんみたいに強くなるんだって！ お父さんとお母さんを殺して私を犯した奴らを地の果てまで追い詰めて、生まれて来た事を後悔させながら殺してやるって!! それだけだったのに!! なのにソラちゃんは、『絶対に無理』を突き付けてくる!! 毎日毎日私の目の前で!! 私か何日かけても理解出来ないことを一瞬で理解して、身に付けて、自分の物にする!! 私が1歩進む間に、ソラちゃんは10歩どころか100歩進んでる! そして安全な所からそうやって私の心配をするん

だよ!!」

そう。それこそがナチュラルとコーデイネイターの亀裂の根底にある、残酷な現実には打ちのめされた、持たざる者の苦悩だった。最初は憧憬だったものが、ソラと共に日々を過ごす内に、いつしか彼女の心の大半を占めていたはずの復讐心をも上書きする程の劣等感に変わっていったのだ。

その事実には、ソラは絶句する。1年も一緒に居たのに、彼女の事を何も分かっていなかったと。独りじゃないと思っていたのは、自分だけであったと。自分のあまりの愚鈍さに、目の前が真っ白になる。

「だからねソラちゃん。殺し合おう？生き残った方が幸せになる。それでいいでしょ？ここまで違う2人が一緒に幸せになるなんて無理だって・・・なんでも知ってるソラ先生なら、分かるでしょ？」

「13ちゃん、私は・・・！」

「本気にならないならそれでも別にいいよ。楽に勝たせてくれるならそのお礼に、あとでソラちゃんのお父さんとお母さんも同じ所に送ってあげるね。居場所はアズラエルさんから聞いたから。」

B13が悪意を込めた顔で、止めの一言を言い放つ。

「っ・・・!?・・・13ちゃん。それは流石に・・・冗談になっていませんよ・・・っ！」

「冗談で言っていないもの。こんなに凄いソラちゃんを飼って殺しにするボンクラは、一体どんな死に顔を見せてくれるのかなって、今から楽しみだよ！」

「・・・!!そうっ、ですか!!!」ならば——」

もう、止まらなかった。まるで共鳴するように、2人の感情が爆発する。

「13ちゃんを——、」
「ソラちゃんを——、」

「殺すっ!!!」

2人の中で、何かが弾けた。

互いに爆発的な加速で駆け出す。

10メートルにも満たない距離ではあったが、その距離がゼロになるまでの時間、やけに長く感じられるその時間の中で、ソラとB13は互いの事をぼんやりと想う。

(13ちゃんってば……。私に匹敵する『武器』、もう持ってるじゃないですか。もう、ちゃっかりしてますね。)

(ソラちゃん……。まさか『これ』も使えるなんて。ズルいなあ……。ふふっ、ほんとに凄いだから……。)

次の瞬間、2つの影が静かに交差する。

ガクツと・・・、片方の影が膝を折る。

「13ちゃん・・・!」

「うっ・・・ごほっ!はあ、はあ。もう、ソラちゃんもそれ使えるなんて聞いてない・・・。しかも無傷だし。ほんと、やんなっちゃう。」

力なく笑いながら倒れ込むB13を、ソラが抱きかかえる。

「13ちゃん・・・!私は・・・私は!!!」

涙を流すソラを鎮めるように、B13はそつと手を重ねる。

「ソラちゃん・・・、私を・・・止めてくれて、ありがとう・・・。」
「何を言っているのです!私は貴女の命を・・・!絶対守るって決めたのに!それを私はっ!!」

「ううん・・・。守ってくれたよ。ソラちゃんのおかげで、私はソラちゃんが好きでいてくれる私のまま、ソラちゃんの腕の中で死ねるの。だからね、少しの間だけでも、私を復讐から解放してくれてありがとう。楽しい事を一杯教えてくれてありがとう。抱きしめてくれてありがとう。一緒に寝てくれてありがとう。心配してくれてありがとう。・・・毎日を・・・ありがとう。けほっけほっ。」

「13ちゃん!違います!私は貴女と一緒に居てくれることに勝手に満足して、愚かにも毎日あなたを傷付け続けている事に気付きもしませんでしたっ!醜悪で最低な人間なんです!あなたが私の光で居てくれたから!私は腐らずに今日まで生きてこられたんです!幸せになるべきは、私なんかではなく貴女のような優しい子なんです・・・!ごめんなさい!ごめんなさい!!ごめんなさい!!」

「・・・もうっ、ソラちゃん。ひどいこと言っちゃったのは私も同じで

しよ？お互い様つ。あと、こういう時はごめんなさいじやないよつてソラちゃんから教わったんだけどなあ。」

「っ！……、13ちゃん……、あるとき、私に声を掛けてくれて、いつも私の話を聞いてくれて、いつも花が咲くような笑顔で私を元気にしてくれて……生まれできてくれて……本当にありがとうっ……ごじます……！」

「!!……もうっ……、ほんとにずるいんだから……。はあ、はあ」『生まれてきてくれてありがとう』。大切な人からの思いがけないプレゼントを貰い、B13の心は幸せに包まれて行く。

「ああ、13ちゃん……！死んではいけません！お願いっ！死なないでっ!!!」

失血により、健康的なB13の顔色は徐々に青白くなって行く。

「ふふっ、ソラちゃんつてば、私と戦ってた時より必死な顔してるよ……ねえ、ソラちゃん。少しだけ……目を瞑ってくれる？」
「え？……はい。」

ソラが目を閉じたのを確認するとB13は最後の力を振り絞って顔を上げ、彼女の唇に己のそれを重ねた。

驚いて目を開くソラだったが、彼女の想いを感じ取ると、ゆっくりと再び目を閉じるのだった。

2人はしばらくそうしていたが、いよいよB13の身体が限界を迎える。

「はあ……はあ……。ねえ、ソラちゃん。お願い……してもいいかな……。」

「はいっ……。なんでも言っして下さい。」

「じゃあ言うね。．．．私の大好きなソラちゃん．．．、私に幸せをくれて、ありがとう。忘れられちゃうと寂しいから、．．．あの石を見たら、時々私を思い出してくれると嬉しいな．．．。ソラちゃんも．．．どうか、．．．幸せに．．．なつてね．．．。」

その言葉を残し、B13の身体は力を失った。ソラは声も出せずに、ただその亡骸を抱きしめるのだった。

感傷に浸る暇もなく、武装した兵が居住区になだれ込み、ソラを包囲する。

「暴れたりはしませんよ。けど、この子にこれ以上鞭打つような真似をするのであれば、皆殺しにします。——っ！」

ソラがそう言い終えるのとどちらが先か、兵は極めて事務的な要領で彼女に麻酔弾を撃ち込み、無力化を確認するとすかさず拘束した。

「．．．ん、あ．．．こは．．．？」

ソラが目を覚めたのは、これまで入ったことのない、やや薄暗い

手術室の様な部屋だった。無機質で真っ白なのは、相変わらずだが、どこかひんやりとした、しかし重苦しい空気を感じるとなると地下だろうか。丁寧に椅子に拘束されている自分の身体を見たソラは、またかのため息をつく。ちようどその時、入り口のドアが開いた。

「おやあ？もう起きたんですね。キミに撃ち込んだ麻醉弾はナチュラルに使用すると3日は起きないほど強力な物です。それを1日で、ね。早めにここに運んどいて正解でした。」

耳障りな声と共に、アズラエルが研究員を引き連れて部屋に入ってくる。

「・・・で？ご満足頂けましたか？」

「そう怖い顔をしないでください。データに関しては満足以上のものが得られました。絆の力というのも案外嘘ではないのかも知れませんね。」

「・・・っ！」

ギリツと歯を食いしばるソラ。あの時のB13にその意図は無かっただろうが、上手く乗せられて感情のコントロールを失い“あの力”を使ってしまった事は、ソラらしからぬ失態だった。

「あの最後の一撃の時、キミはB13と同じ目をしていました。我々がB13を最強のブーステッドマンとして丁寧に扱ってきたのは、あの力の研究をする為です。まさかスーパーコンピュータであるキミが、あの力を持っていることを他でも無い彼女が暴き出してくれるとは・・・、アツハツハツハ!!彼女を失ってもお釣りが来るといふものですよ！」

「・・・・・・・・。それで。お父さんとお母さんは。」

「・・・ほう？取り乱さないとは意外です。・・・いいでしょう。取引に嘘は持ち込まない。ビジネスにおいて最も大切なのは、“信用”で

すからね。あなたのご両親にはアラスカ基地内部で雑務を担当して頂いていました。流石に軍務はダメですがね。当然その分の報酬と、
“ご協力頂いた謝礼”もお渡ししてあります。今なら電話も出来ませんが、どうしますか？」

「・・・お願い。」

アズラエルの言葉に嘘はなく、ソラは1年振りに両親と会話し、喜びを分かち合った。

「本当に・・・本当にけがとかは無いんだな!？」

「うん、うん、大丈夫だよお父さん。」

「おも!!?!カリダ!!ソラがパパって呼んでくれなくなってる!」

しばし受話器越しにバタバタと慌ただしいやりとりが聞こえた後に、母のカリダが電話に出た。

「ソラ、1年遅くなっちゃったけど、去年の予定通りヘリオポリスに移住しようって話になってるんだけどどう?あそこなら平和だし、コペルニクスみたいなことにはもうならないと思うから・・・。」

移住先の話が出たタイミングで、アズラエルはソラに視線を送ってきた。

『お前はまだここに残るようには上手く言え』と。

ここで逆らうと、両親が旅路の途中で不幸な事故に遭うぞと。結局、ソラにはアズラエルの言いなりになる以外、道は残されていないかった。

なんとか両親を言いくるめ、ソラのやりたいことなら仕方ない、と

という言葉を引き出し、ヘリオポリスでの再会を約束した後、電話を切る。これでひとまずは両親の安全は確保された。コペルニクスと異なり、あそこは完全なオーブ連合首長国の一都市だ。そんな両親との会話の余韻に浸るソラの心を踏み荒らすように、アズラエルが口を開く。

「さて、約束通り『ご両親は』解放。契約は果たされましたが・・・、しかし意外でした！まさか丁寧にキミの方から協力継続の打診があるとは！将来有望なことで何よりですねエ。」

「それで、私をここに拘束している理由を教えてください。データを渡した以上、ブルー・コスモスが私を生かしておく理由は無い筈ですが。」

「キミが普通のコーデイネイターであれば、確かにそうでしたねえ。ケドその場合は、そもそも部隊を送り込んでまで捕まえに行ったりしませんよ。それほどまでにキミの身体が特殊性だということですよ。そして精神はまだ少女のもので、その成熟速度もナチュラルとさほど変わらないという事が1年を通して分かりました。精神の成長は経験に寄るところが大きいですから、当然と言えば当然なんですけどね。つまりどういうことかと言うと、身体はそのままに、記憶や人格の修正が効くということなんです。そういうわけで、キミには記憶そのものから『ナチュラル』の少女に生まれ変わってもらいます。」

「記憶と人格を・・・修正して・・・生まれ変わる・・・!?!」

「そうです。コーデイネイターという肩書きはね、我々の元で働くには邪魔なだけなんです。そして何より、ボクが知りたいのはその『力』の秘密でね？その研究をスムーズに行うためにはやはり、動きやすいステータスを持った人間に生まれ変わって、従順になって頂く他無いんですよ。」

愕然とするソラを余所に、アズラエルは近くで待機していた研究員を呼びつけ、要件を伝える。

「分かっているとは思いますが、彼女は核以上の戦果が望める最重要戦力です。くれぐれも壊すことが無いように。そうならない範囲であれば手段は問いません。時間も出来る限り譲歩しましょう。確実なものにして下さい。良いですね?」

「はっ!」

「では、ボクは行きます。任せましたよ。」

そう言い残し、アズラエルは研究室を後にする。

「・・・さて、くれぐれも壊すなどのお達しだが、実験に事故はつきものだ。気をしっかり持つ事だな。スーパーコーデイネイターさんよ。」

「・・・っ!くっ・・・!」

(お父さん、お母さん、13ちゃん、教官、アスラン・・・!)

「と言つても、今から突然記憶をブツコ抜いて違う記憶を植え付けるなんてのは無理な話だ。ガキの脳とメンタルじゃ到底耐えられない。ましてやお前は俺達ナチュラルとは比較にならない程の記憶を溜めこんでいる。差し替えをスムーズに済ませるには、お前自身が心身共に死にたくなるほど疲弊していなければならぬ。」

「疲弊・・・ですか。」

「そうだ。生意気に知識量だけは立派なマセガキなら察しが付くだろうが・・・。ま、ッそういう事だ。簡単に壊れてくれるなよ?スーツの奴らに言い訳すんのも楽じゃねえんだ。」

上から言いたい放題言いやがって、などとボヤキながら、研究員の男は班員と思われる者達を招集する。様々な色の薬品が入った試験管や機材を満載したワゴンが部屋に運び込まれ、ソラを拘束している椅子の脇に停められる。別の1人がスイッチを操作すると、その椅子が変形、ソラは完全に仰向けに拘束される形になった。

いよいよ、始まるようだ。

ソラはワゴンに載せられている器具を確認し、全てを察する。研究用ではない。これは私を疲弊させる事も兼ねてはいるが、その本質は上が彼らに与えた「ボーナス」だ。頭では理解している。今までは協力者としてこの研究所で過ごしてきたが、これからは研究材料兼遊び道具という訳だ。いや全く笑えない。震えが止まらず、歯がカタカタと音を立てる。

「カチカチうるせえな……。ほら、これでも啜えてろよ。」

「え?・・・いや!むぐ・・・んんっ!」

ワゴンに載せられていたボールギャグを口にねじ込まれ、ガツチリと装着される。

「んんんん!!!んっ!」

涙を流しながら怯えるソラの腕に、男達は次々と点滴の針を差し込んで行く。

「安心しなつて。怖いのも今だけ、クスリが回れば天国さ。切れて我に帰ったら地獄かも知れないが、そしたら俺達がまた天国までトバしてやるだけだ。」

ゲラゲラと複数の下卑た笑いが部屋に響く。ソラから見える位置に敢えて設置された点滴のパックを見ると、もう投薬が始まっているようだ。得体の知れない薬液が、身体の中に流れ込んでくる。

(あ、くま・・・!この人達は悪魔です!いやだ!いやっいやいやああ!!)

頑丈な拘束具はいくらソラとはいえ人間の力ではビクともしない。次第に頭がボーつとしてきて力も入らなくなっていく。一方で、身体が芯から熱を持つ様な不思議な感覚に囚われる。ソラが無意識にも身体を振らせるのを確認した男達は服を脱ぎ捨て、少女の横たわる台の周りに群がって行く……。

C・E・69 8月31日。スーパーコーデイネイター、ソラ・ヤマトの、男達による一方的な暴力に耐える地獄の日々が始まった。

そして時は過ぎ、C・E・70 2月1日 ロドニア研究所。

「ああつ!!んあーうあああ!!もっ……、むり!!いやあああー!」

薄暗い地下室には、今日もソラの悲鳴が響き渡る。ソラがこの地下室に囚われてから半年弱。来る日も来る日も男達から一方的に暴力を受け、女性としての尊厳を踏みにじられ、クスリ漬けにされ、それでも彼女はこれまで壊れずに耐えてきた。否、壊れなかつたからこそこれだけ長引いてしまったと言うべきか。しかしそれも、いよいよ限界だった。

行為がひと段落した時、ソラは体中汚され、目の焦点が合わず、不規則に痙攣を起こしていた。

「……流石に少しやり過ぎたか?」

「かも知れないが、どのみち記憶と人格を植え付けるんだ。フィクションとはいえ、これだけのポリユームの記憶があれば、この“準備期間”で薄めた記憶量とおおよそ一致、記憶領域の空白によって情緒不安定になることも無いだろう。むしろ上出来と言える。身体の方は光の速さで回復するしな。」

「それもそうか。じゃ、名残惜しいがそろそろ本題に移ろう。」

研究員達は淡々と準備を始める。ソラの身体は一度隅々まで洗浄され、拘束台から楕円形のベッドへ移された。研究員達は手際良く

様々な機材をソラに装着して行く。

(・・・ん。なんか、いつもより短い時間……。また何かされるんでしょうか・・・。)

最早彼らの当初の目的など思い出す余裕もないソラは、いつもと周囲の様子が違うな、程度にしか思わなかった。ボーつと他人事の様はその光景を眺めている内に、上から透明な蓋が閉じられる。カプセルという表現が最も近いだろうか。そのカプセル内に備え付けられたスピーカーから声が聞こえる。

「さて、ソラ・ヤマト。準備が整ったぞ。今日はお前がコーディネイターとして送る人生最後の日だ。何か言い残すことはあるか？」

「・・・え？」

「無ければ良い。記憶の入れ替えには長い時間が必要な為、その間の栄養補給や麻酔の追加投与はその点滴で行う。一か月か、半年か、いつになるかはまだ分からないが、お前の能力から鑑みるに常人のそれよりも遥かに時間が掛かる事が予想される。だが次に目が覚めた時、お前は別人になっているだろう。では、特別製のベッドで良い夢を見てくれ。」

研究員の男がそう言って装置を作動させる。ここに来て状況を理解したソラは、思い出す。自分がこれからどうなるのかを。――だが、もう遅い。

「いやっ！待ってお願い！私を奪わないでっ！！大事な人たちを奪わないでっ！！いやああああ・・・たすけ・・・パパ・・・ママあ・・・っ。」

麻酔が回り、ソラの意識は闇に沈んで行く。

(アスラン……、元気でしょうか……世界が今どうなってるのかも分かりませんが……)

(教官の教えは正しかったです……。あんなに私の為に頑張ってくれたのに……。出来ない教え子で……。ごめんなさい……。)

(13ちゃん……。お願い、聞いてあげられそうにありませんっ)

あまりにも悔しくて悲しくて、大切な人達に申し訳なくて、ソラから最後に出た言葉は。

「みんな……。ごめん……。な……。さ……」

意識が落ちる最後の瞬間、ソラの目には、かつての恩師の“幻”が映っていた。

「あれだけ注意せよと言ったにも関わらず、まんまと敵の手に落ちるとは。まだまだ甘い様だな。」

上等な軍服を着た男がカプセル目掛けて拳銃の引き金を引く。留め具を撃ち抜かれたカプセルの蓋が弾けるように開き、装置が非常停止する。当然、研究員も黙ってはいない。

「な、なんだお前は!!この臨床実験は上層部の命令だぞ!!」

「私が、その上層部の人間、デュエイン・ハルバートンだ。その臨床実

験とやらは中止になった。良かったな、命令違反での銃殺刑は無さそうだ。」

「なっ・・・!」

「だがしかし、随分な”前準備”とやらだったようだな。ここへ来るまでに諸々の記録を確認したが、酷い物だった。・・・男のプライドを肥溜めに捨てた気分はどうだ?」

「わ、私はただ命令に従おうと・・・!」

「弁解は必要ない。記録が全てを語ってくれたからな。アズラエルのクズには上手い事逃げられたが、証拠はこちらが全て握っている以上は手出しも出来まい。貴様らにはこの娘が味わった以上の永い地獄が待っている。精々覚悟を決めておくことだな。・・・連れていけ。他の被験者達については生命維持に必要な物とデータも含めて運び出せ。この研究所は・・・放棄する。」

「「はっ!」」

連れてきた部下達が素早く館内に散っていく。ハルバートンは麻酔が回り意識を失っているソラに毛布を巻くと、我が子のようにソラを抱き上げ、その場を後にする。

「こんなになるまで、全く、大馬鹿者め。痛かっただろう・・・、怖かっただろう、よくぞ・・・よくぞ耐え抜いたぞ。お前ほど根性のある戦士を、私は知らん。だが、だが私の力では、お前を平和な場所へ還してやることすら出来ん!すまない・・・。すまない・・・!」

菌を食いしぼるハルバートンに抱えられ、ソラは約1年半振りへ外へ出る。

彼等を待つへりが生み出すその風に、

ソラの『白い髪』が、靡いていた――。

05 | 人の優しさを知る少女

C. E. 69。地球理事国より禁止されているはずの食料生産を開始したプラントに対し、理事国側は武力を持って威嚇。大西洋連邦宇宙軍を起用し、大量の量産型モビルアーマー（以下MA）“メビウス”をプラントへ向けて展開する。しかし彼らが想像もしていなかった出迎えが、行く手を阻んだ。

「なんだ……、あれは……？」

それらは、人の形をしていた。

「隊長！ 人型の……人型の機動兵器です!!」

メビウスのコクピット内で、見たことのない存在を前にパイロットは困惑する。モニタ越しにその赤い単眼と目が合った瞬間、人型はフツと画面外に消えた。その動きはメビウスではとても追い切れず、上下左右に視界を振り回される。再びメインカメラに捉えたその人型は、腰のサーベルを抜き放ち、真っ直ぐこちらへ振り下ろしていた。

「……………え？ つ!!!」

そのサーベルは、容易くメビウスを両断した。爆炎に包まれる僚機を見て、他のメビウスのパイロット達は悟る。自分達は狩られる側である。部隊を繋ぐ無線などまるで耳に入らない。縦横無尽に戦場を駆け回り、遠・中・近から変幻自在に攻撃を繰り出す未知の兵器を相手に対応することが出来ず、地球の人類が生み出した自慢の兵器達はただただその数を減らして行った。

終わってみれば、ごく少数の人型兵器を相手にMA部隊は全滅。こうしてプラントが結成した軍事組織Z A F Tと、主力量産モビルスー

ツ（以下MS） “ZGMF-1017ジン”は、その存在を世界に知らしめた。そしてその時、後方待機ながら宇宙戦闘におけるMSの脅威を実感し、その有用性に気付いた1人のナチュラルが存在した。

「——ようやく、動き出せるか……。ハア……」

大西洋連邦宇宙軍第4艦隊の将、デュエイン・ハルバートンは、高級そうではあるが所々破れがみられる椅子に身体を沈める。ある時は教官とも呼ばれた事もある彼は、そう呼んできた少女には一度も見せたことが無いような表情で脱力していた。

“G計画”

ZAFTのジンとの戦闘があつて間もなく、こちらでもMS開発をと上申するもあえなく却下。その後理事国の一部議員の援助を受け、ようやく取り掛かることが可能となったのがこの“G計画”だ。

軍上層部は、コーディネーターが相手なら“数”で押せばいいと言う。確かに間違つてはいない。だがその“数”とは、詰まるところ命を浪費して得られる強さに他ならない。そして半端な数ではひっくり返せない程の戦力差を目の前で見せ付けられてしまつては、戦場で多くの命を預かる立場の人間として上層部の言う事に大人しく従う事も出来なかつた。

（後方待機とはいえ、敵の戦力を直接確認できたのは幸いだった。でなければ脅威の度合いを見誤り、愚物の仲間入りをしていたところだ。そして何より、一刻も早くすべき事がある。時間が掛かつてしまったが、この計画を成功に導く唯一にして最強のファクターを回収しに行かねばなるまい。……断じて身内最良ではない。）

やる事が決まるとハルバートンは迅速に支度を済ませつつ、地球へ降りるシャトルの乗り場へ向かう。地上でへりに乗り換え研究所へ向かう段取りになっている。

「金髪のクソ坊主を脅すのは……、いや、あいつは思い通りにならないと暴れるタイプか。事後報告が無難だな」

どの道、回収してしまえばアズラエルも好きには動けない。それよりも気になるのは、両親が解放されてから今に至るまでに彼女がどうなっているか。何度も頭をよぎる不安に蓋をして、ハルバートンはシャトルに乗り込んだ。

結果から言って、研究所へ急いだ事は正解だった。研究所の最奥にある地下室に辿り着き、ハルバートンは遭遇する。自分が1年に渡り教練を施し生き残る術を叩き込んだその少女が、妙なカプセルの中で絶望の表情を浮かべながら意識を失って行く、その瞬間に。そして――

「っっ!!!」

目が合った。

『ごめんなさい』

彼女はそう言った。ハルバートンは考えるより先に拳銃を構え、トリガーを引き絞る。カプセルが弾け、装置が停止する。間一髪だが間に合ったようだ。

「あれだけ注意せよと言ったにも関わらず、まんまと敵の手に落ちる

とは。まだまだ甘い様だな」

C. E. 70 2月7日 オーブ連合首長国 資源衛星ヘリオポリス

「……………」

2日前の「コペルニクスの悲劇」により崩壊した国連に代わる国際組織として、「地球連合」が設立されたこの日。高級とは言わないが決して固くはない清潔なベッドの上で、ソラ・ヤマトは意識を取り戻した。

(ここは……………どこ？ ……拘束も解かれています……………)

「アラスカ宣言、ね。……………あら、目が覚めたのね。気分はどう？」

デスクのPCでニュースを見ていた女医がソラの目覚めに気付き、彼女の元に歩み寄る。

「具合は……………、悪くはありません。あの、ここは……………」

「ここはオーブの資源衛星ヘリオポリスにある、モルゲンレーテの工場の医務室よ。ハルバートンってお偉いさんから、貴女が回復するまで部屋から出すなって言われているわ」

「……………ヘリオポリス？ 教官が？ ……すみません、ちよつと整理させてください」

「勿論。ゆつくりでいいわ」

全く事態が呑み込めずに、頭を抱えるソラ。

(まず、ここはあの研究所じゃありません。どういう訳か意識を失っている私を教官がここへ運び込んで……っ?!いえ、それどころではありません!私は……私はソラ・ヤマト! 覚えてる! 覚えています!!)

「あのっ!! 教官は!ハルバートン教官はどちらに!?!」

「まあまあ一旦落ち着きなさい。今呼ぶから。すぐに飛んでくるわよ。」

女医は手元の端末を操作し、ハルバートンへ一報を入れる。

「そう……ですか。しかし一体何が……。私は何故、私のままで居られているのでしょうか……。」

「間髪だったそうよ。どういう技術かは知らないけど、貴女の記憶を抜くプログラムが作動を始める直前にその教官が到着して、とりえず拳銃ぶつ放して強制的に止めたって事らしいけど……。ま、とりえず強引にこうして貴女を引っ張って来られる彼の権力には感謝しなさいね」

「あ……、教官が私を……? そんな、感謝だなんて……そんなものは到底足りません!私は、私を失わずに済みました。命よりも大切な物を……失わずに済みました。そしてあの地獄からも……っ」

「貴方は心身共に本当に限界の所まで衰弱していたわ。ここへ運び込まれてから1週間でここまで体力が回復するのは予想外だったけれど、心の方はまだ油断できないから無理は禁物よ。しばらくはここで絶対安静。分かった?」

「はい。……えと、よろしくお願いします」

「よろしい。素直な子は好きよ」

ペコリと頭を下げるソラを見て、女医は微笑む。その時医務室の扉が開き、ハルバートンが姿を見せた。

「教官！」

「うむ。目が覚めたようだな」

「はい！ あの、どうして私を……いったい何があったんですか？」

「その話はお前が完全に復調してからだ、と言いたいところだが、生憎予定が立て込んでいてな。そのままが良いから聞け。お前をあの研究所から連れ出した理由とお前自身の今後についてだ」

「は、はい！」

「単刀直入に言う。お前が私の部下になることを望むのならば、本日よりお前は『地球連合軍第8機動艦隊所属 ソラ・ヤマト少尉』として生きる事が出来る。望まないのであれば、あの研究所へお前を返還した上で文字通り私の首も飛ぶ。これは脅しだ。薄汚い大人だと罵ってくれても——」

「なります！ 私を部下にしてください！ 教練だけでなく、あの地獄から救って頂いたこの命です！ お役に立てるなら、どんなことだって——！」

「分かった分かった。少し落ち着け。——であれば、本日付けで『貴様』は私の管理下であるGシリーズ開発チームへの参加を命じる。私の事は今後『提督』とでも呼べ。拠点はここだ。貴様には半年間、このコロニーの工科カレッジに通い、必要な工学の基礎知識を学んでもらう。が、その能力を信用した上で、授業が終わった後はここでの任務も並行で進めて貰うことになる。以前貴様の指導をして、出来るかと踏んだ。やれるな？」

「てっ、提督?! つとと、はい！ やります！ えつと具体的には何をすれば……」

目の前の男が想像以上に『偉い人』だと分かり狼狽えるソラ。目が覚めてからというもの、あまりの情報量の多さに流石の彼女の頭脳

もオーバーヒート気味である。

「細かい説明は貴様が直接やり取りをすることになる上官に命じてある。後ほど呼びつけよう。私はこれから一仕事終えたらすぐに艦隊に合流せねばならん。——1つだけ、言っておく」

「……？」

「貴様の命は、貴様の物だ。決して私の為に使おうなどとは考えるな。自分で考え、信じるべきことの為に使え。以上だ」

「っ！ はい！」

「うむ、それでいい。それから、研究所を回らせた部下がお前の部屋で見つけた物を渡しておく。それではな」

ハルバートンは少し重みのある、綺麗な布で丁寧に包まれたそれをソラに渡し、病室を後にする。ハルバートンに会釈をした後、ソラは受け取った布を広げる。そして中から出てきた物を見て、思わず声を上げた。

「あ……っ！」

出て来たのは石。深い紫色の輝きを放つその石は。友情だけではない、憧憬、嫉妬、挫折、様々な苦悩を抱えながらも、『ありがとう』という言葉を残して逝った、ソラにとってかけがえのない大切な人から貰った、最初で最後のプレゼントだった。

「彼女をあそこから連れ出して頂き……、本当に……ありがとう、……ご
ざいます……っ！」

見えなくなったハルバートンの背に向けて頭を下げるソラ。この1年半で経験した、様々な出来事が頭の中を駆け巡る。しばしの間、数え切れないほどの感情が乗った涙を、ソラは流し続けたのだった。

「はい。アップルティーよ。少しは落ち着いてきた？」

「わあ、ありがとうございます！ ……おいしい、おいしいです……！」

ふーふーと冷ましながら、ソラは女医が淹れてくれたアップルティーを堪能する。高級な物では無かったが、長い間研究所の食事とも言えない様な物しか口にしていなかった彼女からすれば、どれも現実離れした美味しさなのだ。

「あと2時間くらいしたら貴女の上官が来るそうよ。飲み終わったらそれまで少し休んでいなさい。私はここにいるから、何かあったら呼んで頂戴」

「はい。あの……ありがとうございます。親切にしてください」

ソラは再び横になって布団を被ると、女医に礼を言う。

「そりや医者だもの。当然でしょ」

「そう、なんですかね……。私の周りには……、怖いお医者さんしか居ませんでした。私は、完全にあの人達の遊び道具でした。正直、今でもここでこうしてられる事が信じられません」

「つ……そいつらは医者じゃなくて、下衆野郎って言うのよ。覚えときなさい。そしてもうそんな奴らはここにはいない。誰も貴女から貴女を奪ったりしない。だから……安心して眠りなさい」

「は……い……」

それからちょうど2時間後、ソラの上官になる人物が医務室を訪れた。

「失礼します。マリユールミアス大尉であります。ソラ・ヤマト少尉はここに？」

「いらっしやい大尉殿。お姫様ならそのベッドでお休み中よ。先に

彼女の経歴とバイタルデータの説明をするわね」

「ええ、お願いします」

ハルバートンから軽く説明を受けてはいたが、改めて詳細の説明を受け、マリューは絶句する。少女、いや人間に対する仕打ちではない。資料に添付されていた写真は、投与された様々な薬物の影響で髪の毛をはじめとする体毛が無機質な白銀に生え変わり、生気が希薄な程に白くなっているソラの身体を映していた。

「まあだいぶ顔色は良くなったけど、髪の方はどうにもならないわね。先天性アルビノとはまた話が違うから、日光に当たるとまずいつてことはいわ。彼女の身体のお陰か、幸い後遺症もなし。むしろ周りの人の方が心配ね」

「? それはどういう……?」

「この写真じゃ分からないから、実際に見た方が早いわね。一番奥のベッドよ。」

「女の子が寝ているのに、いいのかしら……?」

「大尉殿の部下なんですよ? それに女同士なら問題なし」

「……分かったわ」

マリューは静かにベッドを隠すカーテンを開ける。女医が言った通り、そこには規則正しく寝息を立てる「お姫様」が居た。

「っ……!」

慌てて口を押え、思わず声が出そうになるのをこらえるマリュー。資料の写真からして、今にも息絶えそうな様子を想像していたが、そんなことはない。眠っているだけの少女は、彼女の視線を掴んで離さない。吸い込まれるようにして、マリューはソラが眠るベッドの枕元まで歩み寄る。西洋人形だの女神だの、そんな言葉では形容できない。ただただ、その顔から目が離せない――。

「……………んう。……………んん？」

なんとなく人の気配を感じ取ったソラが目を覚ますと、ベッドの脇に立っている作業服姿の女性と目が合った。

「あ、ごめんなさい。起こしちゃったわね」

「いえ。……………あの、もしかして教か……………あ、提督が仰っていた私の上官になる方というのは……………」

「マリユール・ラミアス大尉よ。今日から貴女の上官ってことになるんだけど……………、こんな格好でごめんなさいね。任務の内容については私から聞けて言われていると思うけど、最初の任務は貴女が元気になる事。そうしたら私達の任務と貴女の今後について話すわね。今日は顔を見て話せればそれでいいわ」

「は、はいっ！ ソ、ソラ・ヤマトです！ あ、えつと、少尉です！ わわっ、すみません！ こんなかつこで……………頭もボサボサで……………ああ……………」

マリユールが上官だと分かり慌てて起き上がり身なりを正そうとするソラだったが、押さえても押さえても跳ね回る寝癖に敗北を悟り、しゅんと下を向く。その一連の様子は、凶らずしてマリユールの心臓を撃ち抜いた。

（これはっ、ちょっと……………かわいいってレベルじゃないわね……………。つと、いけないいけない、いけないわ）

クラっとするのを堪えるが、どうしても頬が緩んでしまうマリユール。すると、下を向いていたソラが勢い良く顔を上げる。

「そうでした！ ……ここ、ヘリオポリスだっけさっき女医さんが！」

「へ？ ええ、そうよ。ここはヘリオポリスにあるモルゲンレーテの研究所兼工場よ。Gシリーズ開発にあたって、我々地球連合軍と共同で計画を進めているの。それが私達がオーブであるこのコロニーに滞在している理由よ」

「私、攫われた日はヘリオポリスに引越す為の準備をしていたところだったんです！ 工科カレツジに進学が決まっています……つて！ 工科カレツジってさつき提督が！」

ソラは攫われた当時の状況、両親がヘリオポリスに滞在している事、自分が脅されていた事は両親には隠していた事などを、あたふたと、しかし一つ一つ確実にマリューに説明した。

「そうだったの……。分かったわ。そういう事なら、近いうちにご両親とも会えるように場を設ける事も出来ると思うけれど、どうする？」

「勿論会いたい……ですけど、その……。私が泣かないできちんと話せるように、大尉にも同席して頂きたいのですが……。泣いちゃったら、また弱い自分に戻ってしまいそうで……。どうか、お願いしますっ！」

「もちろん、構わないわ。私からも説明しなければならぬ事が沢山あるもの。だけど――」

ふわっと、マリューはソラを優しく抱きしめ、頭を撫でる。

「――ずっと強くある必要は無いのよ。時には弱さを吐き出す事だつて大切なもの。だから焦らずに、これからは辛い時は私に甘えて、頼りなさい。笑って怒って泣いて、言いたいことは全て私にぶつけなさい。」

その言葉は、強さという孤独の殻に閉じ籠ろうとする少女の心を、優しく解きほぐした。他人の悪意に打ちのめされ続けてきた彼女は、この時、本当の意味で『安らげる場所』を見つけたのだった。

「そして私も貴女を信用して、頼りにする。そういう事だから、これからよろしく頼むわよ？ 可愛い少尉さん♪」

「……はいっ！ よろしくお願いします！ ラミアス大尉！」

そう元気良く返事をするソラの顔は。

まるで花が咲いたような、とびっきりの笑顔だった――。

06 初登校と初任務

「では、行って参ります！」

「はい、行ってらっしゃい。頑張つてね」

「はい！」

新雪のような輝きを放つ白銀の髪を靡かせ、ソラは元気良く返事をする。約一年半、随分と出遅れてしまったが、今日から晴れて工科カレッジの一生徒である。(任務ではあるが)

しかし、ただの一生徒というわけでもない。閉鎖された空間で己を磨き続け、地獄のような日々を耐え忍んできた彼女は、若干14歳にして少尉の肩書を持つ、れつきとした地球連合軍の軍人だ。そして何より特異な点は、彼女自身がナチュラルではなくコーデイナー、それも同類の中で頂点に君臨する存在であるという事だ。当然、普通であればあり得ない。だが彼女の『命を救われた恩を返したい』という強い想いと、軍の一大プロジェクトに彼女の能力が必要不可欠であった事、そしてそのプロジェクトの担い手が、他でもない彼女の恩人でありかつての教官であった事により実現したのが現状である。

(でも、私が本当に地球軍に入る事、お父さんとお母さんがあんなにあっさり許してくれるとは思いませんでした…)

それは先日、マリユーと二人で両親の滞在先に向かった時の事だ。流星にガラリと色の変わった髪には驚いていたが、『実験でミスった』と苦しい理由を聞いた上で、『似合っているし、何より健康に支障が無いならそれで良い』の一言で済んでしまった。何より、軍に入りたいという理由ではなく、返しきれないほどの恩をなんとかして返したい、という娘の強い意志を、親として尊重すべきと感じたのかもしれない。最終的に、月に一度は顔を見せる事を条件に、ソラは二人の了承を得たのだった。そして、もう一つ喜ぶべき事が――。

「いやあ、あの襲撃の中でトリイがまさか無事だつとは僥倖でした。月に立ち寄って回収してくれていたお父さん達には感謝です」

「トリイ！」

「もうすぐ到着ですよトリイ。一旦戻ってきてくださいね」

トリイが肩に停まったことを確認すると、ソラは学び舎へと歩みを進めながら、今朝マリユーから手渡されたICカード式の学生証を取り出す。講堂や各施設への出入りだけでなく、プリペイドカードとしての機能も備えたスグレモノだそうだ。

「おお、分野的にもっと鉄と油の匂いが漂ってきてそうな見た目を想像していましたが、意外なほどに綺麗というか、お洒落な建物ですね」

現地に到着し、ついに学生生活が始まるのだという実感を胸に門をくぐる。一応編入という形になるが、果たして友達は出来るだろうか。事前に受け取っているプリントの記載に従い、目的の講堂へ向かうが……。

（ず、随分と視線を感じます……！ やはりこの髪の色のせいでしょうか……しかし、軍人たるもの、この程度で狼狽えてはいては少尉の名が泣きます！）

居心地の悪さから逃げるようにして、目的地の講堂の扉を開ける。

「失礼します」

ザワツ——！！！！

「ひゃあっ!?!」

少尉の名が泣いた。一瞬の静寂の後、一斉に騒めき出す講堂内。

(ななななんだか、あの研究所の居住区に初めて入った時とはまた違った圧力を感じます!! それなりの修羅場を乗り越えてきた自負はありますが、それでも気圧されるとは……! 工科カレッツジ恐るべしですっ!)

「うわすっごい可愛い……!」

「その髪染めてるの!? え!? 地毛!」

「顔ちっちゃ! スタイル良!」

「俺と結婚してくれ!」

「化粧品どこのやつ使ってるの!」

男女問わず質問の波が押し寄せる。最初は頑張ってくるくると答えていたソラだったが、やがて限界を迎えて目が回り出したところで教授が講堂に到着し、その場は収まった。

「昨日話したが、今日からこの機械科に通う編入生だ。では自己紹介を」

「はい。改めまして、ソラ・ヤマトです。出身は月のコペルニクスです。昨今の情勢を鑑みてこちらに移住してきました。仲間に入れて下さると、嬉しい……です。よろしくお願いします」

はにかむような笑顔を見せた少女は、ペコリとお辞儀をする。それだけで、講堂は祭りのフィナーレの様に湧き上がる。

「うおおー……!」

「きゃー……!」

(ひいひい、助けてくださいマリユーさん!!)

その週の校内新聞は「女神降臨」の四文字と共に、ソラのはにかんだ笑顔の写真が一面を飾った。

「うう、流石に疲れました……」

初日の講義を終え、ソラはぐったりと机に項垂れる。そんな彼女の目の前に、コンッと飲み物のカップらしき物が置かれる。見上げると、跳ねた後ろ髪が印象的な少女がこちらを覗き込んでいた。

「大変だったでしょ。それ、編入祝いと初日お疲れ様のご褒美よ」

「ん、すみません、気を遣って頂いて……いただきます」

「どーぞどーぞ」

フタもカップも紙製で中身が見えなかったが、とりあえず勧められるがままにフタから生えた太めのストローを啜えて啜った瞬間、ソラの全身に衝撃が走った。

「んんん!?ほいひいいい!!」

構内のカフェで売っているイチゴとバニラのシェイクだよという少女の説明など耳に入らずソラは無我夢中でストローに吸い付く。しかしそんな事をすれば当然――。

「んー……!!!頭がキンキンします……!!」

「あははははは!そりやそうなるよ。ほら、落ち着いてゆっくり飲みなさい」

「うう、すみません。あまりの美味しさに我を失いました。あ、えつと、ソラ・ヤマトです。貴女は?」

「ミリアリアよ。ミリアリア・ハウ。ミリイって呼んでね」

「ミリイ……。とても可愛らしい愛称です！私の事はそのままソラとお呼びください、ミリイ！」

「あはは、ありがと。よろしくね、ソラ」

「はい！よろしくお願いします！」

「ところで講義の方はどう？ついていけそう？」

「はい。そっちは問題ありません。というかその……」

「あー、楽勝過ぎてあくびが出るって顔してるわね……。ところで、ソラはコーデイネイターなの？」

「！」

それはある程度覚悟していた質問だった。ソラは不安を感じながらも、努めて冷静に答える。

「えと、そうです。第一世代ですが」

「そっか。ご両親はナチュラルなんだね」

「……ミリイはナチュラルですよ。その……怖いとか妬ましいとか、私に対して思わないんですか？」

「私は特にコーデイネイターに対して悪い思い出が無いからね。ここの人達も基本的にはコーデイネイターだからって嫌がらせしてきたりはしないと思うよ。むしろ勉強教えてくれってせがまれて大変かもね？」

予想もしていなかった答えに、感動のあまり呆気に取られるソラ。

「わあ……。それはとっても素晴らしい事です！皆の頭から煙が出るまで教えちゃいます！」

「ふふつ。すぐに私も教わりに行くかもね？」

「任せてください！ミリイなら大歓迎です！」

その時、一人の少年がこちらに歩いてきた。

「おい、ミリイ！お待たせ、帰ろうぜ！……って、編入生!？」
「ソラ・ヤマトです」

「知ってる知ってる。俺はツール・ケーニヒ。ツールでいいぜ。ちなみに、ミリイの彼氏な！」

「ちよ、ツール！」

「わわ、ミリイの顔が真っ赤になりました！」

「ソラまで！……もう」

「はは、いいじゃん別に。隠す様な事でもないだろう？」

「はいはい。さ、帰りましょ」

「はい。また明日、です」

「うん。じゃあね！」

「じゃあな」

二人と別れ、ソラは自宅となったモルゲンレーテへ向かう。

「はい、もう出てきて良いですよ、トリイ」

「トリイ！」

「それじゃ、モルゲンレーテまで競走です！」

ようやく手に入れた普通の学生としての日常を、少女は全力で謳歌する。

それは世間で『青春』と呼ばれるものに、他ならなかった。

「ただいま帰りました！」

「ソラちゃん、お帰りなさい。良い事があつたって顔してるわね？」

「えへへ、私にもお友達が出来ました！」

「あら、良かったわね。仲良く、大切にしなきゃダメよ？ 学生時代の友達ってというのは一生の友達にもなり得るものだから」

「もちろんです！ そうだ、その子からストロベリーバナシエイクというとっても美味しい飲み物を教えて頂いたんですよ！ お給料を貰ったらマリユーさんにご馳走しちゃいます！」

「まあ！それは嬉しいわね。楽しみにしているわ」

（はああああ〜！ ほんとにずっと見ていられるわねこの子は……）

年相応にはしやぎ屈託なく笑うソラを見て、マリユーも思わず微笑みを零す。日中の仕事のストレスなど一瞬で吹き飛んでしまう。

「そうだわ、講義の方はどうだったかしら？あまり心配はしていないけれど……」

「んと、言い方は悪いですけど、正直拍子抜けでした。なので頂いた教材に一通り目を通して、面白そうな所を抜粋して調べて、自習に励んでいました。」

「ええっ？もうこれ全部読み終わったの？」

「一字一句を呼んだわけではありませんが、要点を見て内容は理解出来ました。研究所で私が学んだのと被っている部分も多くあったので、それほど時間は掛からずに済みました。ちなみに面白そうだなと思ったのは、外部強化骨格、パワードスーツでしょうか」

ソラが理解したと言っている教材の山は、一般学生が一年を通して学ぶ必修科目の他に、全ての選択科目のの専門書をも内包していた。いくら予備知識があるとはいえ流石に冗談が過ぎるぞと言いたくなる所だが、それを可能にしてしまうのがスーパーコーディネイターという存在なのだ。目の前で目を輝かせている少女が持つ、絶大な能力

を垣間見たマリユールは言葉を失う。

(これが、この子が背負っている物……。ハルバートン提督はこの子を……。いえ、だからこそ、なんでしようね。そして幸か不幸か、私達が〃これから造ろうとしているもの〃に対して興味を持っている。……。分かっていきます、閣下。例え造るのが兵器だろうと、今彼女を守るのは私達だけなのだと……)

「ソラちゃん、いえ、ヤマト少尉。話していた通り、これより任務について説明します」

「……！ はっ！」

「まず、この映像を見て貰います。これは約半年前に行われたプラント近辺での戦闘の模様です」

「戦闘……ですか？」

「ええ。紛れもなく本物の、人と人が命を懸けて戦う様子です。心して見るように」

映像は戦闘に参加していたMAメビウスから転送されていたものだ。モニターには、圧倒的少数なはずの人型兵器が、数の差をもともせず次々にメビウスを撃墜していく様子が映し出されていた。

「この人型の兵器は〃モビルスーツ〃と呼ばれ、映像に映っているのは〃ZGMF-1017 ジン〃という機体だそうよ。諜報部の調べに寄ればこの機体がZAFTを代表する量産機で、他にも様々な用途に合わせた機体の開発が進行中とのこと」

「モビル……スーツ……」

その単語は、ソラにとってはなんとも魅惑的に響き、ガチャリ、と彼女の中の何かを動かした。

「ソラ・ヤマト少尉」

「はっ」

「……貴女の任務は、これらを圧倒する性能を持つMS、コードネーム『Gシリーズ』計五機の開発及び、そのうち一機のパイロットを務める事です。ロールアウト予定は来年1月。何としても間に合わせなさい。」

「……はっー」

「また、これらを運用する為の新造艦開発の計画も進行しており、私はそちらのチームに参加しています。これら五機の構想については資料を渡しますが、そこから先は事実上貴女が開発主任となります。チームを動かす為のフォローはもちろんしますが、どうやって造るかは貴女頼みという事ね」

言葉を重ねるごとに、マリユの顔は渋くなって行く。堪え切れず、つい本音が零れる。

「……正直、こんな命令は常軌を逸していると思っっているわ。でも――」

「ラミアス大尉。いえ、『マリユさん』」

「――え？」

「分かっています。教官とマリユさんは、私が人間として生きられる唯一の方法を示して下さいます。その為に、私に兵器を作らせる事になったとしても。その引き金を私自身に引かせる事になったとしても」

「っ!!!」

「教官は、ブルー・コスモスという地球軍において強大な影響力を持つ組織を相手に、彼等と同じ地球側の立場でありながら、あの地獄から私を連れ出して下さいました。マリユさんは、私を実験動物として使い潰すのではなく、私という人間を守り、私という部下を頼って下さいました。……だからお願いです。どうか……どうか、少しでも恩をお返しさせて下さい。兵器を造る罪を、引き金を引く罪を背負わせ

てください。お二人を……私の大切な人を守る為に、力を振るう事を許して下さい！」

「ソラ……ちゃん……」

言わせてしまったと、マリユーは下唇を噛んだ。だが理解もしていた。彼女は既に、守られるだけの子供ではないのだと。自分の足で立ち上がり、明確な意思を持ち、同じものを背負わせると言っているのだと。これを拒むことはソラの生き方を否定してすることになる。そう感じたマリユーに出来る事は、首を縦に振る事だけだった。

「……分かったわ。貴女の全力を以て、やり遂げて見せなさい」

「はい！ 任せてください！」

（ああ、この笑顔一つに勝てないんだもの……。ほんと、いよいよ戦争が始まろうって時に子供に兵器開発を頼るなんて、碌な死に方しないでしょうね、私達は。けれどそれが彼女の未来に繋がるのなら、たとえ世界を敵に回しても、最期の瞬間まで彼女を守る為に全力で戦いましょう。そうですよね、閣下……）

「それじゃ、構想のデータを渡すわね。五機と言ってもまずはベースとなる一機を完成させてみないと他の見通しが立たないと思うから、まずは最初の一機の完成を目指しましょう」

「了解しました」

「じゃ、頼むわね。くれぐれも夜更かしし過ぎて体調を崩さないように。良い？」

「き、気を付けます……。では、早速取り掛かります！」

パタパタと去っていくソラの背を見送り、マリユーも持ち場に戻って行く。

「ふんふん、おおよその設計思想や盛り込みたい要素などは固まっているようです。そして目玉は実弾を無効化するフェイズシフト装甲とビーム兵器。……しかしモビルスーツですか。兵器として生み出すのは悲しい事ですが、宇宙を翔けるマシンというのは非常に夢があります！カッコいい子達をサクサクサクと完成させて、教官とマリューさんをビツクリさせてやりましょう！」

おー！ と一人気合いを入れるソラ。受け取った基本データを頭に叩き込むと、彼女に支給された最高級スペックのPCをフル稼働させ次々に試作図面を起こしていく。

強大な衝撃荷重に耐え得る強度、敵を翻弄する運動性能、より早く敵を捕捉する索敵能力、より長い連続稼働時間、連続出撃に際しての優れたメンテナンス性、消耗部品の既製品利用による低コスト化など、設計において必要な要素を余すことなく図面に盛り込む。

「ふう、ここまで図面に起こせば機体の全体像から動きがイメージできますね。さて……」

作図がある程度進んだところでソラは一旦手を止め、目を閉じて意識を集中する。

（今こそ研究所での自主練の成果を見せる時です。あの力は戦闘に限らず、様々な現象をイメージとして自分の物に出来るはず。言わばあれは“人知を超えたスペックを誇る超高速シミュレーションソフト”です。あれを元に演算エンジンを作り込めば、実機試験を上回る精度の賢いシミュレーターが作れるはず……いえ、やって見せます！……っ!!）

PCの作動音が聞こえなくなる。次々に余計な情報が遮断され、無

重力下、地球重力下、様々なシチュエーションで稼働する機体のイメージが頭に浮かぶ。射撃武器の反動、スラスターの発熱量、加速や旋回で関節に掛かる引っ張り・捻じれ荷重等、機体に掛かる様々な負荷がイメージ出来る。

スツと瞼を開け、その透き通るような紫の瞳を再びPCのモニタに向けると、浮かんだイメージを一片も無駄にするまいとキーボードを叩き始める。その打鍵音は、ソラの部屋に朝日が差し込むまで途切れる事は無かった。

「……………やん、ソラちゃん！ ……ソラ・ヤマト少尉！」

「ひゃい!!? フェイズシフトダウンしてりゅ!!?」

「寝ぼけて機密を口にしないで頂戴」

「あうっ」

特製のシミュレーションソフトを無事完成させると同時に気力と体力が限界を迎えてシャットダウンしていたソラは、様子を見に来たマリューから早速デコピンを頂戴する。

「夜更かししないようにって言った傍からこれなんだからもう……。それで、データは見てくれた?」

「んーちゃんと見ました! MSは夢の詰まった素敵な乗り物です!」

「そ、そう。どうかしら、設計は出来そう?」

「はい! ええとですね——」

早朝のモルゲンレーテ社に、ソラの報告を受けたマリューの悲鳴が響き渡る。

07 友達

改めて記すが、ソラ・ヤマトは十四歳の少女である。

マリユーは戦慄した。彼女がソラにインプットしたデータはあくまで構想段階の大雑把なスケッチや、盛り込みたい装備、参考程度のジンの戦闘映像や装備のデータ程度だ。それが一晩寝て起きたら、たった一人でいきなり凶面を起こしただけでなく、実機試験の結果を机上で得られるソフトの開発というアウトプットを吐き出してきた。

今朝の段階でソラが上げてきた凶面の量は、この分野に特化した技術者を世界中からかき集めてチームを組ませても一カ月は掛かろうかという量だ。それを昨日の日付が変わる前に終わらせ、更にそれをベースに頭の中で現象をイメージしてシミュレーションソフトに組み込み明け方には完成させるなど、到底人になせる技ではない。

おまけに突貫工事の様に作られたそのソフトは、世界中の技術者がいくら金を積んでも手に入れようとする程のクオリティときた。地球上どこか世界の技術力のパワーバランスを粉々に破壊するツールが産み落とされる瞬間に、マリユーは立ち会っていた。

「ええと、少し聞いても良いかしら。ヤマト少尉」

「はい、なんですか？」

「その……、百歩譲って凶面を起こすところまではこれまでの貴女を見ていれば『できるかも』くらいには思えるわ。けれどこの、特製？の、シミュレーションソフトというのはその……、本当に一晩で組み上げたの？」

「あー……、やっぱりそう思われますよね。正直、私自身でも全てを上手く説明し切れるわけでは無いんですけど、マ……ラミアス大尉は上官なので、言葉に出来る範囲で説明しておきます。その情報の扱いはお任せします」

ソラはその不思議な能力について、これまでの経験を含めて語る。

初めて覚醒した時の事、集中力と意思の強さが発動の切っ掛けになる事、それを制御下に置いている事、しかし上手く誘導されアズラエルにバレた事、用途は戦闘だけに限らず今回の様にも使える事等、全てを打ち明けた。

『あの娘は、スーパーコーデイネイターとしての力とは別の、人並外れた力を見せる時がある』

(閣下が仰っていたのはこの事だったのね……。そしてその不思議な力にスーパーコーデイネイターとしての情報処理能力が加わる事で、このツールを作り上げたと)

マリユールが顔を引き曇らせながらもなんとか納得している一方で、ソラは不満そうな表情でこう言う。

「でもまだ完全じゃなくて、MSの設計以外に流用できないんです……。例えば車とかだと、路面と接地するのはゴムで出来たタイヤなので、それだけでもちゃんとした結果を計算出来なくなってしまう。お仕事にはこれで十分なんですけど……。むう」

「そうむくれないで。十分過ぎる、というか、こんなことが出来るなんて思ってもみなかったから、正直驚いているわ。貴女のその能力については当然秘匿します。わざわざ言う必要も無いでしょうし」

そう言いながら、マリユールはパンパンに膨らんだソラの頬を人差し指で押すと、ぷびーつと音を立ててそれが萎む。

(かわ……)

「つていけない！ 話し込んでいる場合じゃなかったわ。ソラちゃん、授業に遅れないようにね？」

「はっ!? そうでした！ マリユールさんが早めにここに来てくれて助かりました！」

「今度からは気を付けるのよ。シャワーくらいは浴びてから行きなさい」

いね」

「はい！」

自分の職場に向かいながら、マリユールは自分の心に火が付くのを感じていた。

（私も負けていられないわね。強襲機動特装艦 “アークエンジェル”、絶対に間に合わせて見せる！）

「間一髪！セーフです！」

ソラが講堂に駆け込んでから一拍置いてチャイムが鳴る。完全に油断していた。朝のシャワーの気持ち良さについて身を任せてしまい、気付けば遅刻ギリギリの時間になってしまった。講堂中から「女神の駆け込み乗車だ！」などと歓声が聞こえて来たので、ソラは顔を赤らめながらミリアリアの隣の席に逃げ込み、小声で挨拶を交わす。

「おはよ、ソラ。大丈夫？」

「おはようございます、ミリィ。寝不足の頭で朝シャワーは危険でした。ついのおんびり……」

「あく、朝シャン気持ち良いもんね。さ、講義頑張りましょ」

「はい……頑張つて寝ないようにしないといけません」

「ほんとに大丈夫かなあ」

講義が始まり十分、早くも隣の席から寝息が聞こえ始める。ミリアリアはやっぱりかと一つため息をつき、再びペンを走らせた。

昼休み、結局午前中いっぱいを睡眠に費やすことで元気を取り戻したソラは、ミリアリアとトールに案内され食堂を訪れていた。初日は隠れるように売店で済ませてしまっていたので、友達バリアーを得ていざ出陣と言ったところだ。

「これは選り取り見取りというやつですね。どれも美味しそうです……」

「あんた食べ物を前にするといつになく真剣な目つきになるわね」

「迷ってんなら、俺は煮込みハンバーグ定食をお勧めする！」

「に、にこみはんばーぐていしよく!？」

ソラは即決でトールおすすめの煮込みハンバーグ定食を注文し、涎が垂れそうになるのを堪えながらテーブル席に着く。三人で一緒に「いただきます」をして、いざハンバーグを口に運ぼうとしたその時、新たに二人の人影が現れた。

「トール、そこ良いかな。話題の編入生も居るみたいだけど」

「おう、サイにカズイ、席はあるから来いよ！」

「悪いな。ええと、ソラ・ヤマトさんだったね。俺はサイ・アーガイルで、こっちが……」

「……カズイ・バスカーク。えつと……食べていいよ？」

「あむっ」

唐突に自己紹介が始まり、ソラはフォークに刺したハンバーグを迎え入れる為に大口を開けた状態で固まっていたが、流石に見かねたカズイに促されようやく獲物を口にする。すると、想像以上の幸せが口から脳へと伝播した。

「もぐもぐ、んんん！ 美味しいです！」

「あはは、自由な子だな」

「だね」

ソラを見た二人の反応に、トールは肩を震わせて笑っている。

「あつ、失礼しました。ソラ・ヤマトです。予め言っておきますが、第一世代のコーデイネイターで両親はナチュラルです」

「ああいや、こつちこそすまない。気を遣わせちゃったかな」

「いえ、結局食べちゃいましたから……えへへ」

「あはは！それもそっか」

ソラは照れ隠しにもう一口ハンバーグを頬張る。他の者もそれに続くように各々食べ始める。皆ソラがコーデイネイターであるという事はさほど気にしていない様子だった。それこそが中立国としての素晴らしい所なのだろうが、食べるのに忙しいソラはそれどころではない。

「ソラ、もうちよつと落ち着いて食べなつて。ああほら、ほつぺがソースでベタベタじゃない。」

「ん〜」

「しかし、すっかり姉妹みたいになつてんなー。昨日知り合つたばかりかだつてのに」

「ミリイはとっても優しくていい人なので、つい甘えてしまいます。自慢のお姉ちゃんです！」

「はいはい。口の中の物、飲み込んでから喋りなさいね」

「むぐむぐ」

「親子の間違いじゃ……」

「カズイ、何か言つた？」

「な、なんでもないつて！」

まだ親やる歳じゃねえぞと、カズイに睨みを利かせるミリアリア。しかし、コーデイネイターの世話を焼くナチュラルという貴重な構図

は、この国だからこそ見られるのかも知れない。

「そうだ。ねえソラ、今日の放課後時間ある？ モルゲンレーテの研究室に資料持って行かなきゃいけないよ。案内するついでに手伝って貰えると助かるんだけど……」

「はい。お安い御用です！ 皆さんはどうしますか？」

「ああ、用も無いのにあの教授んところ行くと色々手伝わされるから、俺達はパスで！」

「ではミリイとデートですね！ トールの許可も出たので後ろめたさもなし。素晴らしいです！」

「何馬鹿な事言ってるのよ。まあでも確かに、色々お話したいなどは思ってたんだ。ソラ変わってるから面白いし」

「そこはかとなく馬鹿にされている気がします……」

「あはは、褒めてんのよ。じゃ、放課後よろしくね」

「分かりました」

その日の講義を終え、ソラとミリアリアは持って来いと言われていた資料を分担して持つ。向かう先はモルゲンレーテだ。自分で「デート」と称していただけあって、ソラはさり気なく車道側を歩いたり、歩くペースをミリアリアに合わせてたり、荷物を多めに持っていたりする。

(この子、見た目は飛び抜けて可愛い女の子なのに紳士のスキルまで完備してるの？ 天然で自由に保護欲を掻き立てられるかと思えば、妙に頼れる所もあって……なんと言うか、本当に不思議な子ね)

ミリアリアは隣を歩く少女を見ながらそんな事を思う。ふと、彼女

の視線を感じ取ったソラが口を開く。

「実はですね、案内して貰う必要はあんまりないかも知れません。」
「え、どゆこと?」

「詳しくは話せませんが、私は技術協力者として今モルゲンレーテ内の一室を借りて生活しています。つまりマイホームです」

「ええ!? モルゲンレーテに技術協力って、だってあんたまだ十四歳でしょ? そんなことってある?」

「あー……、ミリーの反応は最もなのかも知れませんが。まあ、色々訳アリでして。」

「そりやそうでしょうよ……。普通ならお金貰って働く歳ですらないんだもの。けどまあ、それなら案内も必要無さそうだし、何より先生としてもかなり期待出来そうね?」

「そういう事です。ドンと頼って頂いて構いませんよ!」

「そりや頼もしい。じゃあこれさっさと届けちゃいませよ! 勉強は……そのまま研究室でやるのが良いかな?」

「そうですね。流石に私の部屋は機密だらけなので怒られちゃいます。」

「怒られるで済めばいいけどね……」

「そしたら口封じの名目で、ずっと私の部屋で軟禁生活ですね!」

「いやいや笑えないから!」

「ふふふつ、冗談です。軟禁生活なんて碌なものではありませんからね」

「……っ」

一瞬、ソラの笑顔に陰りを見たような気がしたミリアリアだが、その時は深く追求したりはしなかった。

「ふう、到着到着つと。手伝いありがとね、ソラ」

「いいえ、私はただ家に帰ってきたようなものですから。さき、勉強始めましょう」

「よし！それじゃよろしくね、先生。今度好きな食べ物奢ってあげる」
「ほ、ほんとですか!?!じゃあ！じゃあ是非ストロベリーバナラシエイクをですね！」

「美味しいものは他にも一杯あるから、またその時にね。——じゃ、最初はこのモジュールについてなんだけど……」

「ああ、これですね。これは——」

それから二時間ほど、ミリアリアは可愛らしい特別講師の講義を受けた。夕飯の時間が近づいてきた事もあり、二人は勉強会を切り上げる。ソラ曰く、このくらいの時間で切り上げるのが最も効率が良いらしい。お待ちかねのお喋りタイムというわけだ。

「疲れたー！けどびっくりしたわ。今までで一番分かりやすい授業だったもの。ソラは教授目指せるんじゃない？」

「わあ、ミリイに褒められました！でも正直教授はあんまり……です。ね。もつともものづくりにとっぴりな人生を希望します！」

「ふふ、そっか。……私さ、本音を言うと少し不安だったんだ。コーデイネイターに関して嫌な思い出が無いと言っても、実際に深く関わった事があるわけでも無かったから。少し話してるうちに馬鹿にされたり、見下されたり、嫌な思いをしたりするのかなって。正直、今日誘ったのはそれを確かめたいって思いもあったの。だから……、試すような真似して、疑ってかかってごめんさい」

「そんな、気にすることはありません。ミリイのその感情は誰でも持ち得るものです。だけど、世界にはその不安の拭い方を間違える人達が沢山居ます。極端な例ですけど、今まさに始まるうとしている戦争も、それに起因するものです。一方で、ミリイは私の事を理解しようとして歩み寄って下さいました。私にとってはその事実が、とっても嬉しいです！」

「ソラ……」

「私の出自は少し変わっていて、コーデイネイターを特に嫌うナチュラル、所謂ブルー・コスモスに生活を滅茶苦茶にされた事がありまし

た。それは本当に……死んだ方がマシかと思うくらいの日々でした。けれど、私より絶望的な運命を背負いながらも、私よりたくさん笑い、私を好きだと言ってくれた子、私が私自身の力で生き抜けるように様々な事を教えて下さっただけでなく、いよいよ本当に死にそうになるギリギリの所で私を救い出してくれた人、私が私の能力を活かせる環境を与えてくれた人、彼等もまたナチュラルでした」

ソラはつい先日までの出来事とは思えない地獄のような、だが大切な記憶を思い返し、胸に手を当てて丁寧に言葉を紡ぐ。ミリアリアは、先ほどまでの元気な彼女とは異なる、神秘的なその顔に見入り、話に聞き入った。

「ですから私は……私は幸せです。コーディネイターとしてでなく、私を私として接してくれる人達に出会えたこと。一度は諦めた学生生活を送れること。そして何より、その中でミリイのような素晴らしい友達が出来たこと。本当に、私には勿体ないくらいの奇跡ばかりなんです」

「……ねえソラ。一つ教えてあげる。ナチュラルとかコーディネイターとか関係なく、そうやって貴女を助けようって思う人が現れるのはね、貴女が貴女だからよ。それは奇跡でもなんでもない、貴女の力でしょ」

「そう、でしょうか……」

「うん。私ね、その人達の気持ちが分かる気がするんだ。こうやって少し話しただけでも分かるくらい、貴女は真面目で優しい人だもの。簡単な事かも知れないけれど、今日だって嫌な顔せずに助けてくれたじゃない。だから私は、そんなソラの助けになりたいって思うよ?」

「……っ!」

「だからその、今からすっごく柄にもない事言うけど……敢えて言うのと、えっと、生まれてきてくれて、今まで生きてきてくれてありがとう、かな。って、思った以上に恥つつずかしいなこれ!」

ミリアリアが顔を真っ赤にしながらい口に含んだその言葉は、奇しくもかつてソラがB13に送ったものと同じだった。言われる側に回ったソラは、その威力を思い知る。

気付けば、身体が勝手に動いていた。

「わわっと。……ソラ?」

「す、少しだけ!」

「え?」

「少しだけ……許して下さい。このままでいさせてください……ミ
リイ」

「……うん」

ミリアリアは抱き着いてきたソラの背中に手を回し、甘えん坊の妹をあやすような気持ちで優しく撫でる。

一方、ソラは――

(な、なんでしよう……この気持ちは。いつもの好きと少し違います……! 顔が、体中が沸騰するように熱くて、胸が苦しい……! 今だけは顔を見られてはいけない気がします!)

本当はその気持ちの正体は分かっている。

分かっているからこそ、『少しだけ許して』などという言葉が出たのだ。

ミリアリアの腕の中で、ソラはその気持ちが己の心臓に根を生やしてしまわないように――

そつと、蓋をするのだった――。

「むう、これはいけません……。」

昨晚作ったシミュレータを走らせながら、ソラは頭を抱えていた。

「あろうことか彼氏持ちの女の子に……。っていやいや！ これは良くない感情です！ 禁断×禁断のダブルパンチです！ でも……はあ、さっきのミリイ、素敵過ぎました……。ミリイ……」

勉強会を終え、ミリアリアをモルゲンレーテのゲートまで見送ってから自室に戻り、仕事の続きに取り掛かったソラだったが、頭に浮かんでくるのは計算式や図面ではなく先ほど見送った友人の顔だ。

その場では気持ちに蓋をしたはずだったが、一人になった途端に抑えが利かなくなり、無理やり仕事に没頭しようとしても集中など出来る筈も無い。

幸いなことにソフトは不具合なく動いているが、当の生みの親は頭から煙を噴いてフリーズしていた。

「いくら男の人が苦手だからと言って、こうも簡単に同性に……。ここ恋をしてしまうなんて……。いやでも、ミリイが素敵なので仕方ないです！ これは当然の感情です！」

ソラは男性恐怖症ではないが、研究所で散々な目に合わされた事もあり、異性に対して強い苦手意識を持ってしまった事は確かだった。もちろん恋愛など以外の外で、出来れば信用出来る人物以外の異性は口も利きたくない程だ。

無論同性であれば無条件で信用できるというわけではないが、まさか知り合って二日の同性相手に恋愛感情抱くことになるなど、ソラ自身としても想定外が過ぎた。

「しかし、あの二人はお似合いです。私には、彼らの末永い幸せを願う事しか出来ないのです……うう」

ソラにとって苦しいのはそこだ。彼らが二人で居る姿はとても自然で、まるでカップルである事こそが当然であるかの様な、一つの「幸せ」の完成系だった。恋心を抱いたものの時既に遅し、ソラが割つて入る余地は無いのだ。

しゅんとしたソラがデスクにもたれて平べったくなっていると、視線の先に湯気の立つティーカップが静かに置かれた。ほのかに漂つて来るのは、アールグレイの香りだ。そして視界の外から声を掛けられた。

「そんなにしよげちやって、どうしたの？ 可愛い少尉さん」

「マリユーンさん……」

聞きながら、マリユーンは演算中のPCモニタを覗き込む。

「あら、早速昨日のソフトが活躍してるのね。調子はどう？」

「はい。今のところはエラーや欠陥等特に無く、快調に動いてくれます」

「それは上々ね。貴女の方はそうでもなさそうだけれど。……本当にどうしたの？」

「その、えと、相談にもならないような、愚痴になっちゃうんですけど……」

「ええ、なんでも話してみなさい」

「そのお……、うう、失恋……しました」

「まあ……」

ぽつりぽつりと、ソラは事の顛末と自分の気持ちを語り始める。マリユーンはその話を聞きながら、たまに流れる彼女の涙を拭いては、優しく背中を撫でるのだった。

「すみません。みっともない姿を……」

すっかり泣き腫らした目を擦りながら、ソラはマリユーに謝罪した。

「良いのよ。泣きたい時は泣くべきだもの。辛い時は私を頼りなさい」

「でも、ここに来てから頼りつきりな気がします。まるでお姉ちゃんが出来たみたい、ってすみません！ さ、流石に失礼でした！」

「っ……ふふっ、だから気にしなくて良いってば。仕事は仕事、だけど基本的には姉だと思って何でも頼りなさい。良い？」

「わわっ、は、はい」

「よろしい。じゃあ今日はちゃんと寝るのよ？」

少し元気を取り戻したソラの頭を撫でてから、マリユーは部屋を後にする。デスクに視線を戻したソラは、だいぶ湯気の減った紅茶を見つめ、慌てて飲み始める。

「そうだ、冷たくならないうちに紅茶を頂きましょう。……ん！
とっても良い香りです！」

——廊下。ソラの部屋を出てから、マリユーは息も絶え絶えと言った様子で壁に寄り掛かる。

「はあ、お姉ちゃんはヤバかったわね……あの子に『お姉ちゃん』なんて上目遣いで甘えられた日にはどうにかなってしまいそうね。いえ、そんな事より——」

ソラの初恋の相手は、女の子だった。そういったものに嫌悪感があるわけではない。ただ、身近なところでその感情が現実に存在するという事を見せつけられたマリユートの心は、激しく揺れていた。

(もしかしたら私があの子に恋をするなんて事も、あつたりするのかしらね……。もうすぐバレンタインだし、チョコレートをプレゼントするくらいなら普通よね?)

ソラはどんなチョコが好きかな、いや何でも好きそうだな、などと考えながら彼女も己の仕事場に戻るのだった。

そして迎えた2月14日。

オーブではバレンタイン一色だ。ヘリオポリスも例外ではないよ。うで、至る所でチョコレートの店頭販売が行われている。が、学生であると同時に地球連合軍の軍人でもあるソラからすれば、流石にふわと笑っていられる状況では無くなってきていた。

ここヘリオポリスはオーブ所有の資源衛星ということもあり、地球とプラントの摩擦からは距離を置いているという認識が一般的である。ところがその実態は、モルゲンレーテ社を隠れ蓑に、地球連合軍が最新鋭の兵器を開発している極秘ラボでもあり、一歩間違えれば戦場のど真ん中になりかねない、非常に危うい場所だった。

加えて、3日前に連合がプラントに対し宣戦を布告した。その中心に居るマリユートとソラは、嫌でも気が引き締まるというものだ。

「ついに連合がプラントに宣戦布告……。今後は余計に機密管理に気を遣う必要がありますね」

「そうね。特に貴女の握っているデータは危険よ。極力持ち運ぶような機会が無いよう注意して」

「はい。友達の日常を血で汚す訳には行きません。細心の注意を払います」

しかしそんな彼女達を嘲笑うように、人々は、世界は、破滅の道を突き進む――。

この日、地球連合軍が放った一発の核ミサイルにより、プラントの食糧生産コロニー“ユニウスセブン”が崩壊。24万3721名の命を一瞬にして奪ったこの惨劇は“血のバレンタイン”と呼ばれ、地球とプラント、ナチュラルとコーディネイターの対立を決定付ける出来事となったのである。

開戦から間もなく飛び込んできたショッキングなニュースに世界中がどよめく中、テレビ画面が映り込むソラの紫色の瞳は、地球軍の裏側の存在を真っ直ぐ睨みつける。

このやり方を、彼女は良く知っている。
より感情のままに、より短絡的に、より残酷に、後先考えずに暴力を振りかざす者達の存在を。

「どこまで……！どこまで愚かになれば気が済むんですか！ブルー・コスモス!!」

憤怒を露にするソラの隣で、マリユは言葉を失いつつも頭を切り替える。

「なんて事……！ くっ！ 皆を集めて直ぐに緊急ミーティングを！」

いよいよ本格的な戦争が始まる。何もかもが今まで通りとは行かない。いち早く、部隊の意識を統一しておかなければならないと感じたマリューは、急ぎ隊員達を招集した。

「全員聞いていると思いますが、ユニウスセブンが崩壊しました。我が軍の放った核によって……。軍のトップはプラントの自爆だと発表していますが、信じる人間はまず居ないでしょう。自軍の事とはいえ、皆それぞれ言いたい事もあると思います。……ですが、起きてしまった事は変えられません。我々は、我々に今出来る精一杯の事をやって行くしかないのです。これを折りに、Z A F T もいよいよなぶり構わず攻撃してくる事でしょう。この存在とG計画もいつZ A F T が察知するか分かりません。したがって、我々にはより一層の強固な機密保守及び開発期間の短縮が求められる事になります。……この平和なコロニーを血に染めない為にも、各員の更なる活躍に期待します！」

「はっ!!!」

「以上、各員持ち場に戻れ！」

隊員達がそれぞれの作業場に散って行く。その中から、一人の少女がマリューの元に歩み寄ってきた。

「ラミアス大尉」

「なにかしら、ヤマト少尉」

「昨晚、フェイズシフト装甲の基礎理論が組み上がりましたので、データを渡しておきます。時間のある時に目を通しておいってください」

「……本当に驚かされてばかりだけれど、分かったわ。もともとの期限ですら厳しいけれど、実際のところ完成の目途は立てられそうかしら？」

「はい。今後の物流がやや懸念されるところではありますが、幸いこちらはモルゲンレーテのパイプがありますので、十分に可能でしょう。肝心のスペックですが、実現できれば有効射程内の強化APSV弾も弾く事が可能です。ただし装甲維持及び被弾の際に機体のエネルギーを消費する為、無制限に使える訳ではありません。搭載する武装を考慮すると、単機での稼働時間はそれほど長く出来ないでしょう」

「そのための5機、というわけね」

「そういう事です。試験的な装備もいくつか考えていますが、それぞれに特化した機能を持たせて、部隊としての連携を前提に開発を進める予定です。よろしいですか？」

「ええ、それで正しいわ。それらを運用するのが、私が携わっている艦だもの。よろしく頼むわね」

「了解しました。では、失礼します。」

一通りの報告を終えたソラは、踵を返して自室へ向かう。14歳とは思えないほど堂々とした彼女の姿に、思わず目を奪われて手が止まる隊員も多い。そういった者達にマリューが活を入れる光景が、この一週間でお決まりになっていた。

（一刻も早く開発を終わらせて、ヘリオポリスからの撤収を目指す必要がありますね……。コロニー内にスパイが居ないとも限らないですし、急がなければ）

完成までの道筋は見えてきたが、のんびりしている暇はない。ソラは再びデスクに向かうと、途切れる事なく打鍵音を響かせるのだった。

一方、マリューは自室でソラから受け取ったデータを確認していた。

「フェイズシフトの解釈は流石ね。課題は稼働時間という事だけれど、この新装備の構想は一体……」

読めば読むほど、マリユートの口が開いていく。まるでロボット映画の設定資料集でも読んでいるかのような気分だ。これを書いたのがソラでなければ、真面目にやれとブン殴っているところだ。

「580mm複列位相エネルギー砲 “スキュラ”、並の戦艦であれば一撃で墜ちるほどの火力をモビルスーツに持たせるなんて、とても正気とは思えないわね……。それに、“ミラージユコロイド”、これはステルスの究極のような装備ね。確かにこれだけの装備を積んだ機体ならば、短い稼働時間を補って余りある戦果が期待出来るわ」

技術士官大尉としてのマリユード目線から見ても、ソラのやろうとしている事は常軌を逸していた。そもそもモビルスーツすら作った実績が無いというのに、いくら湯水の如く金を使えたとしてもこんな物を1年足らずで造れる筈がないのだ。しかし――。

(でも……彼女なら。)

そう、彼女なら。

ここに書いてある事だけでなく、更なる隠し玉を頭の中に持っていて、その全てを実現してしまいそうな気がするのだ。しかし、そこまでの希望を持つと同時に、今度は別の問題が浮上する。

「これほどの装備を使いこなせる人材ともなると、現時点から選抜と育成を始めなければならぬわね。そして1機は……っ、もう！」

マリユートには、いや、恐らく同部隊の全員が分かっているのだ。このまま計画が進めば、最終的には5機の内の1機には、あの少女を乗せて戦場へ送り出すことになるだろうと。そして、彼女自身もそれを

望むだろうと。

その力に継るしかない自分達の不甲斐なさに、マリユーはただ唇を噛み締める事しか出来なかった。

血のバレンタインから一週間後、プラント Z A F T 軍士官学校。

愛する母を殺した地球人と戦う力を得る為に、コーデインネイターの少年は門を叩く。その悲しみと怒りに揺れる、エメラルドグリーンの瞳の持ち主は――。

「アスラン・ザラです。志願書の提出はこちらでよろしいですか」

「お父上より話は聞いています。ようこそアスラン・ザラ。我々は君を歓迎しよう。優遇はしないがな」

「よろしくお願いします。一日も早く一人前になれるよう、精進致します」

(核などというものを使って罪のない人々を……、母上の命を奪ったナチュラル共を、許す訳にはいかない！)

かつて親友と、人間同士で殺し合うほど人は愚かじゃないはずだと語り合った。だが現実はそのようではならなかった。そんな事がある筈が無いと、関係の無い世界の出来事だと思っている内に、大切な人の命が奪われてしまった。

少年は思う。

愚かだったのは自分の方だと。

世の中には存在してはいけない人間が居て、それらから大切な物を守る為には力が必要なのだという事を。

(僕が軍人になると聞いたなら、ソラの奴は頬つぺたを膨らませて怒るのかな。……それでも、僕は戦わなきゃならないんだ)

これ以上大切な物を失わない為に、アスランは戦いに身を投じる決意をする。その決意が、彼と彼女に悲しい運命を背負わせる事になるなど、この時の彼には知る由も無かったのだ。

それからの日々はあつという間だった。戦いに必要な様々な知識・技術を叩き込まれ、コーディネイター達は瞬く間に屈強な戦士へと進化を遂げる。

ユニウスセブンの一件以降、志願兵の数は飛躍的に増加したが、その中でもアスランの能力は群を抜いており、MS戦・ナイフ戦・情報処理で1位、射撃・爆薬処理で2位の総合1という成績を収めて約半年でアカデミーを卒業。期待のトップエリートとして真紅の制服に袖を通し、Z A F T内でも最高の任務成功率を誇るクルーゼ隊へと配属された。

ナスカ級高速艦 “ヴェサリウス”。その青い戦艦の艦橋に、期待のルーキー5人が集められた。横一列に並んだ彼等と向き合っているのは、仮面で顔の上半分を隠した男だ。

「君達が今日から加わる新人か。私は指揮官のラウル・クルーゼだ。名前を聞いておこうか」

「はっ！イザーク・ジュールであります！」

「ディアツカ・エルスマンであります」

「ラステイ・マツケンジーです」

「ニコル・アマルフイです」

「……アスラン・ザラです」

「ふむ。アカデミーでは優秀な成績を収めているようだな。特にアスランとイザークは常に1、2を争うレベルだったと聞いている」「チツ！」

「おいイザーク、ここではやめとけよ」

「フーン！分かってる！」

アカデミー時代からアスランに対抗心を燃やすイザークが、あからさまに眉を顰めてアスランを睨みつける。そんなイザークをデイアツカが諫め、アスランとニコルは肩をすくめ、ラスティは笑いを堪えている。彼らの関係をおおよそ察したラウは、やや楽しそうに口を開く。

「だが、戦場では何が起きるか分からない。敵の個々の力は取るに足らないが、数が集まれば脅威ともなり得る事は歴史が証明している。いざれ訪れる君達の初任務での役割は、まずは死なずに帰還する事だ。その才能に驕ることなく、きちんと己の役割を果たせ。いいな」
「「「はっ」「」」」

「よろしい。この隊はMS戦闘はもちろんだが、隠密行動や情報戦も仕事の内だ。そういった作戦を遂行するにあたって、当然特殊装備に関する知識や連携が必要になる。君達には当面、ミゲルとオロールを教育担当として特殊訓練を受けて貰う。アスランとニコル、ラスティはミゲルに、イザーク、デイアツカはオロールに、それぞれこの部隊のイロハを学べ」

ラウに促され、近くに控えていた2人の隊員が口を開く。

「よう。昨日と一昨日で艦内を案内したから知ってるよな。ミゲル・アイマンだ。で、こっちがオロール。オロール・クーなんとかだ」
「クーデンベルグだ。こいつのこういふところは見習うなよ。隊長がナメられる」

「はいはい。まったく固えんだよお前は」

「軽口はその辺にしておけ。皆もいいな。こう見えても腕は確かだ。しっかり励めよ」

「「「はっ」「」」」

かつて月面都市で離ればなれになった、とても仲の良い少年と少女がいた。

少女は、悲惨な運命から救ってくれた人に恩を返すため。

少年は、母の仇を討ち、自分達の暮らす世界を守るため。

彼等は敵対する軍の兵士となった。

身勝手な大人達が人を、資源を、財を食い潰し、暴力の限りを尽くすこの腐った世界で、少女達は何を選択し、何を守り――

その為に、どれだけのものを失っていくのだろうか――。

09 | ロールアウト

C. E. 71 1月24日 オープ連合首長国 資源衛星ヘリオ
ポリス

「ふう、あと少し。なんとかここまで漕ぎ着けました……。本音を言えば年を跨ぐ前に完成させて、ちよつとでもスッキリと新年を迎えたかったです。うむう。」

G計画が開始されて1年弱。モルゲンレーテ社の持つ複数の大型ハンガーでは、G計画が大詰めを迎えていた。

ソラはというと、作業がひと段落したところで休憩中。ツナギの上半身をはだけてインナーシャツ姿になっている。身体のラインがはつきり出る上、やや不機嫌な時の頬の膨らみは以前のままのようだ。

そこへ、同じ作業着姿の女性が声を掛けてくる。

「ごおら、今は周りに人が居ないとはいえ、はしたないわよ。はい、水」

「わ！ ラミアス大尉！ す、すみません……」

「貴方はただでさえ綺麗なんだから、もう少し気を付けなさい。襲っちゃうわよっ！」

「ええ!?!」

「冗談よ。仕事熱心なのは良いけど、女の子の自覚を持ちなさいっていつも言ってるでしょっ！」

「あうう、耳が痛いです……」

「私は頭が痛いわよ。ほら、ちゃんと着る！」

マリユーはソラに上着を着せると、前のファスナーを上げていくが

「あら、ソラちゃん、また胸大きくなった？ファスナー上げ辛くなって

るわ……」

「わわわっ！自分で着られますからっ！……って、要らないチエツクしないてください！えっちー！」

「いい加減女相手に恥ずかしがらないの。うんうん、サイドポニーも似合ってて可愛いわね」

「そうやって言えば誤魔化せると思って……。まあ、悪い気はしませんけど……」

2人はこれまで長い時間を共に過ごしたことで、今ではすっかり家族の様な関係になっている。

「ふふっ。けど、本当に1年良く頑張ってくれたわ。MS5機を本当に完成させてしまっんだもの」

「でも、結局ラミアス大尉の“アークエンジェル”の完成の方が早かったです。更にはその後に部品手配等の雑務のお手伝いまでさせてしまい……」

「手が空いただけだもの。気にする事無いわ」

「けれど、本当の課題はこれからです。パイロット候補の人達の操縦シミュレーション結果を見ましたが、それはもう酷い物でした。あれなら生身でハンドガン一丁持つてるお爺さんの方が脅威です」

「言い方はともかく、それはまあ確かにその通りだったわね……」

ソラの誤算はそこだった。見た目は完成している5機だが、ソラ自身が完璧に乗りこなした場合に発揮できる運動性能を想定してOSを組んでしまった為、到底他の人間がまともに動かせるものでは無くなってしまっていた。現在はその問題を解決する為、ナチュラルでも運用可能なOS開発を急ピッチで進めているところだった。

「とりあえずシミュレーターには先に反映させますが、機体に組み込むのはデモンストレーション直前のほんとのほんとの最後ですからね！ 時間と労力と資金を注ぎ込んで、丹精込めて打った業物の刀を

自らの手でなまくらにするんですから、せめてもの悪あがきです！」

まったくもう！とボヤきながら、ソラは頬を膨らませる。それをマリューが指でつついて萎ませるまでがルーティンだ。

「まあまあ。でもそれが彼等の命を守るのよ。とても素敵な事だわ」
「っ……そう、ですね。それに多分、こういう所からナチュラルとコーデイネイターの溝が生まれるんです。私は特に気を付けなければいけない立場でした」

ソラはコーデイネイターであることを抜きにしても賢い。自分の立ち振る舞いひとつで、ハルバートンやマリュー、その他の自分に協力してくれた人々に迷惑を掛けるかも知れないという事、そしてそれだけの迷惑では済まない事をしっかりと理解している。

マリューは見かけより遥かに大人びている少女に感心するとともに、その成長の裏で年頃の少女らしい青春を犠牲にしている事に、胸を痛めずにはいられなかった。

何かしてあげたい。そう思ったマリューは、ふと彼女の持ち物を思い出し、口を開く。

「そうだね。貴女確か綺麗な紫色の石を持っていたでしょう？ あれ、少し貸して欲しいのだけれど」

「っ！……あれをどうするんです？」

“あれ”というのはB13が死に際にソラに渡した石の事だ。

本当に原石そのままの状態なので、ポケットに入れて持ち歩く訳にもいかず、ソラは朝と晩におはようとお休みを言う時以外は自室の貴重品箱に入れて保管している。

最早己の命の欠片とも言うべきその石を差し出せと言われ、ソラは無意識の内に殺気を放つ。マリューは背中に冷たいものを感じなが

らも言葉を続ける。

「そ、そんなに警戒しないで頂戴。私が着けてるこのロケットを作ってもらったアクセサリーショップがヘリオポリスにあるのだけれど、そこであの石を綺麗に磨き上げてペンダントに加工して貰えば、貴女もずっと身に付けていられると思って」

「ペンダント……」

「見たところ、恐らくあれはアメジストの原石よ。水晶の色変種の中でも最も気高いと言われていたり、本当に大切な……愛する人との絆を守ってくれる力があるとも言われているわ。元々貴女の物なのにプレゼント、なんておかしな話だけれど、あの綺麗な石を……他でもない、貴女に着けていて欲しいのよ」

この時、困った様な笑顔を浮かべたマリユーが、どんな思いでその言葉を口にしたのか。

それは誰にも——恐らくマリユー本人にも分かっていなかっただろう。

しかしそれが確かな“暖かさ”を持つものであると感じ取ったソラは、微笑みと共に首を縦に振った。

「分かりました。ラミ……マリユーさんにお預けします」

「っ……ありがとう。貴女に似合うよう素敵に仕上げて貰うから、期待して待っていて頂戴」

「はい！では今持つてくるので、少々お待ちください！」

パタパタと自室の方へ駆けていくソラに、走るなど声を掛けてから正面に向き直る。マリユーは己の視界を埋め尽くす5機のMSを見上げ、以前ソラから受けた報告を思いを出す。

中・近距離戦闘用試作MS GAT-X102 デュエル。ソラが最初に生み出した、5機の中で最もシンプルなMSである。

ビームサーベル、57mm高エネルギービームライフルを主力に、75mm対空自動バルカン砲塔システム “イーゲルシュテルン”、175mmグレネードランチャーといった兵器を備える。

また防御面では目玉のフェイズシフト装甲に加え、アンチビームシールドを備える等、攻守ともにバランスの取れた機体になっており、その白兵戦向きの特徴は “デュエル” の由来にもなっている。フェイズシフト展開時のカラーリングはホワイトとブルー。

重装砲撃用試作MS GAT-X103 バスター。

遠距離からの支援砲撃を想定したこの機体は、主武装として350mmガンランチャー、94mm高エネルギー収束火線ライフルに加え、220mm径6連装ミサイルポッドを両肩に備える。

そしてこの機体最大の特徴はその2挺の連結により、対装甲散弾砲もしくは超高インパルス長射程狙撃ライフルの2種類の強力な方に姿を変える点である。

また、各砲にサブジェネレータを、両膝に予備電源を設置する事により、大出力の射撃武器とフェイズシフトの併用による燃費の悪さをカバーしている。

フェイズシフト展開時のカラーリングはクリーム系ホワイトをベースに、ダークグリーン、オレンジが点在する。

電撃侵攻用試作MS X-207 ブリッツ。

標準となるX-100系の骨格に特殊機能を追加した、X-200系の特殊フレームを採用している。装備も上記2機とは全く異なっており、右腕に装備された攻盾システム “トリケロス” は、50mmビームライフル、ビームサーベル、3連装超高速運動体貫徹弾 “ランサーダート” の3武装を、シールドの役割を果たす外装で覆った複合武装となっている他、左腕には有線式ロケットアンカー のピアサーロック “グレイプニール” を備える。

そしてこの機体最大の特徴は、展開することで電子・光学共に遮断するステルスシステム“ミラージコロイド”。機体名の通り、ステルス性を武器に敵の懐に深く入り込み、痛撃を見舞う事を目的とした機体である。

フェイズシフト展開時のカラーリングはブラック。

高速強襲用試作MS X-303 イーゼス。

上記3機とは根本的に構造が異なるX-300系の可変フレームを有し、MA形態への変形機構を備えている。

この形態は両手足が対象の形状のクローとなっており、それを進行方向に伸ばすことで全面投影面積を減らす巡航形態、クローを広げ腹部の580mm複列位相エネルギー砲“スキュラ”の使用が可能となる攻撃形態に分かれる。

また推力が後方に集中する為、単一方向においての最高速においてはMSを上回る。

この単機での機動性と火力を活かした戦法が可能な一方で、MS形態においても60mmビームライフル、75mm対空自動バルカン砲塔システム“イーゲルシュテルン”、アンチビームシールド、両手足のクローを発生源とする4本のビームサーベル等の武装で固められており、対MS戦闘面でも抜かりはない。

この機体は試作5機での部隊運用を想定した際の隊長機にあたり、通信・分析能力強化の為に頭部に大型のセンサーユニットを搭載している。

フェイズシフト展開時のカラーリングは鮮やかなレッド。

そして最後に完成した、装備換装型試作MS GAT-X105 ストライク。

デュエル、バスターと同様のX-100系フレームだが、更なる改良が加えられており可動域が広がっている他、四肢分散処理比重が高められ運動性能が向上している。

作戦により使い分けられる“ストライカーパックシステム”は、各

専用機と同等以上の性能を付加する事が出来る。また、ストライカーパック本体にも電源が設置されている他、作戦に対する装備の最適化により余剰装備でのウエイト軽減にも繋がっている。

現在は機動性重視のエール、近接特化のソード、砲戦特化のランチャーの3種が設定されているが、ソラの発想次第で可能性は実質無限である。

また、ストライカーパックを装備していない状態での武装は頭部の75mm対空自動バルカン砲塔システム「イーゲルシュテルン」、腰部両サイドのホルダーに収められた対装甲コンバットナイフ「アーマーシユナイダー」のみと非常に軽装だが、ソラ曰く『ストライクはほぼ人間同様の動きが可能なので、フェイズシフト装甲の無い相手にはぶつちやけこれで十分です!』だそうだ。

カラーリングはブルー、ホワイト、レッドのトリコロール。

以上が、G計画においてソラが開発に携わった、驚異的な性能を誇る5機のMSだ。彼女がロドニア研究所で叩き込まれた戦いの技術と、専門家達からかき集めた知識と、豊かな想像力とを余すことなく発揮した結果である。

「大きい。それに重い、わね……」

機体の見た目だけではない。あの少女に、我々はこの兵器達を造らせた。この先、世界中で数え切れないほどの犠牲者を生み出すその引き金さえ、彼女に引かせようとしている。そして戦場に出るといふことは、彼女自身の命すら危ういという事を意味していた。

「本当に……私達はなんて事を……」

背負うと決めた重圧は、それが目の前に実体化した途端にその力を増し、直視するだけでも眩暈を起こす程だった。

噴き出す脂汗を拭う余裕すら無くなったマリユールだったが、そんな彼女を背後から優しく抱きしめる者が居た。

「もう……。一緒に背負うんだって、前にも言いましたよ？」

「ソラちゃん……」

ソラの手は、固く握り締められたマリユールの拳を優しく包み込み、ゆつくりと解す。

「これは、私が望んでやった事です。特にストライクに至っては、私が自分で乗るからと言って好き放題やってしまいました」

「そうみたいね。使った金額の帳簿を見て血の気が引いたもの。閣下に報告した時は珍しく狼狽していたわ」

「うっ、は、反省はしてます。……でも、そのおかげで——」

今度は少し強く、ソラがマリユールを抱き締める。

「私は、私の戦いに必要な力を得る事が出来ました。大切な人を守る為に、自分を守る為に必要な力です。本格的な戦いが始まってしまつた以上、まずは皆で生き残らなければなりません。例え、相手の命を奪う事になったとしても。それはナイフでも、銃でも、MSでも同じ事です。あの研究所で13ちゃん達の命を奪った時点で、もう私はその責任から逃れる事は出来ない、いえ、逃げてはいけません」

「……私には分からないわよ、貴女が泣き喚きもせず逃げもしない理由が。もちろんもう貴女を子供扱いなんてしてはいないわ。それでも……納得出来る訳が無いじゃない……！　なぜ貴女はそれだけの物を背負って立っていられるの!?　なぜ文句のひとつも言わないの!?　怖いよ……貴女を失う事が。そうになったら私は——」

「マリユールさん」

「っ！」

「私は死にません。守るべき人達より先に死んだりしません。それが、私が私に課した、私の責任です。それにですよ、私が折れずにここまで来られたのは、えっと……マリユールさんのお陰ですから……」
「え？」

「辛いことがあるのは、誰だって一緒です。でも、自分を理解してくれる、心の拠り所になってくれる人が居るだけで、そんなのへっちゃらになるんです。あの時ハルバートン提督に助けられていても、マリユールさんに出会わなければ私は潰れていました。ですから、その、あ、ありがとうございます」

どの道顔は見えないのだが、ソラはどうにも照れ臭くなり、マリユールの背中に顔を埋める。その年相応の振る舞いは、不思議な程簡単に、マリユールの胸の痛みを和らげていった。

背中にソラの熱を感じながら、マリユールは正面のMSを見上げて口を開く。

「もう……。礼を言うのはこっちの方なんだから。……貴女のお陰でG計画は最高の形で終わりを迎える事が出来るわ。正直、私達はアーケエンジェルだけで手一杯で、ZAF Tを圧倒するMSなんて作る余裕は無かったのよ。MA乗りだった恋人も亡くして、腐り果てて、毎晩このロケットひとつに縋りついて……。貴女が来てくれなかったら、私の方こそどうなっていたか分からないわ。本当にありがとう」
「ふふっ。どういたしましてです。はいこれ、石持ってきました。あの……ペンダント作り、私も付いて行っていいですか？ OS開発は後で自室でも出来るので」

「ええ、勿論よ。じゃあ着替えたら一緒に行きましょう。この恰好で外をふらつくわけには行かないでしょ」

「はー」

大仕事をひとまずやり遂げた2人は、晴れて街へ繰り出す。笑顔が眩しいその姿は、本来在るべき彼女達なのだろう。

だが、

「報告。ヴェサリウス、聞こえるか。ヘリオポリス、モルゲンレーテ社
保有の大型ハンガーにて地球軍の新型MSを確認。数5。繰り返し
――」

戦いの影は瞬く間に、彼女達の足元まで忍び寄っていた。

10 | 再会

「はい、完成したわよソラちゃん。開けてみて?」

「は、はい……。開けます。~~~~~!!!」

緊張した表情のソラはごくりと唾を飲み込み、マリユールから手渡された箱を開ける。そして中から現れたペンダントを見て、声にもならない声を上げた。

「ソラちゃんにはシンプルなデザインの方がより映えると思って、石はラウンドカットにして貰ったの。……気に入って貰えるかしら」

「わ、わわ……。ほわあく……。…」

「ソ、ソラちゃん?」

「あ、すみません! と、とつても綺麗です! 本当に同じ物とは思えないです! ……こ、こここれ、私が頂いても良いんでしょうか……?」

「良いの何も、元々貴女の物よ。ほら、着けてあげる」

「言われてみればそうでした! と、お、お願いします。……っ」

マリユールがソラの首に手を回し、チェーンの両端を繋ぐ。不意にマリユールの両腕に包まれ首元に顔を埋める形になったソラは、ふわりと漂って来る大人の女性らしい香水の匂いに思わずドキリとする。

(ゆ、油断してました! ハグすると分かっている時のハグとは別の意味で、この母性は危険です!! このままずっとこうされていたいよ
うな気分……。ふわあ)

「……はい、これでよし。うん、とつても似合ってるわ!」

「はい、とつても素敵です……」

私の目に狂いは無かったと笑顔を咲かせるマリユールを見て、ソラはうっとりとした様子で答える。

「まるで夢を見ているみたいですよ……。今日だけでこんなに沢山のプレゼントを頂いてしまつては、バチが当たらないか心配になってしまいます」

「あら？ ペンダント作り以外に何かしたかしら？」

してないわよね？と首を傾げるマリユ。しかしソラはふわふわとした調子でこう続ける。

「いいえ、このペンダントだけではありません。私に、私だけに向けて頂いたマリユさんの優しさや素敵な笑顔も、全部全部、私の大切な宝物です。……こうやって言葉にするとちよつと恥ずかしいですけど……えへへ」

「ソラちゃん……」

流石に自分でもクサイ事を言つたと思つたのか、顔を赤くして誤魔化し笑いをするソラ。しかしマリユにとつては、そんなソラの一挙手一投足全てが愛おしく思えて仕方がないのだ。

「ふふっ、そんなに喜んで貰えたなら、お姉さんも嬉しい限りだよ。……さ、どこかで夕飯でも食べて、遅くならないうちに帰りましょ」
「はいー」

きつと妹が可愛くて仕方のない姉はこういう気分なんだろうなど、この時のマリユは、まだそう思つていたのである。

「何？ それは間違いないのか。……了解した。ご苦労、速やかに帰投しろ」

Z A F T軍クルーゼ隊 母艦ヴェサリウス。 諜報員から報告を受けたクルーゼは、副官に指示を飛ばす。

「アデス」

「はっ！」

「至急隊員達を集めろ。緊急の案件が発生した。すぐに作戦を立て、明朝実行する。良いな」

「は、はっ！了解しました！」

いつになく険しいクルーゼの面持ちに、ヴェサリウスの艦橋に緊張が走る。アデスはすぐさま艦内放送で艦橋集合の指示を出すと、間もなく全員が集った。それを確認し、クルーゼが口を開く。

「集まったようだな。……さて、退屈していたところだと思いが、先ほど諜報員より特ダネが舞い込んだ。まずはこれを見て欲しい」

クルーゼがスクリーンに映した写真には、大きな格納庫の中に横たわる5機のMSが映っていた。

「これはつい先ほど、ヘリオポリスにあるモルゲンレーテのファクトリーに潜入中の諜報員から送られてきた写真だ。諸君がご存じの通り、このコロニーはオーブの所有物だ。これらがオーブの新型MSとして建造されたならば理解出来る話であるが……問題はこれだ」

写真の一部を拡大すると、宿敵のマークが入ったコンテナと、同じくその軍服を着た士官が、はつきりと見て取れた。その場に居た全員が息を呑む。

「お分かり頂けたようだな。これは紛れもなく地球軍の物だ。どういった事情があるのかは知らないが、奴等は中立国を隠れ蓑に猟犬を育てていたという訳だ。仕上がり方から察するに、ロールアウト前後といったところだろう。——これを本部に持ち帰られる前に、奪取する。至急突入班を編成、作戦開始は明朝だ。コロニー内のマップは各自の端末及び機体へ転送しておく。部隊設立以来最大の獲物だ。各員、準備を怠るな」

「「「はっー」」」

作戦会議が終了し、アスラン達は装備の準備を進めていた。

「フン、ナチュラルの造ったMSなどともに動くとは思えん！その場で破壊しても良いだろうに、なぜ隊長は奪取などという面倒な事を……」

「まあでもさ、ナチュラル共が少ない脳味噌使って、必死こいて造った玩具をかつぱらうってのも面白いんじゃない？ 多分泣くぜアイツら。ママ、取られちゃったよ、って。あはは！」

「ったく、お前らはこんな時までその調子かよ。その辺にしとかなないと、そのナチュラル共に返り討ちにでもされた日には、墓標まで指さして笑われるぞ」

どうにも緊張感の無いイザークとディアアツカをラスティが諫める。そんな新入り達の様子を見て、ミゲルが寄って来た。

「その通りだぜお前ら。奴等は一匹一匹は雑魚でも数が馬鹿にならねえ。そりゃあもうゴキブリみたいにうじゃうじゃと湧いてきやがる。俺達もジンでサポートに付くから余程の事はないと思うが、基本的にはスピード勝負だ。油断せずにかかれよ」

「りよーかい」

「ちっ！」

「おいイザーク……」

「分かっている！ま、精々持ち帰るポンコツが動いてくれることを祈っておこうじゃないか」

そんなやり取りを遠巻きに見ていたアスランは、憂鬱そうにため息を付く。

「はあ……。Nジャマーのせいで核がダメなら、今度はMSか。戦火を広げる真似ばかりして……くそっ！」

「いずれにせよ、放ってはおけません。またいつ“あんな事”になるのか分かりませんから」

「……ああ、そうだな。ニコルの言う通りだ」

今は亡き母を思い浮かべながら、彼はその手に銃を取るのだった。

C・E・71 1月25日

ソラはマリユートの案内で新造艦“アークエンジェル”内部を見て回っていた。強力な武装や、これだけの規模の艦でありながら少人数での運用が可能なシステム、他にも整備された生活環境等が、ソラの心を躍らせた。

「私戦艦って初めてで、こんなに居住性に優れたものだとは思いませんでした。感動です！」

「作戦中は長期間港に戻れないこともあるから、クルーのコンディション維持には一層気を遣う必要があるのよ。もちろん、そうならないことが一番なのだけれど」

「つまり、ここが私達の第二の我が家になるんですね。宇宙を駆けるマイハウスでマリューさんと共同生活なんて、戦争でさえなければ楽しみ一杯夢一杯で素晴らしいです！」

珍しく目を輝かせてはしゃいでいるソラのその言葉に、マリューはハツとする。

（ちよつと待つて。ただでさえ女性クルーは少ない上に、彼女の地位を考えればより自然な形で相部屋に出来るのでは……。えっ、それって余裕がある日とかはもしかしてこの娘が『不安なので……一緒に寝ませんか？』なんて枕片手にお願いしに来たりする可能性も……はっ！いけないわ、私は上官、私は上官、私は上官。戦争をしに行くのよ。そんな姉妹気分で浮かれたりしている場合じゃ……）

「てことは、えへへ……き、気軽にマリューさんとお泊りが出来ますね。枕持ち寄ってぬくぬく快眠です、なんて……」

マリューが良からぬ妄想を膨らませているところへ、少し赤い顔ではにかみながら、とんでもない爆弾を落とすソラ。それは完全に無垢な笑顔という訳でもなく、何やら違う意味を含んでいるようにも思える言い回しに、ソラ自身が気付いて恥じらっているような表情だった。それが余計に、マリューの脳と心臓に揺さぶりを掛ける。

「でも、そういう訳にもいきませんよね……軍艦ですし……戦闘なんて事になったら、って、マリューさん？」

「コホン！ そ、そうね。そもそも作戦中は寝る時間もばらばらにな

るから、会う機会も減ると思うし、そんな余裕も無くなると思うわ。あと、今はラミアス大尉よ」

引き攣った笑顔を浮かべ、なんとか体裁を取り繕うマリユ。大尉の肩書にこれほど感謝した事が今までにあっただろうか。

「そ、そうでした！ 私ったらつい浮かれてしまい……すみません」「ふふっ、でもこの艦のドックに貴女の機体が並ぶのは、技術者としてはとても楽しみね。さ、じきに艦長達とパイロット候補生達が来るわ。私達は一旦MSハンガーに戻って、機体の積み込み準備をしましょう」

「了解」

「他の4機のOSは完成してる？」

「はい。後は機体にインストールすれば完了です。微調整は実際に乗って頂かないと分かりません」

「分かったわ」

この後の動きを話し合いながら、2人は艦を後にする。

その頃、民間船に扮した旧型艦“マルセイユIII世級輸送艦”は、Gシリーズパイロットの護送という重大任務を無事終えたところだった。そしてそれは、この艦自体と艦長の最後の航海でもあったようだ。やや感傷的な表情で、艦長は護衛の兵士に礼を言う。

「感謝するぞ、ムウ・ラ・フラガ大尉。お陰で私もこの艦も無事に最後の仕事を終えられた。ご苦労だったな」

「いえ、道中何事も無く、幸いでした。しかし、彼らが噂のGのパイロットですか。なんともまあ……」

「あれでも厳しい試験を潜り抜けてきたトップガン達だ。型遅れのMA乗りよりは遥かに戦えるだろうよ」

「……そりゃ、違くない」

地球軍の計画は順調だった。艦とMSが完成し、人員も揃った。描かれたシナリオ通りの、最高の運びが出来ていた。

ソラを除く4人のGパイロット達は、アークエンジェルが臨めるモルゲンレーテ保有の宇宙港管制室で、艦長ら上官達と顔を合わせる。これから敵にこの力を見せ付けてやるぞという熱気が、その空間には満ち溢れていた。

そして、艦長とパイロット候補生が固い握手を交わした瞬間――。

港全体が、激しい爆発の炎に包まれた。

それは管制室諸共彼らの肉体を一瞬にして焼き払い、港出口を完全に封じる。

突如港の方から聞こえてきた爆発音に加えて、ヘリオポリス全域に警報が響き渡る。モルゲンレーテは一瞬でパニックに陥っていた。その中には実習でここを訪れていた学生の姿もあり、皆訳も分からなのまま非常口に殺到する。瞬く間に避難シエルターが埋まっていき、開いているシエルターへと人の波が流れて行く。

しかし、その流れに逆らう人影がひとつ。その人物は眩いばかりの黄金の髪を揺らし、真っ直ぐにハンガーへと向かっていた。

「くそっ！ 確かめないと！ あの噂が本当なら、この騒動の中心に居るのは……っ！」

細い通路を抜けると、一気に視界が開ける。そこで金髪の少女が目にしたものは、大型トレーラーの荷台に横たわる、人型の機動兵器達だった。

「ああ、やつぱり……。地球軍の新型機動兵器っ！ くっ……。お父様の裏切り者おおお!!」

最初の爆発から間もなく、今度はコロニー内部の至る所から散発的に爆発音が聞こえるようになった。そして煙が上がっているのが主にこのモルゲンレーテの敷地であることから、ソラは最悪の事態を思い浮かべる。

「ラミアス大尉。この爆発、ロクでもない想像しか出来ない私を許してください」

「奇遇ね、ヤマト少尉。私も同じことを言おうとしたわ。……。最優先でX―105とX―303のある区画へ向かいます。貴女はX―105の起動を最優先に行動しなさい。303は私が」

「了解！」

2人がハンガーに辿り着いた時、上空に巨大な機影が現れた。見紛うこともない、資料に穴が開くほどソラが観察した機体、Z A F Tの主力量産MSジンだ。彼らはこの地に降り立つなり、工場に備えられた対空兵器を片端から潰していく。

「ジンを投入してくるってことは！ 狙いはやつぱり……。くっ！ あれは退路を確保する動きです！」

「港の方は陽動……。Gに乗り込んで奪取するための歩兵部隊が来るはずよ！っ……。少し遅かった！」

マリューは素早く拳銃を抜き、ストライクを載せたトレーラーの陰に潜むZAF T兵を仕留める。が、予想以上に敵の数が多く、より遠くにあるイージスのコクピットに辿り着くのは、いくらソラでも困難だ。また、先に移送している他の3機も同様に襲撃されているだろう。あと一步間に合わなかったと、唇を噛み締める思いでソラは判断を下す。

「2機とも守るのは無理です！ ラミアス大尉は私と一緒にストライクへ！ いち早く起動してイージスの奪取を阻止、最悪の場合……破壊します！」

「それしか無さそうね……了解！」

と、その時。場違いな悲鳴がハンガーに響いた。

「お父様の裏切り者おおお!!!」

「っ……一般人!? ……すみませんラミアス大尉、60秒なんとか粘って下さい。あのノロマをシエルターに叩き込んで来ます！」

「あ、ちよ、ヤマト少尉!?!」

マリューが止める暇もなく、ソラは機体を中間の踏み台に使って3階相当の高さがある通路まで一気に飛び上がると、金髪の少女を捕まえて一直線にシエルターを目指す。

「うわっ！ 何すんだよお前！ 離せっこの！ 離せよ！」

「望み通り、シエルターに突っ込んだら離してあげますよ！」

「うるさい！ 今すぐ離せ！ あんな物を残して行けるか!!」

「っ！ あなたの事情は知りません。……ですが、アレを破壊すると言うのであれば、今すぐこの場でその元気な喉を掻き切るしかありません。どうしますか？」

「ひっ……!?!」

戦場に馴染みのない、金髪の少女にでも分かった。自分と同年代……の筈の少女から放たれる、この濃密な殺気は本物だ。反抗した次の瞬間、自分の首は胴体と別れを告げる事になるだろう。綺麗な花には毒があるとは言いが、目の前の少女の美しさと毒の強さは、この世の物とは思えない程に強烈だった。

「わ、分かったよ……。シエルターに入れば良いんだろ。……けど、お前はどうすんだよ！」

「見ての通り私は地球軍の軍人で、アレのパイロットですから。心配は無用です。それでは、良い旅を」

「あ、おい！——!!」

「全くもう……。急がないと！」

シエルターに辿り着き、ソラは彼女をシエルターに押し込むと、その言葉には耳も貸さずに扉を閉じた。カプセルが下降していくのを確認すると、即座に頭を切り替えて元来た道を引き返す。

約束通り、ソラは60秒きっかりでマリユアの元に戻った。

「彼女は!？」

「無事シエルターへ！」

「何事も無くて良かったわ。ただ、こちらはイージスの周囲が完全に占拠された。ハマナ達もやられて……くっ！」

「そんな……」

共に機体を作り上げてきた仲間達の命が、コーデインイターの自分を仲間だと認めてくれた大切な者達の命が散っていく。なすすべなく、大切な物が零れ落ちて行く。これが戦場の現実だった。

「貴女のせいじゃないわ。とにかく今はストライクだけでも！」

「っ……い！はい！」

その時、横たわるストライクの胸部に、他のZAF T兵とは異なる赤いスーツを着た兵士が降り立つ。ソラは以前、そのスーツについて聞いた事があった。

ZAF T軍の兵士は基本的には緑色の軍服だが、士官学校を特に優秀な成績で出た兵士には、赤い服を纏う権利が与えられると。

この状況でそんな服を着て機体に近付くという事はつまり――。

「っ!! ZAF Tレッド!! 分かり易くて助かりますね！」

考えるより早く、ソラの身体が弾けるように加速した。

白銀の長髪を靡かせ、幾筋もの銃撃を寄せ付けることなく戦場を駆け抜ける。

赤服の兵士は急接近するソラに気付きサブマシンガンを向けるが、もう遅い。

ソラは相手の居る高さまでひと蹴りで飛び上がり、空中で太もものホルダーからサバイバルナイフを抜き放つ。

「ようやく掴んだ私の……私達の希望に……、気安く触るなああああああ!!」

「何っ!?!? コイツ、まさかコーディネ……!! ぐっ……あ……」

信じられない速度で一直線に飛んでくるその姿に、赤服の兵士「ラステイ・マツケンジー」は驚愕する。

だがソラは彼の言葉を待つことなく、トップスピードでその刃を彼の胸に突き刺した。

そのままソラは彼のサブマシンガンを奪い取り、マリユールが通る道を切り開く為に周囲の残存敵兵に向け掃射する。

「ラミアス大尉！ こちらへ！」

「ええ！……ほんつとに、なんて娘なのよ」

ソラの鬼神の如き戦い振りに小声でボヤきながら、マリューはストライクを目指す。だが、ソラがマリューを機体に引つ張り上げる瞬間、イージスの傍に居たもう一人の赤服が、地面に赤い花を咲かせて動かなくなっているラスティに気が付いた。

「っ!!!
!!! ラスティーー!!!
っ……くっそおおお!!!」

マリューは機体に登った瞬間、ソラの背後から狙う赤服の存在に気が付き、咄嗟に彼女に覆い被さる。

「っ!! 危ない! ……っうあ!!」

辛くもその凶弾はマリューの肩を掠めるに留まったが、マリューは焼けるような激痛に呻く。

「マリューさん!!」

ソラが背後を振り返ると、ナイフを片手にストライクの上に降り立ち、こちらに駆けて来るもう一人の赤服の姿があった。

そして互いの顔が鮮明に認識できる距離まで近付いたその時――、

世界が凍り付いた。

その宝石のようなエメラルドグリーンの瞳の持ち主は。

「……アス……ラン……?」

「何!?!……この声……その目……まさか、ソラなのか……!?!」

ずっと再会を望んでいた2人の幼馴染は、これ以上無く最悪の形で、その念願を果たすのだった――。

ラストイがやられた。

イージスを確保した上でストライクの方を見やると、機体の脇で見知った仲間が血溜まりに沈んでいた。

気持ちに蓋をして、自分は速やかにイージスを持ち帰るべきだった。

だが大切な仲間の仇くらはいは、この場で討ちたいと思ってしまうのだ。

故に、出会わなくて良い者とまで出会ってしまった。

見た目は大きく変わってしまったが、その声で自分の名を呼ぶその少女は、紛れもなくコペルニクスで別れた幼馴染の少女、ソラ・ヤマトだった。

あまりの衝撃にアスランの思考が止まる。目の前に居るのは間違いないくソラだ。だが栗色だったはずの髪の色は眩い新雪のような白銀に、元々色白気味だった肌は更に真っ白に。そしてその身に纏うのは、ユニウスセブンを核で破壊した悪魔、地球連合軍の軍服だった。状況を理解出来ずに混乱するアスランの意識を、銃声が現実に引き戻す。見れば肩を負傷した女性兵士がこちらに拳銃を向け、2発、3発と撃ってくる。

「くっ、チィッ!!」

アスランは辛くもそれらを凌ぐと、ストライクの確保を断念しイージスのコクピットへ飛び込む。

(そんな……、そんな事が!! 彼女が地球軍に居る筈が無いじゃない

か!!! 見間違いに決まっている!)

纏わりつく、自分を呼ぶ声の記憶を振り払うように、アスランはイージスのスラスタ―に火を入れると、全速力でその場を飛び去った。

一方、イザーク、ディアツカ、ニコルの3人は、移送中だったデュエル、バスター、ブリッツを奪取し、アスラン達よりも一足早く機体の起動チェックに移っていた。

「ほう、思っていたよりはまともに動きそうじゃないか」

「こつちも動けるぜ」

「ニコル、そつちはどうだ」

「少し待って下さい。……こつちもOKです」

「ではこの3機、先に持ち帰る。クルーゼ隊長にお渡しするまで、壊すなよ」

「了解」

詳細なチェックを一旦飛ばして移動に支障ない程度の動作を確認後、少女の魂が込められた3機はあっさりとコロニーの外へ消えて行った。

ヴェサリウスへの帰投中、ニコルはその特徴的な外見の機体「ブリッツ」のスペックや武装に目を通し、その完成度に舌を巻いていた。

(5機に共通して搭載されているフェイズシフト装甲だけでなく、ミラージュコロイド……? それにこの複雑かつ緻密なOS、本当にナチュラルがこんな物を扱えるんでしょうか? 確かに使いこなせる前提で考えるなら、それこそ手足のようにMSを動かす事が出来るでしょう。けれど恐らく、僕たちコーディネイターの中でもこれを余す

ことなく使いこなせる人はまず居ない筈……。正直、僕が扱うにはデチューンが必要になるでしょう。ただし、敵にこれを扱えるパイロットが居るとしたら、機体を奪っても安心は出来ませんね……)

その少年の懸念は、早くも現実のものとなる。

「ヤマト少尉！ 呆けていないで早くコクピットへ！」

「っ！ そうだ、まだ終わってませんでした！ ラミアス大尉は後ろへ！ しつかり掴まっついて下さい！」

(マリューさんを乗せている以上、無理は出来ませんっ……！ そしてイージスにはアスランが……)

しかし2人がコクピットに潜り込む間に、イージスは起動、素早く上昇するとMA巡行形態に変形し、瞬く間にコロニー内から姿を消してしまった。

「くっ……エールのブースター無しでは、イージスの速度には……。それに他の3機の反応も……申し訳、ありません……っラミアス大尉……うう」

「良いのよ。あの混乱の中で一般人も助けて、……貴女はよくやったわ」

「どうして、私ばかり奪われなきゃいけないんですか……。どうして、みんなが死ななきゃいけないんですか……。どうして……。どうして……！」

ソラは悔しかった。自分の希望がまたしても奪われた事が。そしてその一端を、最も仲の良かった幼馴染が担っていた事が。感情の波を抑えきれず、ソラは嗚咽を漏らす。

様々な苦難を乗り越えて実った努力の結晶が、ただ1機を残して全

て持ち去られてしまった。それだけでなく、苦楽を共にし、それらを作り上げた者達の尊い命まで、ものの数分で失われてしまったのだ。ナチュラルですらない、本来は敵であるはずの小生意気なコーディネイターの娘の言うことを聞いて付いて来てくれた、そんな彼らの命まで。

怒りと無念に震えるソラの頭を、マリユーが優しく撫でる。ソラのが気持ちが痛いほど分かるマリユーだからこそ、それ以上の言葉は掛けられなかった。

だが、そんな彼女達に追い打ちを掛けるようにアラートが鳴り響く。

「クソッ！ ラステイが失敗だど!? なら俺がやる！ ひよつこのナチュラルの操縦など知れているだろうが！」

対空兵器を粗方潰し終えたミゲルは、仲間が奪取し損ねたその機体を睨みつける。そして自分達のお株を奪おうとする下等生物に序列を分からせようと、戦闘態勢にも入っていないストライクに向けて、マシンガンを撃ち掛けた。

「生意気なんだよ！ ナチュラルがモビルスーツなど!!」

「ジンがこちらに……!!」

「っ。問題ありません。ジンの武器と装甲なら、この装備で十分に対応可能です」

ソラのスイッチが入る速度にマリユーが驚く暇もなく、ソラは即座にフェイズシフトをONにして弾丸を弾くと、大胆にスラストを噴かす。イーゲルシュテルンの雨をジンのメインカメラに目掛けて浴びせつつ急接近し、瞬く間にアーマーシュナイダーの射程圏内に捉え

る。

「何い!? 正面から弾くだど!? コイツ、……っ!!!」

「もう私の距離ですよ。……まず右腕、貫いすっ!!」

弾幕で塞がれた視界が開けると、まるでワープして来たかのようにストライクが目の前に出現し、ミゲルの背筋が凍る。次の瞬間、ストライクの突き出したコンバットナイフの切っ先がジンの右肩口に滑り込み、激しい火花を上げた。

「くっ! 準備運動なしのデビュー戦だろ!? どうなってやがる!」

後ろに引いても追い縋られると判断したミゲルは、負けじと残った左腕でサーベルを抜こうとするが、ソラはすかさずジンの左肩付け根にもう一本のナイフを突き刺す。

すると当たり所が悪かったのか、ジンは徐々に力を失い、やがてメインシステムがダウンした。

「クソツ動かねえっ! この俺がまるで歯が立たねえつてのよ……ええい!!」

「っ! 機体を放棄する……!?!」

「これは……、嫌な予感がします」

脱出するパイロットを見て不穏な気配を察知したソラは、遮蔽物を探すが、ストライクのメインカメラが捉えたのは、巨人同士の戦闘から必死に逃げ惑っていた民間人達の姿だった。そして何より、その者達は――。

「そんなっ、ミリイ達!? シェルターに入れなかったのですか!! いけません……!!」

ソラは機体そのものを盾とする為、ミリアリア達にストライクで覆

い被さる。その直後、ジンの自爆装置が作動し、激しい爆発を巻き起こした。

爆風が収まると、辺りにはようやく静寂が訪れる。ストライクは爆発を凌ぐ為にエネルギーを使い果たし、色を失ってその活動を停止した。

「無茶してすみません、ラミアス大尉。……っ！ お怪我の具合は!?
すぐに手当てを!!」

「大丈夫だから、落ち着きなさい。……それより民間人の子達は?
無事かしら?」

2人がモニタを覗き込むと、ミリアリア、ツール、サイ、カズイの4人全員の無事が確認出来た。彼らは怯えた目でこちらを見上げている。

「皆さん……、ふう。ひとまず、無事みたいですね」

「そうね、良かった……」

「えっ……、マリューさん? マリューさん!!」

緊張が切れて限界を迎えたマリューは意識を失う。ソラは思わず取り乱しかけるが、脈と患部を確認して手際良く応急手当を済ませると、彼女を背負ってコクピットを抜け出した。

「えっ……!? ソラ!」

「はあ!? おいおいどうなってんだ!」

今度はミリアリア達が驚く番だった。自分達を爆発から庇ったMSから顔を出したのは、ついこの間まで共に学校に通っていた同級生だったのだ。半年という短い期間とはいえ、校内一の有名人にもなっ

た友人の容姿を見間違える事など無いだろう。

「皆さん……。すみません、事情は追々説明します。とりあえずこの方が横になれる場所へ移動します。応急処置は済ませましたが、左肩を撃たれたシヨックで一時的に意識を失っています」

「撃たれっ……!?! と、とりあえずすぐその広場のベンチへ！」

「ツール達は綺麗な水とかが無いか探してきて！」

「分かった！」

「すみません……。恩に着ます」

ひとまず嵐は過ぎ去った。しかし、Z A F Tもこのままストライクを放置する事はないだろう。すぐにでも何か仕掛けて来るはずだ。最優先すべきはミリアリア達の避難、次点でアークエンジンとの合流。ソラは頭をフル回転させ、最善手を模索する。

ソラが生み出した5機のうち、既に4機が奪われた。残された手札は、このストライクただ1機だ。

「それでも、ストライクと装備は残りました。急ぎストライカーパツクさえ集めてしまえば、まだ……。まだなんとかなるはずです。今度こそ、守り抜いてみせます……。！」

同時刻、光を失ったモルゲンレーテの宇宙港に、地響きのような、しかし機械的な唸り声が響く。

悪魔の炎に焼き尽くされ、最早生者など存在するとは思えないその
暗闇の最深部で、

鋼鉄の天使が目を覚ます――。

11 | 束の間の…

ジンの自爆を凌いだ一行は、現場からすぐ近くの広場に身を移していた。気を失っているマリユをベンチに寝かせ、万全ではなかったストライクもエネルギー切れを起こし、その姿を灰色へと戻している。

(取り急ぎ、すぐに追撃が来ると仮定してストライカーパックを回収、迎撃の準備をしなければ。こうなった以上、アークエンジェルと合流する以外に道は無さそうですね)

Z A F T 襲撃時、モルゲンレーテ敷地内では多くの社員・学生が活動中で、周辺の避難シエルターはさまざま椅子取りゲームの様な状態になった。その結果、既にハザードマップはシエルターが満員である事を表す赤いマークで埋め尽くされており、ミリアリア達をシエルターに逃がすという選択肢は潰えてしまっていた。

ソラはすぐにでも次の行動を取るべく脳に鞭を打つが、迎撃準備――ましてや最重要機密に関わる作業を民間人に

手伝わせる訳にも行かない。また、ストライカーパックを積んだトレーラーをここまで持つてくるにしても、その間彼らがストライクに何かすれば、ソラは皆に対して軍人としてそれなりの対応を取る事になってしまう。

「ミリイ、皆さんも、少しよろしいですか？」

「ん、どうしたの？ソラ」

ミリイをはじめ、ストライクを興味深そうに見上げていた同級生一行は呼び掛けてきたソラの方を振り返る。

「私はこれからすぐにモルゲンレーテに戻って、“あの子”の装備を取って来なければなりません。その間、ミリイにはこちらのマリユさ…：ラミアス大尉に付いていて頂きたいのです…：お願いしてもいいですか？」

「い、いいけど…、付いてるだけでいいの?」

「はい。怪我は負っています。患部への応急処置は済んでいますので、じきに目を覚まされると思います。そうしたら私が装備を取りに行っている旨をお伝え頂けると助かります。大尉も女性ですので、出来ればミリイにお願いしたくて…」

「ええーつと…。聞きたい事は沢山あるけどひとまず置いて、ソラの頼みだもの。そのくらいなら任せて頂戴。けど戻って来たらちゃんと説明すること!」

「分かりました。えと、ありがとうございます。必ず皆さんには後でご説明いたしますので…」

いくら顔見知りとはいえ、尊敬する上官であると同時に大切な女性の身を男性に預けるのは、ソラの身に刻まれた数々の忌々しい経験が許さなかった。加えてミリアリアは女性というだけでなくソラと非常にの良い友人なので、ソラとしても安心して頼む事が出来た。

(ベンチに直に寝かせてしまうのは心苦しいですが、ミリイに膝枕までお願いするのは不自然ですよね。それになんかモヤモヤします…)

果たしてその感情が何なのかこの時のソラには分からなかったが、一旦思考を次の行動に切り替える。丁度そのタイミングで、トール達男性陣から声が掛かった。

「ソラ、俺達はどうすりゃいい?流石にバラけて動くのがマズいってのは分かるけど…。手が足りないなら手伝おうか?」

「そうですね、この辺りのシエルターが使えない以上、動き回っても危険が増えるだけでしょう。でも機密に触れさせる事も出来ないのですみませんがこの場で待機でお願いします」

「そうは言ってもなあ…」

「あ、ちなみに興味本位であの機体に触れる事はオススメしません。私とメカニック以外が触ると自爆装置が作動して、10秒後にはZA

F.Tの襲撃よりも悲惨な未来がお迎えに来ます」

「いいっ!？」

「では行つてきます」

そんな爆弾のすぐ近くで待たせるな、というトール達の突っ込みを待たずに、ソラは地を蹴りストライカーパックの保管庫へ向かう。

実のところ自爆については酷い誇張表現で、確かに自爆装置は搭載しているがそこまで敏感な代物ではない。もしそうであれば、他の四機は奪取される前にモルゲンレーテを巻き込み木っ端微塵になつているからだ。とはいえ彼等は何も知らない一学生。ソラのハツタリで恐れおののくのは無理も無いだろう。

しかしソラとしても決して意地悪で言った訳ではなく、彼等の身を軍から守る為に言った事だった。何せオーブ管轄下の中立コロニーで建造された連合の新型MSを目撃してしまったのだ。戦闘に巻き込まれてしまったただけなら言い訳も効くかも知れないが、一般人の身で自発的にそれに触れたとなれば話は全く変わってくる。

「下手な乗り物より速いね…もう見えないよ…」

「まあソラだからな」

「なんでお前が得意気なんだよ…」

「ちよつとあんた達、あんまり煩くしないでよ」

こんな状況でも緊張感の無い会話を続けるカズイ、トール、サイを見て、ミリアリアはため息をつくのだった。

視界に、一人の少女の姿が映った。

年齢の割にはスタイルが良い印象を受ける。

しかし、まず目を引くのはその髪。

まるで髪そのものが淡く光を放っているかのような神々しさを
持つ白銀の髪。

腰辺りまでの長さがあり、ぴたりと整ったストレートでもなく、し
かしふわふわとした癖毛でもない。

あくまで自然に緩やかに描くカーブが、その髪の艶を際立たせてい
るのがはつきりと分かる。

肌も髪に負けず劣らず白く、しかし不健康さを感じさせない淡い血
色が不思議な色気を演出する。

もつと近くで見たいという欲求に抗えず、歩を進める。

上下に開いた白銀の睫毛の中心に咲くのは、見ているだけで吸い込
まれそうな、深い深い紫の瞳。

スツと整った鼻先を下げれば、淡い桜色の唇が姿を現す。

優しく微笑みを浮かべるその唇は瑞々しく、その奥に芳醇な蜜があ
る事を想像させる。

ゆつくりと、唇が開いていく。

その奥にあるものが知りたくて――、

——ひとつになりたくて、私は——。

「ん……んは……」

普段感じる事のない、しかしどこか心地の良い胸の高鳴りと共に、マリユーの意識がぼんやりと戻って来る。

何か良い夢でも見たのだろうか、内容は思い出せないが、その余韻は胸を中心にじんわりと全身に広がって行く様だ。

「……つつう!?!」

銃弾が掠めた肩から伝わる痛み、マリユーの意識は一気に覚醒した。すると隣に座っていたソラ——ではない見慣れない少女と目が合った。

「あ、目が覚めたんですね！ 良かったあ〜」

「あなたは……確かあの場に居た……」

「はい。工科カレッジの生徒で、ミリアリアって言います。ミリアリア・ハウ。危ない所を助けて頂き、ありがとうございます。ほら、あなた達も自己紹介！」

近くに居た男勢三人も、ミリアリアに続き挨拶をする。

「トール・ケーニヒ」

「サイ・アーガイルです」

「えつと、カズイ・バスカーク…」

「地球連合軍 大西洋連邦 宇宙軍第八艦隊所属 マリユー・ラミアス大尉です。あなた達がヤマト少尉の同級生ね。彼女がよく話していたわ。礼であればその彼女に…って、そういえば何処かしら？」

「ソラだったら機体の装備を取りに行ってくると言って、さつき走って行きました。あのスピードで走って行ったらそんなに時間は掛からないんじゃないかと思えますけど…」

ソラの行方を気にするマリユーに、ミリアリアが苦笑いを浮かべながら答える。

「そう…。ともあれ、あなた達には世話を掛けたわ。ありがとう」

「いえ、私達は何も…それに一体何が起きてるのかさっぱりで…」

「あの、さつき地球連合軍所属って言いましたよね。オーブのコロニーであるヘリオポリスで、一体何が起きてるって言うんです？」

「それは…」

サイの切り込んだ質問にマリユーが答えようとした時、近くの交差点から一両の大型トレーラーが姿を現した。トレーラーはこちらに向かってきてマリユー達の居る広場の横に停車し、やがてゴロゴロというエンジン音も止まる。間近で見ると驚くほど大きく見える車体の運転席から顔を出したのは、他でもないソラだった。

「あーマリユーさん！目が覚めたんですね！」

こちらを見ているマリユーの姿を見つけるや、ビル2階の様な高さの運転席からひと蹴りで飛び降り、そのままダッシュでマリユーの胸

にダイブする。とは言っても、ちゃんと飛び込む勢いは加減しているが。

「つとと。こらヤマト少尉、少し落ち着きなさいな」

「…心配、しました」

先ほどまでは皆の前で気丈に振舞っていたソラだったが、実際に無事なマリユートの姿を確認して緊張の糸が緩んだのだ。一方で、マリユートを抱きしめる腕は緩みそうにない。今のソラは軍人ではなく、ソラ・ヤマトという年頃の少女そのものだった。

「…ごめんなさい。ほら、肩だって貴女が処置してくれたお陰でもう大丈夫よ。だから顔を上げなさい。私もあなたの綺麗な顔が見たいわ、ソラ」

ソラがマリユートの胸に埋めていた顔をおずおずと上げると、慈愛に満ちた微笑みを浮かべたマリユートが視界一杯に広がった。時間にして一瞬。しかし永遠にも感じられる間、二人は見つめ合う。マリユートはたまらず、ソラの額に一度だけ、触れる程度のキスをした。

トレーラーの登場からここまで。あまりの光景に、ミリアリア達はポカンと口を開けて見ている事しか出来ない。

「なあ、俺達これ見てていいのか?」

「いや、見せられてる側でしょ僕達は…」

「なんか…こつちまで胸が熱くなる様な…この感情は一体…」

「素敵…」

居心地が悪そうなツールとカズイ、何かに目覚めるサイ、純粋な愛を前にして乙女全開なミリアリア。

最終的にツールが気を利かせて咳払いをする事でソラはようやく
我に返り、耳まで真っ赤に染めながらマリユから離れるのだった。

—サイとカズイ—

「ツール…余計な事を…」

「サイ…？」

「いや、なんでもない」

「…」

12 技術提携

「え、じゃあソラは学校に居た頃にはもう軍人だったってこと？」

持ってきた装備をストライクに装着し迎撃の準備を整えたソラは、ミリアリア達に事情を説明する。本来は上官であるマリユールが行うべきだが、自身の口から説明した方が皆聞きやすいだろうというソラの提案の元、そのようになった。普段のふわふわとしたソラとは異なる引き締まった様子が、彼女が軍人であることを物語っている。

「はい。絶対に立場を明かさないとという条件の元、上官に通学を許可して頂きました。ミリィや皆さんに隠す形となってしまう事、お詫び致します」

「はあ…。いや、それは謝らなくても良いけどさ、そもそもここって中立のコロニーよね？ どうして地球軍が…」

「なんとなく想像は付くけどな。攻撃してきたのはザフト。対象はモルゲンレーテ。そして今俺たちの目の前には地球軍の軍人と、アレが居る」

サイの視線の先には、鈍く光る鋼鉄の巨人。ザフトが中立コロニーに対して攻撃を仕掛けた理由が、そこに佇んでいた。彼は視線をソラに移し、思考を整理する様に問いかける。

「けど、ここまで目の前の事が信じられないのは初めてだよ。本当に君はあのソラなのか？」

対するソラはやや鬨りを帯びた声色で、しかしはつきりと、その事実を口にした。

「……………はい。私は地球連合軍 大西洋連邦 宇宙軍第8艦隊所属、機動兵器“G”開発プロジェクト主任兼MSパイロット、ソラ・ヤマト少尉です」

一同が息を呑み、顔を見合わせる。自分達の同級生が軍の階級持ちで、技術士とパイロットを兼任している本物のエリートであるなど、誰が想像出来るだろうか。自分達が学校で学んでいる事などまるでままごとだ。しかし、これにより明らかになった事が一つあった。

「それって要はさ、ヘリオポリスが中立なのを良い事にあんな物を

造ってたって事？ そしたらそれがZ A F Tにバレて、攻撃対象になった。流石に笑えなくない？」

「ってカズイは言ってるけど、どうなんだソラ？ そこんとこ」

カズイとツールから質問が飛び、再びソラに注目が集まるが、彼女は淀み無く回答する。

「あの子」を見られた以上、隠すだけ時間の無駄ですね。その通りです。どこかから情報が洩れ、ザフトによる強奪作戦が遂行されたのが今回の戦闘の全容です。なんとか起動できた”あの子”以外の4機は全て持ち去られ、私の指示に従ってそれらを一緒に造り上げてくれた方々は襲撃で皆殺しにされました」

口調こそ淡々としており冷静に聞こえるが、普段のソラからかけ離れたその振る舞いは、逆に隠し切れない悔しさと怒りを感じさせた。だが、それでも。

「なんだよそれ…。ここはオーブだぞ！ここに居る人達はそういうのが嫌で…戦争とかが嫌でここに住んでるんだぞ！それを隠れ蓑にして、間抜けにもバレて襲われたら被害者みたいな言い方して…、身勝手にも程があるだろ！」

サイの不安と怒りが爆発し、そしてそれはカズイにも伝播する。

「そうだよ…そもそもそんな物を造ってなきや、こんな事にはなっていないじゃないか！」

「ちよつと二人とも…」

「お、おいおい…」

ミリアリアとツールも二人を止める素振りは見せつつも、気持ちは同じだろう。そんな事はソラにも分かっている。その上で、彼女はサイとカズイの物言いに怒りもせず、改めて問いかける。

「その怒りは十分に理解できますが、ではお聞きします。皆さんが普段通っている工科カレッジがあるのはどこですか？」

「どこって…モルゲンレーテだろ」

「そうです。そして、”あの子達”を建造していた場所もそのモルゲンレーテです、と言えば、私の伝えたい事は分かって頂けますか？」
「いや、ちよつと待ってくれよ。モルゲンレーテはオーブの企業だろ

？地球軍が居る事と何の関係があるんだよ」

「…オーブの企業と地球軍が癒着してたって事？」

「ええ!？」

モルゲンレーテと地球軍、2つのピースがなかなか結び付かない
トールの隣で、ミリアリアは恐る恐る予想を口に出す。癒着という不
穏なワードに、カズイが飛び上がる。

「少し違いますね。正確には技術提携です。連合が設計思想、資金、人
材を提供し、モルゲンレーテの技術力を持って形にする。こうする事
でオーブはMS生産ノウハウを獲得し、自国の防衛力に繋げることが
出来、連合側としてはZAF Tに対抗しうる切り札を生み出す事が出
来る。これはオーブとしても連合としてもメリットを見込んで互い
に了承しているプロジェクトです。…国境を越えたら関係なし、で切
り分けられるほど、今の世界はシンプルな作りじゃないですよ」

そして貴方達もそんな世界で生きている以上、無関係などというこ
とはないんですよ、と。ソラは口には出さなかったが、その場の誰も
が理解していた。当然、納得出来るかどうかは全く別の話だが。

「そして、“あの子”がここに残っている以上、ザフトの攻撃はまだ終
わりません。手に入らないとなれば、潰せる内に潰そうと必ず仕掛け
て来ます。先ほどまでの作業がその迎撃準備です。…ラミアス大尉、
アークエンジェルとのコンタクトは取れそうですか？」

「駄目ね。個別チャンネルで呼びかけはしてるけど、今のところは応
答が無いわね。……ヤマト少尉」

「はっ」

「恐らく敵の追撃まで時間はあまり無いと思われれます。私は学生達を
連れて避難しつつ、港へ向かいます。貴官はX-105で港と反対の
方角へ移動し待機。追撃を確認次第敵を引きつけ、その“全機能”を
持ってこれを迎撃してください」

「…はっ」

ZAF Tの狙いは言うまでもなくストライクただ一機だ。学生達
の安全を確保するには、ストライクから離れ、アークエンジェルと合
流する事が最善だった。が、それが意味するところはつまり。

「ちよつと待ってくれよ！それって…」

「カズイさんのお察しの通り、ここは間もなく…再び戦場になります」
「っ!!」

ソラの発した“戦場”という生々しい一言に、他全員の表情が強張る。戦争がテレビの向こう側の出来事ではない平和な人生を過ごしてきた彼等にとって、この現実はあまりにも一方的かつ理不尽で、到底受け入れられないものだった。

「ですので、我々の母艦とコンタクトが取れ次第、一旦皆さんにはそちらに避難して頂く他無いと思います。不自由をお掛けしますが、ご理解下さい」

「理解ってそんな…勝手な…」

愕然とする彼等の気持ちの整理を待つ時間など無いと言わんばかりにソラが踵を返した、その時。

——ドンツツツツツ!!!

大きな音と言うより、空気の塊に殴られたような衝撃がソラ達を襲った。

「きやあああああ!!!」

「うわあああああ!!!」

少年少女が悲鳴を上げる中、ソラだけはその発生源を睨みつける。その瞳に映るのは、大きな爆発により分断されるコロニーのシャフトと、そこから飛び出してきた二つの巨影——MSとMAだ。

「メビウス・ゼロっ!?何故ここにエンデュミオンの鷹が…。それとジンではない——シグー、となれば隊長機！長話が過ぎましたね…！」

敵機を視認した瞬間には、ソラはストライクのコクピットを目指して地を蹴る。流石にひと蹴りとは行かずに膝装甲をもうひと蹴り。開いた下側のハッチに手を掛けると、そのままぐるりと宙返りをしてコックピットに飛び込んだ。

ソラも話では聞いたことがある。去年グリマルデイ戦線にて、エン

デュミオン・クレーターでの戦いに参加したメビウス・ゼロ部隊、唯一の生き残りが居ると。通称“エンデュミオンの鷹”を知らない者は連合軍内には居ない。加えてソラはG計画に携わる際に嫌と言うほど当機的设计図を見ている為、たとえ遠目であってもすぐに判別可能だった。低コストでガンバレル・ユニットを運用する為だけの棺桶だ、と吐き捨てたのはソラのみぞ知る話だが。

しかしながら、どうやら件の鷹とやらは頼み綱のガンバレルを全て失い、シグー一機に苦戦を強いられている様だ——とソラが分析している側から、今度は残された唯一の武装であるリニアライフルをシグーの重斬刀に叩き斬られ、遂に丸腰となってしまう。

“エンデュミオンの鷹”もここまでかと思われたその時。

シグーの単眼がギョロリと動き、跪いて眠る“灰色”の巨人を映し出す——。

13 | 大天使の産声

Z A F T軍クルーゼ隊長、ラウ・ル・クルーゼはシグーを駆り、先を急いでいた。潜入させた部隊の報告に寄れば、襲撃の段階でラストイーが倒れ、それによって奪い損ねた新型にミゲルが後れを取ったという事らしい。

コーデインイターの中でも生粋のエリート部隊により奪われた地球軍の最新兵器達は瞬く間にその秘密を暴かれ、その機体スペックから武装、稼働時間に至るまでの様々なデータが次々に部隊内に展開される。

ラウ本人が搭乗しているシグーも例外ではなく、先ほどから絶え間なくそれらの情報がディスプレイの端に流れている。

「ラストイーを失ったとはいえ、”赤”に限らず流石に優秀だな。さて……」

アスラン達が持ち帰った機体を少し解析した結果から、これら新型MSは単機で驚くべきスペックを誇る反面、稼働時間はそれほど長くない事が分かっている。加えて、持ち帰った機体の補給が完了していない事から、取りこぼしてきた残りの一機も同じ状況であることが予想出来た。

また、コロニー外の戦闘での友軍の損害が”エンデュミオンの鷹”によるものという事もあり、いよいよラウ本人が出撃するに至った。「フン。相も変わらず、いつでも邪魔をしに現れるな貴様は」

目の前を飛び回る朱色のMA”メビウス・ゼロ”と交錯しながら、ラウはそのままメビウス・ゼロを引き連れコロニーシャフトへ侵入する。

相対するムウ・ラ・フラガの腕は確かなものだ。MSと違い小回りの利かないMAで、有線式の独立機動兵装をこの狭いシャフト内で振り回し、クルーゼの駆るシグーと渡り合っている。

しかし、それでも分が悪い。

ひとつ、またひとつと、実質火薬庫のようなガンバレルを破壊される度に爆風で揺さぶられ、流石のムウも前後不覚になりかける。卓越

した空間認識能力が無ければ、自らシャフト内壁に激突して宇宙の藻屑になっっているだろう。だが、その粘りも限界だ。

「さて、そろそろご退場願おうか…ん？」

いよいよ動きの鈍ったMAを蜂の巣にしようかという時、敵はおもむろに最後のガンバレルをシャフト内壁に向けて射出。衝突でそれは大爆発を起こし、シャフトに穴を開けた。

突如発生した気流に逆らい、空いた穴を潜ると視界が開ける。コロニー内部に入ったのだ。

「周囲が開けたと言って、その様ではな。……無駄な足掻きを」

メビウス・ゼロに残されたりニアライフルの銃口がこちらに向くより先に、シグーのサーベルがその銃身を切り落とした。相手は姿勢を立て直せず、錐揉みしながら吹き飛んで行く。マシンガンの掃射でとどめを刺そうかという、その時だった。

「…っ!? あれは……」

シグーのメインカメラの端に、何かが映った。それは紛れもなく報告に挙がっていた例の機体。奪取し損ねていた最後の一機だ。

機体色は——“灰色”。作業が間に合っていないのか、片腕に中途半端に掛けられたカバーでは全身を隠し切れていない。

「…ほう。これは道案内に感謝しなければな。今の内に叩かせて貰う!!」

スラスターを吹かして一気に距離を詰め、ロックオン。標的が装甲を展開出来ない上に動けない今、ただのカモ撃ちで終わる……筈だった。

ラウがトリガーを引くのとほぼ同時、まるでタイミングを計ったように敵の機体色が変わる。銃口から放たれた無数の弾丸は、そのトリコロールに変わった機体を貫く事は無く、小石の様に弾かれた。

「っ!? パワーダウンしているのではないのか…?! いや……」

よく見れば、先の映像には無かった装備が目につく。背中に装着されたブースターの様なバックパックは、ジンやシグーのそれよりも大型だ。

「あれが増槽にもなっているという事か。……なら、これはどうだ！」

ラウは弾丸を変更、強化APSV弾に変更し斉射するも、標的は火花を上げるだけで傷一つ付かない。

「チツ、厄介な物を…。っ!？」

この時、彼は一つミスを犯していた。ここまで堂々と接近したのは、相手にまともな射撃武器が無いと思っていた為だ。

だが、“有ったら”どうなる？

中途半端に被せられたカバーの下にある右腕には、何が握られている？

ラウがその思考に至った瞬間、右腕がカバーごと持ち上がり、姿を見せたライフルの銃口とラウの目が合う。

——誘われた。

ラウの背筋が凍り付く。第六感に従うまま機体を振ると同時に、敵機のライフルの銃口からビームが迸る。コクピット直撃は免れたものの、その熱線はシグーの左腕を肩口から吹き飛ばした。

「ええいつっ!!」

ライフルによる追撃は来ない。それも当然、ここはコロニー内だ。必中の一撃を除き、守る側としてはおいそれと飛び道具が使える筈も無い。

と、なれば。

ラウの一瞬の思考すら許すまいと、大型ブースターを吹かしたストライクが弾丸の如きスピードでシグーに肉薄する。そして振り下ろされるのは、背中から突如出現したビームサーベル。それはシグーの右肩に触れると、まるで温まったバターを切るように右腕ごと削ぎ落した。

初見殺しの2段構え。機体の両腕を失ったとはいえ、これを切り抜けたのは紛れもなくラウの天才的な技量によるものだった。

「チツ、舐めた真似をっ!!!」

たまらずスラスト全開で緊急離脱するラウ。認めたくはないが、完全にこちらが後れを取っている以上は退くしかないと判断を下す。

相手も背後に民間人を庇っている様で、過度の追撃はしてこない。撤退しつつ文句の一つでも吐こうかと思つた矢先、今度は被弾とは異なる衝撃を感じた。

「全く…、今度は何だと言うのだ」

ややうんざりとした様子で音のした方を見やれば、少し離れた…：軍港の方角から爆炎が上がっている。

「陽動での爆破で発生した火災が今頃誘爆でも起こしたか…？しかし…！？」

ラウが思考を巡らせるより早く、その答えは姿を現した。煙の尾を引き、“空”へ向けて飛翔するその巨大な構造物は紛れもなく――。「戦艦…だと…！？」

事実、ヘリオポリスのドックはG奪取の為の陽動として爆破攻撃を受けていた。これにより艦長やGパイロット候補生達が犠牲になる等の被害が出ていたものの、辛うじて難を逃れたナタル・バジール、アーノルド・ノイマンをはじめとするクルー達がアークエンジェルに辿り着き起動させるに至つたのだ。

爆破により電源がダウンし暗闇に閉ざされた空間を、莫大なエネルギーの奔流が貫く。白鳥の騎士の名を冠された特装砲は眼前の遮蔽物を全て吹き飛ばし、一瞬にして大天使の進む道を切り開いて見せた。

「離床、全速前進！」

強襲機動特装艦“アークエンジェル”。後に伝説の不沈艦として名を馳せる大天使が、戦場に産声を轟かせる。

ラウのシグマを撃退したソラは、程無くしてマリユ、ミリアリア達と共にアークエンジェルとの合流を果たしていた。ソラは大きく口を開けた艦首のハッチに着陸、ストライクの掌に乗せた皆を降ろ

す。周囲には既にアークエンジェルのクルー達が集まっていた。

「ラミアス大尉！」

「！…バジルール少尉！」

「ご無事で…何よりでありました」

「貴女こそ、よくアークエンジェルと皆を…。お陰で助かったわ」

「いえ…」

マリュー達がお互いの再会を喜んでいると、間もなくストライクの
コクピットが開く音が聞こえ、自然とクルー達の注目が集まる。

「…っ！」

中から出てきた者の姿に、皆が息を呑んだ。人形のように現実離れした美しい少女が、白銀の髪を靡かせながらラダーで降りて来たからだ。おおよそ軍人とは思えない容姿をしたその少女は、しかし確かに地球軍の軍服を着ている。

ソラはMS開発主任を担当していたとはいえ、これまでアークエンジェルのクルーと顔を合わせる機会が無く、名前だけは知られていてもプロフィールの詳細までは知れ渡っていなかったのだ。故にナタルをはじめとするクルー達の受けた衝撃は大きく、全員空いた口が塞がらない。

「紹介します。彼女はソラ・ヤマト少尉。G計画におけるXナンバーの開発主任兼、X105のパイロットです」

ザワツツツ!!!

「きやつ…：…うう、やっぱりこういう反応されるんですね…」

「ふふ、こればかりはね。…幸い襲撃のタイミングでハンガーの近くに居た為、現場に駆け付けてこれだけは守る事が出来ました。しかし他の機体は奪われ、現場に居た技術者達は…」

マリューがそこまで口にする、ソラの表情が曇る。マリューやハルバートンの恩に報いようと造り上げた5機のMSが、完成した側から4機も掠め取られたのだ。コーディネイターである自分を受け入れ、共に完成に向けて努力してきた仲間達ほとんどの死というおまけ付きで。

しかし、被害は技術士のみには留まらない。ナタルはMSハンガーで

起きていた惨劇を察すると、今度は自分達の居た軍港での状況を説明する。

「こちらは現在作業中の艦のメカニックを除き、今この場に居る者達で全員です。艦長やパイロット候補生達、その他クルーは皆最初の爆発に巻き込まれて戦死されました」

「そう……」

重い空気が流れ始めたところで、別の声が聞こえて来る。

「へえ、こいつは驚いた。こんなにかわいいお嬢ちゃんが虎の子の生みの親で、しかもパイロットとはね。……ムウ・ラ・フラガ大尉だ。お嬢ちゃん、さつきは助かったぜ。しかし彼奴を秒速で撃退とはね。コロニーに被害も出さずに、だ。正直恐れ入ったよ」

「い、いえ……。その……追撃が来ることはある程度予想出来ていましたので、不意打ちは難しくありませんでした」

「予想出来て……？ どういう事だ？」

「えっと、ザフトに他の機体を奪取された以上、データは瞬く間に軍内に拡散されます。となると、PS装甲の存在の次に明らかになるのが機体の稼働時間と補給に掛かる時間です。持ち帰った機体を補給する必要があるからです。ジンの自爆から身を守る際に消費するエネルギーをあらかじめ演算出来ているなら、その後の補給のタイミングを狙われるのは必然です。実弾で撃破可能ですので……。それを逆手に取って、ストライカーパックを装備して待機、相手を誘き寄せてから叩いただけです……」

言っている事は確かにシンプルだが、この追い込まれた状況でそれが出来る判断力、適切な装備を選択し使いこなす戦闘力など、とても10代半ばの少女が身に付けられるものではない。ましてや、その機体すらも自らが設計・開発・生産までボールを握っているなど、常人には不可能だ。

しかし、それを実現する可能性を持つ人類が存在する事を、この場に居る誰もが——いや、この場に居る者達ほど身を持って知っていた。

「……君、コーデインイターだろ。それも、とびきり優秀な」

「……っ」

ムウとて悪気があつた訳ではない。同時に、ソラとしても隠していた訳ではない。だが、初対面の成人男性から面と向かってぶつけられる”とびきり優秀なコーディネイター”という言葉は、彼女の脳を激しく揺さぶった。

「……………あつ……………い……………や……………」

——ブロックワード。トラウマや記憶がフラッシュバックを起こし、錯乱状態に陥る現象、そのきつかけになる言葉を意味する。ソラの居たロドニアのラボでも、何かの拍子にブロックワードを聞いてしまい錯乱状態に陥るブーステッドマンの被検体は珍しくなく、症状が治まらない場合はそのまま殺処分されてしまう個体も存在した。

ソラにおいては、スーパーコーディネイター、あるいはそれに近い表現がブロックワードとなり得るが、耳にした程度で錯乱するほど脆い精神構造をしているソラでは無かった。しかし今回のケースでは、精神的に無防備なタイミングかつ、自分より遥かにガタイの大きい成人男性から直接その言葉をぶつけられた事で、克服出来ていたと思っていたトラウマのスイッチが入ってしまったのだ。

薄暗い地下室。

ビクともしない強固な拘束具。

周りを取り囲み、下卑た笑みを浮かべる男達。

自分を弄ぶ為に用意された、様々な道具や薬物。

意に反して悦ぶ自分の身体。

寝ても覚めても——否、意識があるのか無いのかも分からず、ただ与えられた刺激に対して鳴くだけの時間。

悪夢のような記憶がMSの設計計算すらこなす頭脳を一瞬でショートさせる共に、ソラは自分の身体に妖しい熱が宿って行くのを感じる。いくら心を取り繕っても、“そういう身体”にされてしまった事実は変わっていないかった。

自分はまだあの地下室に囚われているのだとソラが絶望しかけた時、一つの影が割って入った。

地球軍という場においてソラをスーパーコーディネイターとして

ではなく部下として、または家族として扱い、真つすぐに愛情を注ぎ続けた存在。暗く閉ざされたソラの未来に、再び希望の光をもたらした女神の如き存在は、ソラの視界に映るだけで彼女のトラウマを跳ね除ける。その者の名は――。

「ラミアス大尉……」

「彼女の上官である私の前で、随分と無遠慮に根掘り葉掘り聞くのね。『エンデュミオンの鷹』に、礼儀や配慮の文字は無し。覚えておくわ」

“言つて良い事と悪い事の分別を弁えろ”と、穏やかに、しかし確実に、マリューは目でムウを分からせる。

「え？ああいや、そんなつもりは……」

無い――と言いかけたところで、ムウはハツとする。割つて入ったマリューの肩越しに、怯えて動けなくなっている少女と目が合ったからだ。

（あー……俺とした事が……。無遠慮もそうだが、これはマズったな）

マリューだけではない。周りを見たらどう考えても自分が悪者にしが見えない。特に、凄惨な形相でこちらを睨んでいる一般人の女の子なんかには完全に嫌われてしまった気がする。

「いや、確かに今のは俺が悪かった。すまない」

「全く……」

（しかしこの大尉さんおつかね……。同じ階級だけどあんな目できねーよ……）

「何か？」

「いえ！何も！」

「ま、まあまあその辺で……。私は大丈夫ですから」

少し落ち着いたソラが困った様な笑顔を浮かべながら二人を仲裁すると、空気を変えようとナタルが口を挟む。

「ところで彼等は？一般人の子供達の様ですが……」

ミリアリア達について、マリューがこれまでの経緯を説明したことで一通りの情報整理が完了した。となれば、次に考えるべきは今後どう動くか、となる。

「とりあえず艦長は……ラミアス大尉でいいか？俺も大尉だけど、この艦の事はさっぱりでね」

「私も異論ありません」

「！わ、私も異論ありません！」

「……分かりました」

ムウの提案にナタルが賛同し、慌てて反論しようとしたマリユードだったが、艦長姿の彼女を想像して目を輝かせているソラの姿を見てしまつては、黙って受け止める事しか出来なかった。

（大勢の命を預かるって言うのに、こんな事で良いのかしら……）

「そうと決まれば早速迎撃の準備でもしようぜ。相手はあのクルーゼ隊だ。どうせすぐにはまた追手が来る。しつこいぞくアイツは」

「……では各自持ち場へ行くように。学生達は居住区へ」

皆がそれぞれの持ち場に散って行く中、ソラがマリユーに歩み寄り、小声で話しかける。

「あの……、マリユーさん」

「あら？ どうしたの？」

「その……、さつきはありがとうございました。ひとりだったら多分……あのままパニックを起こして皆さんにご迷惑を掛けてましたから……」

「何言ってるのよ。あれはあのロクでもないMA乗りが悪いんだから、ソラちゃんはいいつに文句の一つでも言ってやれば良いの。……それに、私が貴女を独りにする筈無いでしょう？だから、しつかりなさい」

ね？と、あやす様に声を掛けてから、マリユーは至って自然にソラの額に軽くキスをする。それはこれまで何度となく交わしてきた、親子愛のようなつもりのキスだ。少なくとも、マリユーの感覚では。

一方で、ソラの方はそれどころではない。

「わ……あ……そ、そうでした。私ってばまた悪い癖が……。えへへ……」

しかし今にして思えば、これが本当の彼女達の物語の始まりだったのかも知れない。

(びつつつつつつくりしました!!!)

必死に取り繕った笑顔はどこかぎこちなく、だがこの胸の高鳴りは決して気持ちの悪いものではない。キュツと胸が締め付けられているようで、どこか心地良くもある。そしてソラはその感情を一度経験したことがあった。

(ま、まさかそんな……、でも……ずっと一緒に居られたら……)

何かの間違いか、それとも必然か——。その想いは、先程ソラが起こしたフラツシユバツクによる身体の火照りの名残と繋がり、一気にそれを燃え上がらせた。

(え、嘘!? こんなの嘘です!! あんなに嫌だった筈なのに……で、でも、もしあの男の人達がマリユーさんだったら……優しいマリユーさんだったら私は……って!? だ、だめですっ! それだけは絶対に! 私つてば最低です失礼です恩知らずです!)

幸い声には出ていなかったが、百面相をしながらどんどん赤くなるソラの顔を見たマリユーが流石に心配をして声を掛ける。

「ソ、ソラちゃん?」

「ひゃいっ!? あ……」

「大丈夫? ……流石に無理をさせ過ぎたかしら」

「い、いえ! そんなことないです! えっと……わ、わたし、着替えてストライクで待機してますー!!!」

我に返ったソラは、これ以上は墓穴を掘るばかりと悟り、逃げる様にその場を後にした。

「一応元気? ……になったソラちゃんも見られたし、私も艦長頑張りますか! ザフトに一発やり返すわよ!」

ソラを見送ったマリユーは、切り替えて自身に活を入れる。それに応える様にして、大天使の目覚めの咆哮がヘリオポリスに轟いた――。

14 | Launch

アークエンジェル艦内は騒然としていた。

艦そのものは無事とはいえ、万全とは程遠い状態での出撃を余儀無くされた事により、機体の整備、武器弾薬や水等の主要物資の搬入、人員の再配置等、やる事は山積みだ。加えて、ザフト軍がいつ追撃に來てもおかしくないという状況が皆の心の余裕を削り取る。

人々がせわしなく通路を歩き來する様子を、ミリアリア達は居住区の一角から眺めていた。

「ねえツール、ヘリオポリス、大丈夫かな……」

「ザフトの隊長機がソラに返り討ちにされたの見ただろ？へーきだつて」

「うん、そうだね……」

「本当にそうかな……」

「え？」

「ザフトってのはみーんなソラみたいに強いんだろ？隊長じゃなくても、例えばジンが沢山來たらいくらソラでも無理なんじゃない？」

「カズイ、その辺にしとけよ。仮にそうだったとして、一番の危険に身を晒しているのはソラなんだぞ」

後ろ向きな言葉を吐き続けるカズイをサイが窺める。皆家族の安否も分ならず、胸の内に不安を抱えているのは同じなのだ。幸いだったのは、彼らが離れ離れになっていなかった事だろう。

「そうよ。少なくとも私達は独りぼっちで取り残された訳じゃないんだから、良かった方じゃない。それに……」

「それに？」

「それに……友達が頑張ってるんだもの。一番危ない所で、文字通り命懸けで。守られてるだけの私達がとやかく言えないよ」

「……」

「……確かになあ。地球軍がここに居たのだって、ソラが悪い訳じゃないもんな。それにあれがソラじゃなくて他の地球軍の軍人だったら、多分俺達は今頃戦いに巻き込まれて死んでるぜ？」

トールのその言葉に、あの場にソラが居なかった場合の“もしも”を想像し、皆顔を青くして黙り込む。違う世界の出来事だと、フィクションだと思っていた“戦争”という存在が、何の前触れもなく彼等の目の前に姿を現したのだ。

新型兵器を奪うという目的の為だけに人と人が殺し合う現実には、彼等の常識は一瞬で覆された。

「正直、ソラのあの戦いを見ても実感が湧かなかった。いや、今もそうかも。あんなに簡単に、当たり前前の様に銃を向け合って、撃ち合って……。実はゲームでしたって言われた方がまだ信じられるよ。けど、そうじゃないんだ。あれが今この世界で起きてる戦争なんだよな……。ああもう、クソッ！」

認めたくない、ふざけるな、他でやれ、という言葉を噛み殺し唸るサイの様子を見て、カズイの口も大きな溜息を最後にようやく閉じられる。“理解した”というよりは、“考える事を止めた”といったところだろう。

その頃、ソラは脳裏に纏わり付く煩惱を振り払う様に仕事モードへと頭を切り替え、テキパキと出撃準備を進めていた。

「マードックさん！」

ストライクのコクピットハッチから顔を出したソラが、機体の整備と補給を指揮しているコジロー・マードックに呼びかける。

「どうしたー……。ああ!？」

呼ばれたマードックが振り返ると、ソラがハッチから飛び降りるまさにその瞬間だった。

「つと……。思いの外行けるもんですね」

綺麗にコロリと受け身を取り、何事も無かった様に立ち上がるソラ。見ている側は気が気ではない。

「おいおいおい少尉、お転婆も程々にしてくれよ！見てるこっちの寿命が縮まっちゃう！」

「あ、すみませんびっくりさせて……。作業で何度も乗り降りをするのにラダーを使うのが面倒でつい……。えへへ」

人形のような見た目とは裏腹にかなりのお転婆娘であるソラは、その身体のスペックを存分に発揮し格納庫内を縦横無尽に動き回っていた。乗艦してから初顔合わせとなったマードック達の整備班からしてみれば、労働災害が服を着て駆け回っている様なものだ。しかしソラ自身が現場仕事に理解がある事、機械に愛着を持つて接している様は、彼等としても好印象だった。

「まったく……いくらコーデイネイターつつつてもよ、人間なんだから限界つてもんがあるだろうがよ……。で？用件は」

「はい。ストライクの装備ですが、ソードストライカーパックを最優先で準備して下さい。出力制御のチューニングはこちらで引き受けます。イーゲルシュテルンの補給は無理にしなくても大丈夫ですの
で」

「弾が要らねえつてお前、マジかよ……。相手はどんだけ出て来るか分かんねえつてのに」

「どのみち、コロニー内で襲撃されたらこちらは撃てませんから。75mmの弾はアークエンジェルへ回して下さい」

「そうは言うけどよ、撃たないのと撃てないのじゃ話が違うだろうに……つたく。はいよ」

「お願いします。……あ、そういえば」

「あん？」

ふと思いついた様に、ソラが付け加える。

「フラガ大尉のゼロの修復に関して、ひとつ提案があります……。えと、一応大尉の許可は必要かも知れないんですけど……」

「提案だあ？そりゃ興味深え。聞かせてみな」

「はい、そんなに難しい事じゃないんです。手間は少し掛かるかもですが……」

「俺のゼロを塗り替える？そりゃまたどうして？」

艦橋にムウの間の抜けた声が響く。モニター越しに映るマードックの脇にはソラの姿も見える。

「なんでも、暗い宇宙で目立ち過ぎるって事みてーですよ」

「はい。タダでさえ薄い装甲なのに、狙ってくれと言わんばかりの朱色は流石に……。棺桶みたいな機体だという事は以前少しだけ凶面を見た事があったので知っていましたが、Nジャマー影響下での有視界戦闘において、あれでは殺してくれと言っている様なものです。これからの戦いはジンを相手にするのは訳が違うので、出来る事はやっておくべきかと思ひまして……。その……」

「棺桶って……。言葉遣いもお転婆かよ少尉……。って事らしいですが、どうしますかあ大尉？」

マードックに指摘され思わず口に手を当てる様子のソラを見やり、ムウは苦笑しながらも頷く。

「俺としては特に思い入れがある訳でもないから構わないぜ。嬢ちゃんと言う通り、確かに今後の事を考えたら出来る事はやっときたいってのは同意見だしな」

なんとと言ってもソラお手製の超兵器が4機もコーデイネーターの手に渡ったのだ。それがどういう事を示すか、言葉に出さずともこの場に居る誰もが理解していた。ソラの胸の中に行き場の無い悔しさと悲しみがぶり返す。

「すみません……。ご協力ありがとうございます」

しゅん、とモニターの向こうで小さくなるように落ち込んでしまうソラ。ムウとしてはそういった含みを持たせて言ったつもりは無かったのだが、艦橋のスピーカーからは元気を失ったソラの声が弱々しく吐き出される。ムウはまたしてもしくじった事を悟ると同時に、猛烈な寒気に襲われた。

（い、いかん……。っ！この感じはついさっきの……。ヒイ!?いつの間に!?)

戦場で養われた勘に従いムウが横を見ると、綺麗な笑顔を貼り付けたマリユーが腕を組んで立っている。絶妙に、ソラ達からは見えない位置だ。

「……大尉？」

「い、いや〜！君が謝る事じゃないって！困ったことは何でも言ってくれ！なんでも協力するから！なんでも！」

滝汗を掻きながらムウは口を動かす。余計な事を言っただけを泣かせてみる、殺すぞ、と銃を突き付けられているかの様な恐怖に苛まれないながら、彼はソラを元気付けようと必死にフォローするのだった。

副長席の端末で、艦や機体、メンバーのデータを確認しながら、ナタルはムウ達のやり取りを見ていた。

（なんとという緊張感の無さだ。今がどういう状況か分かっているのか……ん？）

ふと、端末の画面をスクロールするナタルの手が止まる。

（“ソラ・ヤマト”。G計画における5機のG開発主任兼、X-105 ストライクのパイロット……。先ほどの戦闘も襲撃を受けて混乱した状況下での成り行きという訳ではなく、ラミアス大尉の言っていた通り、至極真つ当な彼女の役目だったという訳か。）

ソラの経歴を遡るまでもなく、ナタルは違和感を抱く。悲しい事ではあるが、15歳で従軍していること自体はこの時代において特別珍しい事ではない。問題はその実績だ。

例えば、地球軍における“MSはZAF T軍の殺戮兵器”というイメージを払拭し、“英雄の象徴”へと塗り替えるプロパガンダの為に、天才技術者として先頭に立たせるマスケット、と……。ソラの容姿を見た者であれば、100人中100人がそれで納得するだろう。しかし現実はそのとは異なる。

G計画参加当時14歳の時点で実際にチームのブレインとなり、5機全てを超短期間に構想以上の完成度で生産まで完了させ、ぶっつけ本番の初陣において自らの手で2機の敵MSを撃退して見せた。

（しかも撃退した内の1機に関しては隊長機のシグー。ストラライカーパックに関しては信頼性評価が満足に済んでいないと思われる装備だったが、即実践投入となってもそれは確実に作動、彼女自身もそれ

を使いこなす。そして追い詰められたこの状況と敵の心理状態を利用した作戦がハマリ見事撃退。いくらコーディネイターとはいえ、どう考えても年齢と実力が釣り合わないな……。いや待て、入隊の記録はC・E・68…、ということは12歳か13歳の頃から軍に居るという事か？軍人家系の私ですらアカデミーに居た歳だぞ。当然、例外として入隊を認められたのだろうが……。それがこの”特別育成プログラム開発協力者”として過ごした2年弱か……。？詳しい所属も拠点も記載なし。これは一体……)

ナタルは薄々、これは”触れるとマズいもの”だと気付き始める。彼女の生い立ちの核心に迫るであろう部分が、明らかにぼかさされている。それが軍として都合が悪いからなのか、彼女のプライバシーを考慮しての事なのかは定かではないが、無暗に詮索してもロクな事にはならないだろう。ひとつはつきりしているのは、この追い詰められた現状に立ち向かう頼れる味方であるという事。今はそれで十分だ。

(それにしても……)

改めてソラのプロフィール写真を画面に映したナタルの脳裏に、着艦したストライクからソラが出てきた時の光景が蘇る。

あの瞬間、時が止まった様な気がした。戦闘の余韻でふわりと広がった白銀の髪は周囲に柔らかく光を放ち、あどけないながらも女性の美の究極を体現した様な容姿は、武骨なMSとの対比も相まって神々しささえ感じられた。ナタルはこの時確かに、彼女に見惚れていた。絶望的な状況である事も忘れて、ただただ彼女の存在感に圧倒されていたのだ。

しかしそれも束の間、機体から降りてきて皆の視線をよりダイレクトに感じ取ると、途端に年相応かもう少し幼い少女の様に恥じらいで顔を赤くしてしまった。マリユールの背に隠れたそうにチラチラと様子を伺う姿がなんともいじらしい。

(可愛らしい、か。こんな状況だというのに、私が他人に対してこんな感情を抱くとはな。いや本当に、艦長達の事を言えないかも知れん。……とにかく今は他にやる事が山積みだ。それにあの学生達の避難先も考える必要がある)

自分の思考に整理を付け、席を立とうとしたその時――、

耳障りなアラートが艦橋に響いた。

ナタルが素早く確認する。

「何事だ!？」

「ヘリオポリス内部にジンを複数確認! 真つすぐこちらに向かつて来ています! しかもつ……これはっ! 拠点攻撃用の重爆撃装備です!!」

「何ですって!？」

「つたく……。こっちは撃てない、向こうは撃ち放題ってか?」

「待って下さい! 後ろからもう1機……っ!？」

敵の装備を聞かされ、マリューも、ムウも、ナタルも耳を疑う。が、悪い知らせはそこで終わらない。複数のジンの背後から続いて現れた真紅の機影は――。

「これは……イージス!! X―303イージスです!!」

真紅の機体のコクピットで、アスラン・ザラは不安を掻き消すように呟く。

「ソラがあんな場所に居るなんて、ラストイを……人を躊躇い無く殺す事なんて、ある筈が……! そもそもコーデイナーのあいつが地球軍に居る筈が無いじゃないか……! 大丈夫だ……あいつはソラじゃない……!」

アカデミー時代から苦学を共にした仲間の命は、少し目を離れた瞬間にあまりにも呆気無く失われた。近い将来、最新鋭のMSで目覚ましい活躍をしたであろう彼の人生は、ナイフ一突きで幻となったのだ。

悔しさがこみ上げ歯を食いしばるアスランの耳に、無線からミゲルの声が聞こえて来る。

「目標を補足。流星にあんなデカブツは探すまでも無いな。が、残り

の1機も出て来るだろう。俺とアスランでそいつを抑える。他は戦艦をやれ。アスラン、無理矢理にでも付いて来た根性を見せて貰うぞ」

「……了解」

「全システム、オンライン。いつでも行けます！」

「……アークエンジェル発進！各員、コロニーの擬似重力離脱に伴い発生するGに注意せよ！離脱完了と同時にストライク発進！」

操舵手を務めるノイマンから準備完了の合図が飛び、マリューが号令を下す。

「まさか奪ってから半日も経たずにもう実戦に投入してくるなんて……。正面からのぶつかり合いになるわ。……ヤマト少尉、気を付けて」

「はい。お互い頑張りましょう」

マリューは艦橋のモニタ越しにパイロットスーツ姿のソラと。ソラはコクピットのモニタ越しに艦長服姿のマリューと、互いに目を合わせ、頷き合った後に通信を終了する。

艦体が轟音と共に上昇を開始し、コロニーの回転に逆らう為の強烈な加速が始まる。それから間もなく、マリュー達が造り上げた巨大な構造物は遂に重力から解き放たれた。次はソラの番だ。

「行きましょう、ストライク。正義を笠に着た略奪者達を分からせに――」

首から下げたペンダントに手を当てながら、目を閉じて一呼吸。全身の感覚を研ぎ澄まし、ソラ自身も戦闘モードへと移行する。その吸い込まれそうな瞳は一体どれだけの情報を捉えているのか、それは本人のみぞ知る事だ。

艦首ハッチがゆっくりと開き、暗闇に外界の光が差し込む。やがてそれはストライクの鋭い目つきを照らし出すと、電磁カタパルトのレールが伸び切ったところで、いよいよ制御が”Launch”の指

示を告げた。

「ソラ・ヤマト、行きます!!」

稲妻を帯びながら弾丸の様に射出されたストライクは、尚も加速を続けながらトリコロールに染まって行く。

背中に担いだ長大な対艦刀の最初の餌食になるのは、果たして誰なのか――。